

昭和二年三月三十日印刷  
昭和二年四月一日發行

# 通類媛

第八輯



春·四月號



百花笑ひ

諸鳥囀る

長閑な季節が参りました

散策に、御旅行に

花見に、御観劇に

春の新衣裳、御装身具は

是非高島屋で



お履物お預り廢止

外路同様お氣樂に  
靴まの御出入自由

長堀橋



大阪

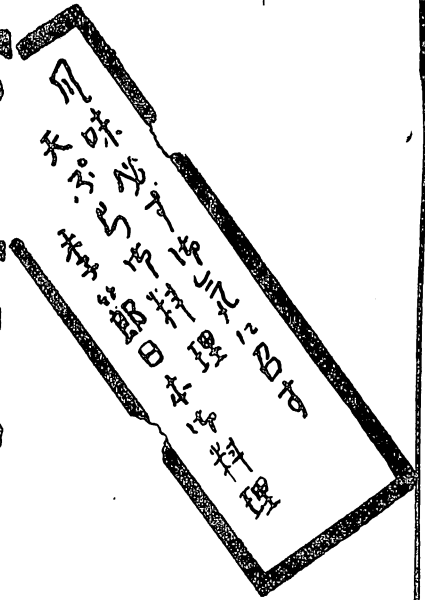
高島屋

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を――



# 吉又屋會食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドングリ橋



昭和二年四月一日發行

道頓堀

四月號・第八輯

表紙・扉

大塚克三

口 四月の道頓堀◇浪花座「都一中」片岡仁左衛門の都太夫一中◇一番目「毛谷村」  
 片岡我童のお園◇實川延若の六助◇故十代目仁左衛門の楠正成◇我童（當時東吉）の  
 正行◇中座「金！金！金！」五郎のアイヌ人◇小次郎の炭鑛家◇故十郎の曾我十郎◇  
 碑文（關直彦氏書）◇角座の新聲劇、中田正造の幡隨院長兵衛◇辻野良一の平井權八  
 ◇松竹座レグユー「春のおどり」月宮殿◇花房彌生の天女◇浪花の街◇飛鳥明子の鳥  
 追ひ◇辨天座「假名手本忠臣藏」文樂の人形淨瑠璃、榮三の大星由良之助

ある立場

白井松次郎 二

喜劇笑論

成瀬無極 四

喜劇への希望

入江來布 七

喜劇・舞踊・春

寺川信 八

歌詞に就て

食滿南北 一五

東京に就て

花柳壽輔 一六

振附に就て

花柳徳之輔 一七

作曲に就て

杵屋正一郎 一七

大道具に就て

大森正男 一八

歌舞伎禮讚

高谷伸 一九

仁左衛門兄弟

高安吸江 三〇

追善に思ひ出す事ども

片岡我童談 三一

毛谷村問答

實川延清若 三二







木村富子



松竹座



松竹座

都一中事蹟考

都 一 中 (芝居見たまし)

片岡十首 (短歌)

回顧一束

劇壇漫語

十郎さんの思出

十郎十いろ

これからの喜劇について

喫煙室

脚 松竹座レヂュー  
春のおどり

浪花座追善狂言

小楠 公 一幕

本 中座四月興行上演

金! 金! 金! 二場

□浪花座役割一覽

□道頓堀だより

□第三回川柳座句會

編輯後記

高原慶三三

素木宗一三五

木村富子三

片岡我童三

姥谷久一四〇

新谷誠水四

藤本福造四

諸家八十有餘氏 四

高橋蓼雨九

食滿南北二

大森痴雪三

楠本木念仁 七

一堺漁人補訂 七

九

一〇〇

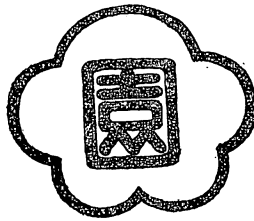
一〇四

一〇四

姥谷生

# 春！和やかな春

すつかりいゝ氣持になつたお芝居氣分に  
ピタツと適つた自慢の猷立……ぜひ御會食を。



## 梅



### お芝居の

幕間と  
お歸りには

お芝居での御食事は食堂にて  
おかへりには白鷹にて一寸一ぶく江戸すしを

## 中座食堂

本店 大左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番



皆様よりあぶら取紙はスキナに限ると

益々御好評を賜つて居ります。

製造元

大阪 中田商店

スキナ屋

# スキナ

あぶら取紙

五色紙白粉

フジ  
トコロ  
サトノ  
クノラ  
ミドリ  
色色

貴女のお粧ひを  
一段と引立てる  
御化粧料！

發賣元

朝日堂株式會社

大阪市北久寶寺町堺筋

各地の化粧品店及び中、浪花、角、辨天の各座賣店  
にあります、何卒「スキナ」を御指定を願ひます。

ほ、笑の

お姿を……………中座三階の

電光寫真……………にて

印象深き一葉に

あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

とても粹な……………

あなたの趣味にピツタと適つた

芝居好みの  
人形玩具

中座賣店の

利久堂





# 春の映畫界を飾る蒲田映畫

◆ 菊池寛氏原作 ◆

・ 三大名畫の内 ・

池田義信監督作品

## 眞珠夫人

栗島すみ子主演

野村芳亭監督作品

## 父歸る

岩田祐吉一人二役主演

菊池寛氏原作

## 新珠

諸口九十・鈴木木傳・明波・筑雪子  
松井千枝・龍田静枝主演



島津保二郎作品

・ 超特作品集 ・

野村芳亭作品

## 白虎隊

蒲田新舊俳優大合同總出演

城戸所長總指揮

## 王政復古

蒲田新舊俳優大合同總出演

清水宏、重宗務共力監督

## 蓮

時代劇部總出演

## 眞田十勇士

野村芳亭作品  
新舊合演 同總出



3



## 善人

『三悪人の珍型』

野村芳亭作品

岩田祐吉主演

松井千枝子

小林十九二

松竹キネマ株式会社提供

抽本映治 助演





# 貸衣袋

小切・小道具

## 松竹衣裳部

本店

大阪市南區久左衛門町八番地

電話 南 四七一八八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五番地

電話 淺草 五五九九番

素人演藝會 春秋温習會

宴會の催物 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘ず御利用下さい  
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます





幕ニ中一都目番ニ

中一夫太都の門衛左仁岡片

行興善追門衛左仁岡片目代十の座花混





家住村谷毛 劍助誓現權山彦 目番一

園おの童我岡片

行興善進門衛左仁調片目代十の座花浪





家住村谷毛 劍助誓現權山彦 目番一

助六村谷毛の若延川實

行具義進門衛左仁蜀片目代十の壺花淇





人ろす善道さ人るれき善道

行正の(吉東時當)童我ご成正楠の門衛左仁代先故

行興善道門衛左仁 圖片目代十の座花浪





場ニ金・金・金四重

島飯の郎次小ミイナツツベの郎五

歌掲木脚に誌本 劇郎五の月四座中





故十郎の曾我十郎

故十郎とは福永と云ふ小説の成なりは表劇能役十郎の神  
 代傳百々として世の人の名を我道家十郎五郎と云ふ二柱  
 此の神代傳伊勢國松坂の生れ一十六松福松といひ廿三才十一初代  
 神村時虎の門に入中御一代と稱一弟の五郎初代之二といひ二  
 代に生れたる東歩松坂の生れ松坂の士の子なりと云ふ八松分を分  
 此人も廿六才府中村湖原のついで一松福松といひ廿三才十一初代  
 長才と號せられたりなりと稱一弟の五郎初代之二といひ二  
 代に生れたる東歩松坂の生れ松坂の士の子なりと云ふ八松分を分  
 此人も廿六才府中村湖原のついで一松福松といひ廿三才十一初代  
 長才と號せられたりなりと稱一弟の五郎初代之二といひ二  
 代に生れたる東歩松坂の生れ松坂の士の子なりと云ふ八松分を分  
 此人も廿六才府中村湖原のついで一松福松といひ廿三才十一初代  
 長才と號せられたりなりと稱一弟の五郎初代之二といひ二  
 代に生れたる東歩松坂の生れ松坂の士の子なりと云ふ八松分を分

故十郎三回忌追善

中座の五郎劇



中田正造の幡隨院長兵衛



角座の新聲劇

額田六郎氏作

俠骨幡隨院

上演

八權井平の一頁野辻





月・月宮殿

花房舞生の天女



りどおの春

—ユツレ 座竹松 回二第





雨・浪花の街

飛鳥明子の鳥道

りさおの春

—ユヅレ 座竹松 回二第



榮三の大星由良之助



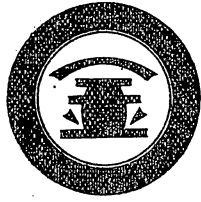
瑞瓊淨形人の樂文

藏 臣 忠 本 手 名 假

行興部二夜靈月四の座天辨

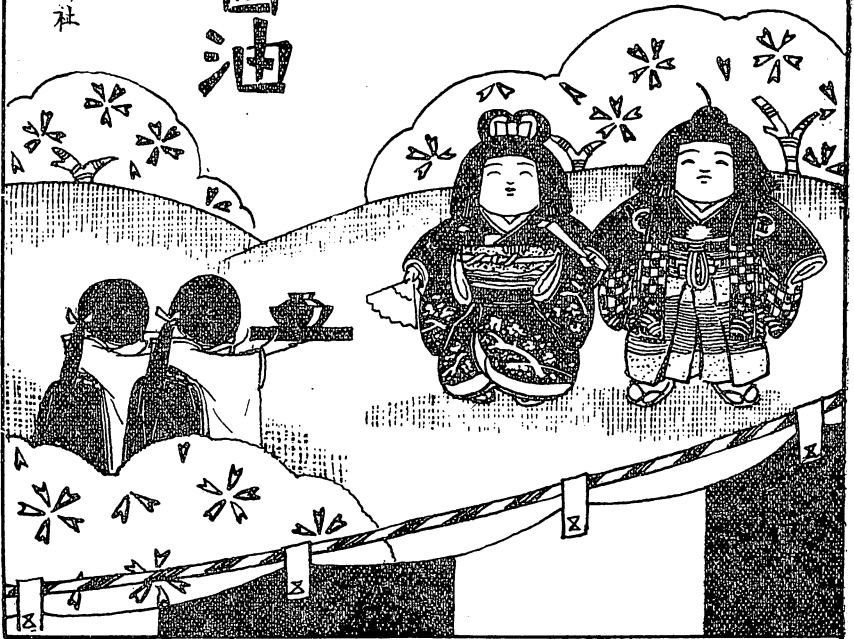
お花魁の

御馳走は



マルキン醬油

丸金醬油株式会社



皇天

とらばんとく  
はてあちのち。

皇天株式会社

板島 肇





# 道 頓 堀



# あ　る　立　場

白　井　松　次　郎

だんくゝに陽氣も加はつて、もうすつかり春らしい時候になりました。花の噂、踊の噂、芝居の噂、それらがまた人の心を浮き立たせてくれます。

道頓堀の四月興行も浪花座の十代目片岡仁左衛門追善劇の關西大歌舞伎、中座の十郎追善劇の五郎一派の二つの追善で、先代仁左氏も十郎氏も共にこの大阪の土地には縁故の深い名人で、その人々を思ふのも意義のないことでないと思ひます。また角座へは新聲劇、辨天座は文樂座の打越して今度は文樂に取つては劃期的な企てとも云ひふべき二部興行の斷行を致しました。その他松竹座の春の踊、樂天地朝日座共に見るべきものゝ多いこそを自畫自識して止まない次第です。

x

さて、十代目片岡仁左衛門氏の追善に、思ひ出されることは當時の上方劇場の花やかな記憶です。

十代目が最初角の芝居へ東京から來演した當時は故人の中村宗十郎や先二代嵐璃寛、市川右團次當時の齋入に中村福助當時の梅玉、また若手として鴈治郎氏等が随分喧しい人氣を博して居ました。私はまた十代の子供でしたが、さうした諸優が人氣を張合つてゐた當時の道頓堀の各座はそれゝ一座毎に座主も違へば太夫元も一所ではなかつた。自然そこに競争が生れて可なりに激しい興行戦が開かれてゐた様です。

十代目仁左衛門氏の死はその興行戦といふ當時の劇壇の大勢を無視して考へない譯には行きません。辨天座に片岡我童から十代目仁左を襲名の際、故齋入氏が一旦出勤を快諾しておき乍らいよくこなつてその約束を反古にして辨天座は競争の形になつてゐる中の芝居に出た。それが十代目を死に至らしめた一内面的原因があるか

の様(よう)に當時(とうじ)喧傳(けんべん)され、また今日(こんにち)に至(いた)るも左様(さやう)世間(せけん)に取沙汰(しよさた)されてゐます。當時(とうじ)のそのいきさつに就(つ)ての真相(じしやう)は既に都下(みやこ)各新聞紙(ごくしんぶん)上に於(お)いて御承知(ごじやうち)存(ぞん)じますから省略(しょうりやう)致しますが、私は劇壇(げくだん)當事者(とうじしや)として最も平明(へいめい)な立場(たちば)からこれを見(み)ますに、決して故齋(こさい)入氏(いりうぢ)が十代目(じゅうだいめ)を死(し)に至(いた)らしめる程(ほど)の不徳(ふとく)義(ぎ)を敢(あ)てられたとは思(おぼ)へません。齋(さい)入氏(いりうぢ)出演(しゅげん)が既に決定(けつてい)されてゐたものが、急に不意(ふい)になつた云(い)ひますが、當時(とうじ)齋(さい)入氏(いりうぢ)は中の芝居(しげ)を背負(せお)つて奮闘(ふんとう)して居(ゐ)られる人氣者(にきしや)でした。中の芝居(しげ)を捨て(すて)てまで友誼(ゆうぎ)に厚(あ)い齋(さい)入氏(いりうぢ)は一旦(いちだん)辨天座(べんてんざ)の襲名(しゆめい)興行(きやう)に出(い)やうと思(おも)はれたのですが、そこに芝居道(しげのぢう)の情實(じやうじつ)と自己(じこ)の立場(たちば)を考(か)へざるを得(え)なかつたのでせう。

私は結果(けつこ)の可否(かひ)を云(い)ふよりも先(まづ)齋(さい)入氏(いりうぢ)の立場(たちば)として辨天座(べんてんざ)に出演(しゅげん)不可能(ふかうな)に陥(おち)入(い)つた動機(どうき)を茲(こゝ)に求めて是(こゝ)に認(ま)んじたいと思(おも)ひます。徳(とく)を缺(か)けて義(ぎ)を立て(た)てるといふのがそんな事(こと)をいふのでせうか、可(か)なり苦(くる)しい立場(たちば)に置(お)かれた事(こと)ご考察(こうさく)する。其頃(そのころ)から見(み)ればずつと時代(じだい)を進(すす)んだ今日(こんにち)でも、もしこんな問題(もんだい)が起(お)つたとしてごうするのが至當(しやう)かご考(か)へさせられます。だがいつの時代(じだい)でも自分(じぶん)は中の芝居(しげ)の立者(たてもの)であるといふ責任(せきにん)ある立場(たちば)を顧慮(こりよ)した齋(さい)入氏(いりうぢ)の義節(ぎせつ)は變(かは)らないものにしたといふと思(おも)ひます。十代目(じゅうだいめ)の場合(ばあひ)の事情(じじやう)は色々(いろいろ)と複雑(ふくざつ)した關係(かへい)もあつたのでせうが、

×

それから文樂座(ぶんがくざ)を二部興行(にぶきやう)にしたについては一方(ひう)には若手奨勵(わかつてせうれい)、また一方(ひう)には時間短縮(じかんたんしゆく)の新時代化(しんじだいは)を見ていただきたいと思(おも)ひます。晝(ひる)の部の假名手本(なまてほん)忠臣藏(ちゆうしんざう)でも従來(じゆらい)の文樂座(ぶんがくざ)としては幹部(かんばん)以上の老練家(らうれんか)に依(よ)つて語(かた)られてゐた場(ば)をも、今度(こんど)は若手(わかつて)でぎんぐ語(かた)る様(よう)にしました。また夜(よ)の部の『義經(ぎぎやう)千本櫻(せんぼんざくら)』もさうした點(ち)に大(おほ)いに意(い)を用(もち)いて語(かた)り場(ば)を割(わ)つてあります。

同座(どうざ)の興行時間(きやうぎじかん)は習慣(じゆげん)上(じやう)從來(じゆらい)は午前(ごぜん)十一時頃(じゆじゆ)から夜(よ)の十時頃(じゆじゆ)迄(まで)を一回(いちど)としてブツ通(ぶつと)して居(ゐ)ましたが、こゝにばかりが時代(じだい)に伴(とも)はぬ制度(せいど)なのに省(か)りて二部制(にぶせい)にし、短時間(たんじかん)の間に文樂座(ぶんがくざ)全部(ぜんぶ)の太夫(たいふ)を聴(き)けるやうに致(いた)しました。この點(ち)に大(おほ)いに賛同(さんどう)の意(い)を表(あらわ)して、一層(いちじやう)の奮闘(ふんとう)を誓(ちか)はれた同座(どうざ)の太夫(たいふ)三味線(みづまゐ)人形(にんぎやう)の諸氏(しよし)にも深く感謝(かんしゃ)するご同時(どうじ)に一般愛好家(いぱんあいきや)諸氏(しよし)にも大(おほ)いに認(ま)めていただきたいと思(おも)存(ぞん)じます。



# 喜劇笑論

成瀬無極

の苦味を見出すであらう。

これはベルグソン一流の如何にも面白い、巧妙な比喩である。また『笑』には多少とも利己心が在り、更に利己心の背後に厭世心の萌芽が在るに云つてゐる。然し果して笑ひはそのやうに利己的厭世的のものであらうか。私はフオルケルトなども認めてゐるやうに、笑ひにも樂天的のものも、厭世的のものも肯定したいのである。さうもベルグソンは私の考へてゐる、諷刺、『譏諷』に當る種類の笑ひのみを認めて、所謂『有情滑稽』の方面は閑却してゐるやうに想はれる。私は絶対に同情を排斥した冷やかな懲罰的乃至矯正的の笑ひばかりで無く、深い同情と識見とが結び付いた温かい笑ひをも認めたいのである、ゲエテの言葉に『學者をして争はしめよ、教

海の面を見るに底は深い平和を保つてゐるに係はらず、波濤が小熄なく闕かつてゐる。打ち合ひ、衝き合ひして平均を得やうと努めてゐる。その變轉極まりなき曲線には輕快な白い泡が附いてゐる。波の引いた跡の磯邊にはこの泡が残つてゐる。傍に遊んでゐる子供がそこへ来て一掬掌中に集めてみるに、忽ち僅ばかりの水滴に變つて失舞ふので不思議に思ふが、嘗めてみるに、この泡は寄せて来た浪よりも遙に塩辛く且苦い。『笑』の生ずるや全然この泡のやうなものである。笑ひは社會の表面に於ける凡ての小さい擾亂を示してゐる。笑ひは利己にこの葛藤の變り易い諸相を描く。笑ひはまた塩辛いものである。そして泡のやうに輕快である。そして哲學者がその數滴を集めて味はつてみるに、その少量の中に多く



師をして嚴肅に、また慎重にあらしめよ。最も賢明なるものは常に微笑す。痴者は翻弄すれば足れり』といふのがある。これは一方から見れば明かに利己的態度ではあるが、この『微笑』の中には深い人生の洞察から来た静かな同情が潜んでゐるのであるまいか、また同じゲエテは『官能的人物は屢々笑ふべきことなきに笑ひ、知的人物は殆ど萬事を笑ひ、理性的人物は殆ど笑ふことなし』と云つてゐる。これは『最も賢明なるものは常に微笑す』と云つたの矛盾するやうであるが、よく考へてみるにさうでは無いのである。官能的人物の笑ひといふのは、例の官能の快感から来る反射的の笑ひであつて最も低級なものである。知的人物の笑ひは鋭い悟性の作用であつて、『かの諷刺』『譏諷』の類である。即ち冷やかな苦い利己的な笑ひである。さて理性的人物の殆ど笑ひはないといふのは、たゞ悟性の光で世上の矛盾を認めても、一方に深い理解から生ずる温かい同情があるので、之を嘲笑するこゝが出来ないのである。然しかういふ人には一種舞臺の笑ひがあるに相違ない。唇邊に漂ふ懐しい微笑があるに相違ない。この微笑は人生の表裏を見透した人がする會心の笑、慈悲の笑ひである。人事を盡して天命を樂む平和な笑ひである。笑ひもこゝまでゆくに宗教的意味が添はつて来る。

『笑ひは解脱なり』といふのもこの妙諦を云つたものであらう。そこで笑ひの方面から近代人を觀るにメルテスとその『喜劇論』の中に擧げた三種類に分つこゝが出来来る。第一は *Comic* で、これは『笑はぬ人』第二は *Tragicomic* で笑ひを憎む人、第三は *Hypercentastic* で、これは無暗に笑ふ人である。三者とも笑ひを解せぬ人である。緊張した近代生活は幾多の *Agonies* や *Misogonies* を生む、これは誠に痛ましいが、致し方も無いことである。『生きる』といふ問題に没頭してゐては中々笑ふ餘裕はあるまい。自分が笑はず、または笑ひえないので、人の笑ふのが馬鹿々々しく、腹立たしくなつて来る。中には左程生活に追はれないでも、實利一方の生活をして少しも精進に餘裕の無い人、また悟性ばかり發達して少しも趣味の無い人は笑はず、または性々笑ひを惡むのである。『守錢奴』や『術學者』や、ある意味の『清教徒』はそれである。

然るにかういふ風に一方に笑ひが失はれて行くに、その苦痛に堪へられない人が出て来る。笑ひたくても笑へない人々は落莫なる沙原に一草の草花を戀しがるやうなものである。然し水の無いところには花は咲かないので止むを得ず、笑ひ

を買はうとする。この要求に應ずるものが近代非常に勢力を  
えてきた輕快な、滑稽的文學乃至演藝であつて、それは人生  
の表面を撫てゆく微風のやうなもので、専ら疲れた官能に媚  
るやうに努め、時には涙脆い人の情緒に觸み着いて『涙の下  
に笑はせ』やうにするのである。笑ひを失つた近代人が争つ  
て之に赴くのも尤もな次第である。そしてまた審の轉んだの  
にも笑ふといふ官能的の *Hyperelastis* は勿論いつの世にも  
あるが、唯この『笑ひ過ぎる人々』が『笑はぬ人々』に變る  
程度が時代によつて違ふのである。

明るい温かな華やかな、健全な笑ひが如何に若い男女の面  
から失はれ、そして如何にして再び戻つて來たかといふ、そ  
の消息を描いたケルレルの小説『失はれたる笑』 *Die verlora-  
ne Lachen* を讀むと人生そのものをしみつゝ味はふことが出  
來る。ケルレルは沙翁、ゲーテ以後最大のフロリストであ  
る。ケルレルの笑ひは神の笑ひを催して居る。

私は動もすれば實利一方に走る現代に再び健全な笑ひが歸  
つて來ることを祈るものである。冷やかな笑ひ、苦き笑ひの  
みで無く温かい光明的の笑ひが歸つて來る日を祝福するもの  
である。

右は舊著文學に現れたる『笑ひの研究』からの抜萃である  
が、今、喜劇の本質に就ての意見を徵せられてみるに、遺憾  
ながら、根本に於て、多く之に加ふべきものを持たない、若  
し附け加へるにすれば、昨年九月の『文學』誌に載せられ  
たクルト・エツセルブリユツグ氏の「ユウモアの心理」に關  
する論文から次の諸點を引用する位のものである。  
「有措滑稽は強い精神的感動力、深い感情的感動の中間  
に立つ。」

即ち純倫理的嚴肅の同情的感激の中間に立つて、人生に  
對して不即不離の態度を執り、諸々の背理を理解ある微笑を  
以て迎へるのがユウモアの態度である。

「ユウモアは更に進んで魂の夜の方面、即ち無意義的薄明界  
をも洞察する。外見上少しも滑稽的でないところにも笑ひは  
潜んでゐるのである。」

この見方は新しいとおもふ。例のフロイドの精神分析學か  
らヒントを得たやうであるが、これからの喜劇はこの認識下  
の世界へまで入り込まなければならぬ。表面に現れた皮相  
の滑稽、何人にも笑ひと思はれる笑ひのみを掴んでゐたので  
は、動もすれば單なる機りやに墮する虞がある。『二階樓敷が  
抱腹絶倒するとき、平場の客は啜り泣きをする』といふ言葉

の意味を深く味はふべきである。  
「ユウモアは現實の汝ちを否定し、自分の中に住む汝ち即ち光明に向つて努力精進する人間性を肯定する」  
これは、結局、前述の不即不離の態度と一致するものであ

る。  
要するにユウモアは、我は人間なり、すべて人間的なものにして我に疎遠あるものあることなしと云つた羅馬の詩人の心から生れ出る。

## 喜劇への希望 入江來布

◆輿論とか、多数の希望とかいふことも、豫想して考へるの、實際に起る現象とは餘程違ふ。例へば劍戟劇のあれほぎに流行する前に、誰れか「この次は劍戟劇が起るべきだ」と言ひ當てた人があらう、同様に「次に來るべき喜劇は」の一部のものが言つて見た所で、大抵それは「希望」にとどまつて、實際は却つて豫想に反しまたは豫想もつかぬ方向へ走つて行く。

◆我々の希望を言へば、今日の所謂寫實的なものを一轉してほし  
いのである、寫實も淡泊のうち  
に現世相を寫してそこに何か一  
種の微笑を含むといふ風のもの  
はい、が、從來五郎君が最も得  
意として居た社會を教訓するん  
だといふ風の意圖を含んだ寫實  
ものは面白くない、ほんまうに  
忠實な寫實ならばいゝのだが、  
これ等は寫實の如く見せてさう  
でない所が趣味なのである。  
◆言つても、事實は豫想や希望  
には頓着なく、却つてます、  
所謂教訓的寫實喜劇が繁昌する  
かも知れない、併し少くも五郎

君が喜劇轉換の鍵を握らうとす  
るならば、教訓を一轉して諷刺  
を裏に潜めた一種の世相劇の方  
向へ進んで貰ひたい、例へば「  
「ホーゼ」の如きがあれば喜劇と  
言つてよいかさうか知らないが  
一つのヒントになりはしまいか  
と思ふ、五郎君は近く渡米する  
さいふ事であるが、さうか目標  
をさういふ所に置いて、いゝも  
のを掴んで來てほしい。

(旅中にて)



# 喜劇・舞踊・春

寺川 信

◇草履取から天下取りになる、こいふことは吾國では太閤記だけのことで、傳説以外には餘り現實世界では見かけない、又聞込もせないことである。

當人の才識だけでは如何にもならず、財團、郷黨、輿論なごいふが、関があるからその當人が出世するのでなく、関が利用されるべく當人が招きよせないのに、近寄つて来たのが多いらしい、賢悪正邪も當にならない、ヒョんな様子で宰相大臣たり得るのであるから、實際世のなかのこは不可解である。

不可解であるから『神』だの『運命』だのこ『遠い彼方の世界に支配者を認めて、不確定なものに縋りたがる、人間は解らないものである。一切のものに解剖批判を加へて、正確に明瞭を要求するかと思ふこ、眞理探究の爲には死をも辭

せないのに、結局は、朦朧不確實なものに最後の依り所を求めてゐるのである。

生活を少しでも散文化することに成功すれば、それを處世上の勝利者と目することに、誰も否定せない、然るにその實は『夢』と『詩』をもち深い奥底から求めてゐるのである。

右すれば左したがる、愛すればこを憎む、讚美すればする程、批難するのが人間の不思議な通性であるらしい。

眞理を追究することは、其の窮極に於て眞理を否定することであり、科學は宗教を破るのでなく、反對に再建するものであるらしい。

◇常易の生活する現實世界は、自分自身は勿論、何方を向いても悲劇に満ちてゐる、現代も次代も過去の時代も『悲劇』

で通貫してゐる。

その説明に釋迦やクリストを推してこなくとも、この世が即是『悲劇』であることは誰も否定せないのであらう。

富者は富むが故に悲しみが有り、貧者は貧に依つて悲苦がある、飽満の悲しみも、求めて得られない悲しみも、所詮は同一であるであらう。

征服する者も被征服者にも悲は變りない。生も死も悲劇である。

◇人生即ち悲劇であるが故に『喜劇』は靈魂の底の底から要求されるのである。對象的に觀られるけれども、極端は相一致するのが地球上の定則であるならば、『喜劇』は見處を換た喜劇であるかもしれない。さうせ人間は自己に全然異つた『空氣』を吸つては生きて行ない生物に出来てゐる。

悲惱のはての涙も、笑ひの絶頂の涙も等しく眼から流れ出て、同じ快感をさそふものである。

◇モリエールの描く世界を裏返しにすれば人生の最大悲劇面である、バナナアード、シヨウは皮肉な泣き笑ひを登場人物に表現してゐる、チャリイ、チャプリンの『喜劇映畫』は悲劇を笑ひの砂糖まぶしにすることに成功してゐるに過ない。其處に彼の映畫に社會的存在價值を見出し得るわけであるま

◇生活が散文化するから、その反對の『音樂』や『舞踊』の節奏の世界が欣求されることになるのである。

殊に『舞踊』は吾々の苦惱の多い散文的な現實世界から解放してくれる。

故に『舞踊』は飽まで自由であり、自然であり、奔放不羈でありたい。

◇舞踊は春の如く、花の如くに明るく美しくあるべきである凡ゆるもの、新しく甦がへるの『春』である。生長そのものゝ姿である。

花は自分の爲に咲き且つ匂ふ、決して他の爲に、又は第二第三義の目的を濟ませない、『舞踊』は何處迄も『舞踊』の爲の舞踊でありたい。

◇舞踊がその独自の本然の立場に在る時、始めて舞踊は吾々の人生に必須な香味料となるわけである。

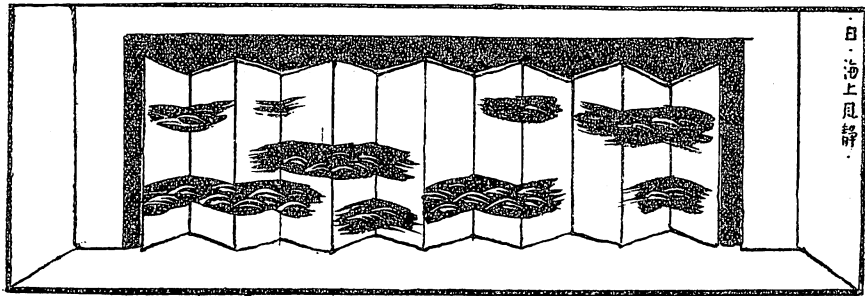
◇青春の時には青春の、壯年には壯年時の、老齡には老齡の各特有の『舞踊』がある、例ひ同一の節奏の運動動作であつても、各個性に生て來るのが『舞踊』である。

故に舞踊は美しく、畏ろしいのである。

◇『喜劇』も『舞踊』は春山の霞の如く、現實世界を枯死せしめない『うるほひ』である。



日・海上風靜



松竹座樂劇部女生總出演

# 春のむせり

第二回

御空 こよみ

作歌 食 滿 南 北

## 第一日 海上風靜

本調子

夫れ波濤を疊む萬水も

したゝる昔の露よりぞ

清輝を滌ぐ月ならで

風も靜かの海原に

寶船こぐ初日の出

二上り あかつきの

頭にサツミ立烏帽子

其日の影に烏こび合

こつぱひこふた御代の春

波の鼓の合 三うぐい



うつや海邊の 本調子 磯馴松  
踊る姿も映畫の合  
春を奏で、舞はうよの合

第二月 月宮殿

本調子 曇らぬを

神代のまゝの心ぞご合  
空にいさめて澄む月の合  
影わだづみの底ふかく  
照りわたりたる月宮の

三下り

殿のおばしまビョン〜ミ  
鬼うさぎ何見てはねる

ほんにまん丸十五夜の  
月見團子を見てはねる

ヤンサめでたの杵の音合

本調子

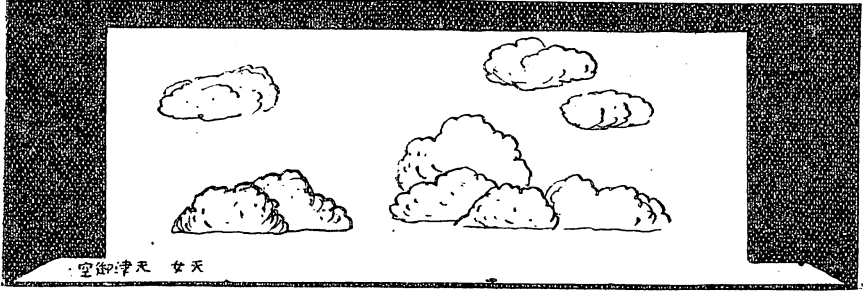
お日様いくつ合 十三七ツ

若いおごしの桂の君に合

千代三筆通ふ神

まいらせ候の立姿合

文して、た手拍子の



空御淨天 女天

シヤンくくくご  
 卯月の空に  
 奔る兎の影さやか。

第二 天女 天津御空

歌詞を用ゐず。すべて洋楽の  
 伴奏による一段の舞踊

第四 雨 浪迷の街

三下り

いづれも様の町々を  
 せじよやまんじよの鳥追姿

かすみ三すじの世わたりに合

行きちがふたる懸想文合

梅につけたるかすくくに合

八重にもつれて戀ごろも合

おつしまつたりお使ひは合

つかひ韋駄天がつてんか

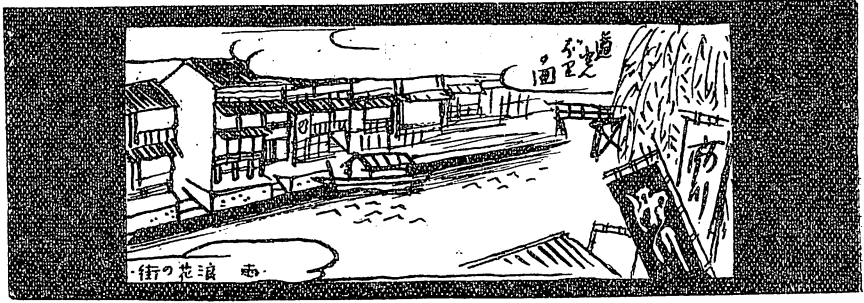
ねんねの守もごこへ行た

あの山越へて里へいた

里のみやけに

貰ふた物は





木調子

でん／＼太鼓笙の笛  
夜半に目ざめて

木の葉にかゝる

音は何やら片時雨

急がさんすな

濡るゝをいこへ

いづれ晴れまつ野路の雨

面白や

折から空にひきはけの

その薄雲にバラ／＼と

時雨に急ぐ右左

あわてふためき

行くあさは

晴れて雲間に

虹のはし。

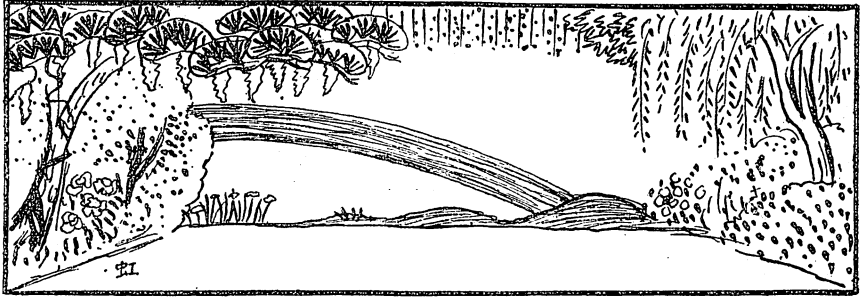
## 第五 虹

鼓

唄 天空に

夕陽をうけていろ／＼の

そのかけはしの美しさ



二上り

消えてたもんな

いつノ、までも

かけたかけ橋

はしのまゝ合

一つ色素を

七つに分けて合

色さまゝの交錯の合

和洋二部合奏  
めぐるむらさき

うす桃色に

紺にだいぐい合

うこんに藍に合

みぎりに赤よ虹の色合

末は南か北半球の

いづちに消えて

行衛はしらぬ合

早落方にうすあかり。

振	振	同(鳴物)	同(洋樂)	作	曲	柁屋止一郎	振	附	花柳壽三郎
附	附	花柳壽輔	望月大津吉	壺尻精八	舞臺意匠	高田雅夫	附	附	大森正男
花柳德之輔	壽輔	舞臺制作	背景制作	舞臺照明	伴	榮晴	附	附	橋本義晴



## 第二回「春の踊」に就て

食 満 南 北

- 春の踊は何處かに處女演らしいにはひがぬけなかつた。無論第一に私の作歌があまりにがくけき部の女生徒を識らなすぎた爲め、第二の梅の巻なんざいふものが出来たわけだ。
- おのり  
 ◇しかし今年は大分に去年の失敗をくりかへさないやうに注意して見た。處が、ここしのは尠しき氣になりすぎはしないかといふやうな案じはないでもない。
- (日・日)  
 ◇つまり去年の型を崩さないやうにして、しかも去年のやうにならない程度に大分苦心をはらつたわけである。
- 静風  
 ◇尠し短かくして見る、所謂『あつく』といふ處をばういて見たのである。
- 春の踊  
 ◇浪花の街で頗る花柳式の所謂『舞臺らしい踊』といふものをこゝろみだが果してそれが調和するか否かは問題である。
- 虹  
 ◇最後の虹の場合は、去年の櫻と違つて、色彩的に非常な變化があるだらうといふ自信をもつてゐる。
- 春の踊  
 ◇一體『春の踊』なんていふものは、そんなにむつかしい皮肉な振はつけなくつてもよいと思ふ。大勢の人数をさういふ色彩にあつかふか、が一つの苦心ではなからうか、『春の舞』ではない。何處までも『春の踊』で行きたい。
- 大森君  
 ◇配景なごも大森君が何ぞか意見があるだらうが、つまり「大まか」なさいふ處をねらつて見たのである。
- 花柳流  
 ◇かくけき部の生徒と花柳流の踊とはちよつと相入れぬ點がある。それはが



くけき部の生徒は芝居を知らない。花柳は全然芝居流である處にちよつと距離がある。しかし其處に又非常な面白い矛盾から来る「錯綜の統一」までいふやうな結果が生じてゐる。これは松竹と花柳とを合はした、松柳流でもいふやうな一つの型が出来てゐる。これは是非見て貰らひたいと思ふ。

◆無論年一年むつかしくなつて行くことだと思ふ。高田雅夫氏も天女の振に可なり苦心をはらはれたことを認めらる。去年のチュリツブにならぬやうにさうして日本踊から西洋踊にうつる轉調に最注意してゐられる。花柳徳之輔氏も亦其邊に大分苦心があつた。

◆すべてを一任して見た、主任千葉氏の意見に、あまりにコンモンセンスではなからうかと思つてゐられた。それも面白からうと思ふ。

◆それに新しい試みとして、子供の兎の踊を加へて見た。これは可愛らしいミカ無邪氣なミカ、心持よく見てゐられ

るミカ云つたやうな大衆的な處を狙つたのである。

◆要するに、松竹座の『春の踊』は廓の踊ではない。廓の踊がつてゐるやうな『舞臺色彩』は狙らつてゐない。

## 『春の踊』に就て

花柳壽輔

◆實際、松竹座の『春の踊』の振附を引受けましたのは、第一回をチャンミ見て置いたおかけです。

◆つまり呼吸はのみ込めてゐます、本當は出かけて行つて親しく手をさるの

ですが、新橋の踊を引受てしまつたものですから、南北氏や、大森さん、それに飛鳥さんなど来て頂て、東京の宅で大半は附けて仕舞つたので、細かいところは花柳徳之輔と花柳壽三郎を大阪へやつたわけです。つまり二人を通

◆がくけき部の『春の踊』には何處やらに處女らしい『恥かしさ』をいつたやうな尊いものを、いつまでも持たして置きたいと思ふ。

じて私の振を見て頂きたいと思ひます  
◆高田雅夫さんが天女の振を附けられるさうですが、日本の舞踊から西洋の舞踊に移つてゆく轉調には大分苦心をなされたこと、思ひます。

◆大阪から何の便りもありません。松竹座からも何とも云つて來ないところを見るに、壽三郎も生きて種古をつけてゐる事だらうと思ひます。

◆兎角初日には出かけてみやうと思ひます。

# 『春の踊』の振附に就て

花柳徳之輔

十六年もかゝるでせうか。呵々。  
◇『雨』の處の列踊は、初めは鈔し呼吸がのみ込めぬやうでしたが、熱心によつてゐる内にだん／＼たくみになつて來たやうです。これは今度の内で、この踊としては目新しく見えるだらうと自信を持つてゐます。

## 『春の踊』作曲に就て

杵屋正一郎

◇芦邊踊は大分手がけてゐますが、松竹のがくげき部は今年初めてやつて見ただので、大分に勝手が違ひました。ダンスは大分にやつてゐられるやうですが、日本風の踊、殊に花柳流なものは初めてのやうで、教へる方も骨が折れましたが、さぞ習ふ方も骨が折れた事と思ひます。

◇特に『浪花の街』で、鳥追、子僧、子守、懸想文賣と云つた風な特種な者が出て來て可なり短かい歌詞の間にそれ／＼の氣分と花柳獨特の味を見せなければならぬので、大分に苦心をしたわけです。

◇この生徒衆はダンスの心持があるだけに、大勢が波さか何さかの振でズレ一同からだをひく處なきは全く旨いと思ひます。これなら連獅子の出な

ぎに見物の中へ落ちるなごいふ事はなからうと思ひます。しかし出だけですよ。丸ごかしは却々まだ／＼でせう。

◇第一回は少し眞面目すぎたやうで、作曲しながら氣がつまつたやうな心持でしたが今度はちよつと粹にくだけて見たつもりです。しかし『春の踊』は毎年ある氣持を變へて見たいと思ひます。

◇洋樂と合奏のころは去年も大分に困りました。こゝしもあれに囚はれないうやうに、塩尻精八氏を宅に來て貰つてやつて見たのです。

◇それに第一回は櫻さいふので、歌詞も櫻がちるさか、文句に活殺があつた爲め手も付けやすかつたのですが、虹さいふので、これも大分囚はれました。

◇鬼のころは、ジャズ風に、尤も耳新しく附けたつもりです。鬼だから耳新しいのかも知れませぬ。

# 『春の踊』大道具に就て

大 森 正 男

金で雲形を飛ばした模様のフレームの中に、紫地に花模様のあるインナーカーテンが下りてゐます。その前で踊子が二人序曲を舞ひます。

◇美しい踊子が大勢出て踊るこいふ以外に美しい大道具背景があらゆる趣好をこらして變化するこいふ事は、如何にも春の踊らしい特色になつてゐます。

點ては誠に不自由に出来てゐるので——一例をあげますと、床面から下へは一寸も下げられない點。左右へ引張り込む餘地のない點。

◇毎年各演舞場でも、そうした工風がこらされてゐる様です。それに主として寫真的な背景を置くこみが流行してゐる様です。各地の名所なごをその儘に寫生したり（例へば今年の堀江の踊の木曾の寢醒床）又は自然の現象を特別な照明装置で表はしたり（同じく堀江の鳴門の場の如き照明で、日の暮れるこみや波を表はす等）するこみがよくあります。

◇その中で幾場面も造るこいふ事は、可成り皆さまのお氣のつかない苦勞が御座います。

◇各演舞場の舞臺はそうした大道具を飾るのに適した様に設計されてあります。こころが松竹座の舞臺はそうした

◇去年も心がけたこみですが、今年も出来るだけ美しいもの、踊と調和したものを作りたいと思つて居ます。

◇大體今年の舞臺の計畫を申し上げます。

◇第一——海上風靜。

◇……こいつたやうな舞臺です。

◇……こいつたやうな舞臺です。

◇……こいつたやうな舞臺です。

◇……こいつたやうな舞臺です。





# 歌 舞 伎 禮 讚

高  
谷  
伸

歌舞伎芝居の味は詩のおもしろさである。

歌舞伎芝居の美しさは繪のうつくしさである。

歌舞伎芝居に求めるものは現實の世界よりも夢幻の世界である。醜い寫實よりも寧ろ美しい誇張である。

理詰でひた押しにくるある種類の演劇はすでに成り立ちから違つてゐるのである。

思想はかはる。世相もかはる。

理屈さいふものは時代につれてかはる。従つて、むかしはあたりまへの事が今では不思議になり、むかしは奇妙であつたことが今では當然になることもある。

しかし、美を求めぬ心、美に酔ふ心、これだけはかはらない。

歌舞伎の生命はこれを把んでゐる所にある。

もちろん、ひき口に歌舞伎といつても、能樂の様式から何歩も出てゐない創始時代から近頃の新歌舞伎劇までを、總括した名稱をみれば、かなり多種多様であつて、中には所謂現代人が見ても、理屈に適つてゐるものもある。だから言つて理屈の尺度を標準にして大聲で時代錯誤を叫び荒唐無稽と呼ぶのは早計である。

わたしたちは歌舞伎に色彩の美しさを感じる。

わかしたちは歌舞伎に音樂のおもしろさを感じる。

わたしたちは歌舞伎にものゝあはれを感じる。

そしてわたしたちは歌舞伎に酔ふ。

しかし、わたしたち明治二十年代に生れた人間にも、寶の

詮議に愛身をやつす人は勿論親の敵には必ず刃を加へねばならぬといふ理屈にも、びつたり同感できないかなしさがあ  
る程であるから、それ以上の若い人達にもつゝ強い時代の  
差が感じられるではあらうが、春さきの暖かい草屋の日だま  
りに、子供らしい美しい着物のかけてある情景には、誰しも  
心ひかれるものであらうと思ふ。これは便宜上一例として毛  
谷村をひいたのであるが野崎の早咲の梅にかゝる紙鷲、舟  
駕籠、金閣寺の雪姫にふりかゝる落花の舞なごの情趣なき、  
いろ／＼棄てがたい味がある。片岡直次郎は金子市之丞の口  
をからなくとも、きざな御家人であり、取るにも足りねえ木  
つ葉野郎たきつけにしか無らぬ奴である。だが、あの牙えか  
へる春の寒さといふ清元をきくミ、やくざな人間を離れて甘  
い戀の陶醉境にこもに遊ぶ感じがあるではないか。

この味に歌舞伎の價值があるのであつて、この味が歌舞伎  
の生命を支配する。古い名脚本がいくらあつてもこの味の出  
ない限り反古であり、味さへ失せねば歌舞伎の生命は永遠で  
ある。

この味を味はふ力、それは美を感じる素質と教養の如何で  
ある。

毛谷村のお園にしても梅の木蔭に立つた虚無僧姿、武道に

秀でゝゐても女はやはり女である。しよんほり立つた姿に旅  
から旅へ敵を求めて行く女のあはれが感じられる。また花道  
に立つて尺八をふりあげた姿には黒の法衣に黄の天蓋、その  
中にたゞ一つなまめく水色の手甲が浮世繪の美しさを見せ、  
江戸好みのお園さなれば梅幸漬する薄紫の着附が一層艶つ  
ほく見せるではないか。そのお園が男姿に馴れて旅から旅へ  
ささまよふうち六助に逢つて女心の蕪つてくるそのなまめ  
かしさ、きまりきまりの姿態の美しさを認めるまでに、今の  
人はまづ女が片手で大白を扱ふ所作を荒唐無稽さ嗤ふではな  
いか。しかもその笑ふ人が人見ながしを女流運動家なご、  
稱して賞讃を極め怪しまない始末である。

洋服を着て男まがひの運動に得々たる女さ男にも優る力を  
もちながら女らしい羞恥を失はない女さ、そのごちらに同感  
が持ち得るかといふことこそ考へて欲しい。

しかも歌舞伎は、かうした皮肉な一例を手近にもちながら  
荒唐無稽さ罵られ、ひいてはその美しさまで覆はれやうとし  
てゐる。

わたしは歌舞伎芝居のために涙ぐましいまでに、いきさほ  
りを感じる。

世の中の移るのは争ふことのできないことである。たゞ、

人が移り行く世の勢ひに押されて純粹の批判をする暇のないことをかなしむ。

しかし、むかしの寫實劇であつた世話狂言の味の薄れて行くのは一步譲れば止むを得ない勢ひだともいへる。が、時代狂言の象徴的な面白さは、どこまでも主張することが出来るこれは、なまなか寫實を重視しないだけ、どこまでも時代を超越した強みをもつてゐる名は時代物で、時代を超越してゐるさいふのも皮肉な言ひかただが、それらの狂言に現れた色彩の對比、舞臺配置の整齊なき、絶對的な強味をもつてゐるものがある。

妹背山の山の段に見る舞臺上の整齊、忠臣藏九段目の由良之助一家と本藏一家の人たちの衣裳の配合、先代萩床下の赤と青の對比なき擧げてくれば限りないまでに數多くの例を持つてゐるのみならず、きまりきまり、講目の見得に見る錦繪の美しさは、歌舞伎の絶對的な力である。

さうした舞臺上の渾然たる統一は、古來の名優が演出上の苦心に苦心を重ね、練りに練つて作りあげた完全な結果である。そしてその座頭の持つ權力が舞臺上の統率に役立つて演出者としての効果をも收めてゐた。

明治中期に團十郎によつて唱へられた所謂活歴は、要する

に歴史上の寫實主義であつて超寫實の點に強味のある時代物を寫實の流れに引き込まうとした矛盾で、團十郎の技倆によつて大きな破綻も生じなかつたが、夜討會我的演出の如き失敗も残したものである。

團十郎の偉さはその人物に心酔した結果その失敗さへも模倣され、また時代を同じふして舞臺に育つた現代の老優にも一部の穿鑿辭を残し、時代劇の冒瀆も二三ならず試みられた時代劇の筋立人物には今の人にまつてあまりに縁遠いものが多いが、扮装なきには時代を無視してかへつて色彩的効果を擧げてゐるものがある。怪奇に近いおもしろさ、そのみで立派に存在價值を主張してゐるものさへある。

それに對して小刀細工の穿鑿は、自ら墓穴を掘るものである。かうした誤つた擬り性の俳優を正道に導き、眞の歌舞伎劇の舞臺上の統一をはかる演出者は、それが俳優である否否に拘らず、今後ますます必要であると同時に、その人さへ得れば歌舞伎はまだまだ滅びないと思ふ。

歌舞伎劇の内容が、おい／＼一般に遠ざかつて行くのは抗ふことのできない時勢であるにしても、歌舞伎劇の持つ色彩や音樂の効果その情緒は、時勢を超えた永久の生命を持つ魅力だと思ふ。



歌舞伎劇に理屈は不用だと思ふ。  
見る、聞く、感じる。

要するにそれだけでよいと思ふ。それ以外に必要なものがありすれば、それは演出上の記録である。これは研究者にの



# 仁左衛門兄弟

高安吸江

みではあるが缺くここのできないものである。  
歌舞伎を愛することはそのよさを感じ得るもの、みに與へられた特權である。  
それを感じるものには愛さないのである

仁左衛門襲名披露興行を企て、果さず、今から三十二年前  
即ち明治廿八年四月に四十五才で逝いた、先代我輩について  
私の記憶は甚貧弱であるが、その中でもよく覚えて居るの  
は、同廿一年に久しぶりで歸阪した時の御目見え狂言賢女鑑  
の片桐且元と、それから上演の年月は忘れたがさんさん三吉  
である。此れは偶然にも彼の藝の両面を語るもので、私には  
此のうち且元よりも、三吉の方が遙に美しい印象を残したが  
一般の世評もそうであつたらしい。

明治八年以來彼が東京に滞在した十二年間、當代の花形と  
謳はれた時代を回顧するに、彼は三十三四才でもう八陣の加  
藤や、薄雪の三人笑ひで幸崎伊賀守なごをやつて居る。無論  
この若さでは荷が勝ち過ぎ、無理な出し物であるが、自分に  
も承知してか、一生懸命大切に勤め、場當りなごもせず、安  
外仕てのけたこの評で、さすがの六二連もその度胸に感服し  
た云ふことであつた。加藤は襲名披露にも出す筈であつた  
狂言だが、毒酒や船の場なごの拵へは、古來からの紋切形を

グツト換え、すべて大遊で團十郎流の桃山譚（地震加藤）式になつた爲め大分問題であつたらしい。それでも先年彼の父が、始めは寺子屋、中は小栗栖、切の天主でやつき清正らしくなつた爲め、松王日向守清正の評を得た、その先代仁左衛門よりも無難であつたのは手柄云ふべきである。

しかし此人の本領云へば、やはり薄雪の妻平や來國俊、彦山の毛谷村六助、それから新血屋敷の磯部主計之助、これは殊に當り役で、上京以來の出来大そう譽められて居る。

明治十八年二月に新築落成した千歳座で、山伏攝待や水天宮利生深川が出た時、教絶に源太景季、二番目で質店の山岡富三郎なごを演つてすべて好評『此文近頃メキく腕前を上げられ、當て込ッ氣が無くなり、大劇場の俳優になられました云々』この贊辭を得たのを見ても、その一般は窺はれる。

當代無比の和事師と稱せられ、人にゆづらぬ品格をもつた坂東家橋の實兄に、意氣で風流な五代目菊五郎があつたのと同じやうに、多少の覇氣は家に傳はる血のせいであらふから別として、穩かで大様な先代我童の弟に俠骨稜々、負けぬ氣の我當即ち今の仁左衛門が居る。

團菊没後一時劇界が暗黒になつたか怪ぶまれた頃に上京して、歌舞伎座で大文字屋の助右衛門を演じ、始めて老人役

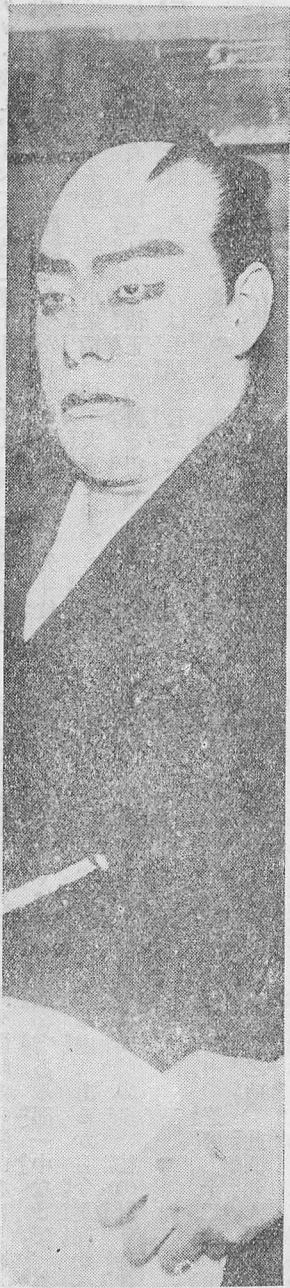
こしての眞價を認められ、爾來櫻時雨の紹由をはじめ、柿右衛門、來山、さては今回上演の噂ある都一中なぎで、名人の稱を得たことは、沉く人の知る處であるから今更練かへす必要はあるまい。それよりも寧ろ興味の多い彼の壯年時代について少しく話して見やう。

私が彼を始めて見たのは、其昔中の芝居で十二時の忠臣蔵が出た時で、先代の嵐璃寛が内藏之助、此間死んだ葉村屋の和三郎時代で主税、當時の我當がお目見得こして勘平を勤めたのを覚えて居る。その後彼は多く菊五郎畑の役を演じて居つたが、その五代目同様に細かい藝であるこの世評を既にその頃から得て居た。それについて今に忘れない一例がある。

それは四千兩の富藏で、琥珀郎の藤十郎と共に大成功の芝居であつたが、熊右宿温飽屋の場、舅六兵衛や女房と愁歎の間に、彼は蚤を取つて居たのである。若しこれが田舎家の穢しさをあらはすために試みられた仕草であつたなら、それはあまりに極端な細かさであるし、或は偶然にも實際蚤が飛び出したのであつたならば、それは彼があまりに舞臺に餘裕をもつて居つた爲であつたとも考へられる。

全くの處彼は極度の細かい藝と共に、過剩に餘裕を示すことが多かつた。忠臣蔵の殿中で、鴈治郎の判官に對して彼の

師直は、さんふの嘲罵に耐えかねた判官が、憤然こ立ちか  
 かる時、スツト上手の襖の内へ逃げ込み、相手が茫然と途方  
 に暮たさき、又ノソノこ出で、後を續けた、なごは其尤も  
 甚しい例である。それ程になくとも毎興行、大抵中日以後  
 には、よくこのあまりに絆々たる餘裕に出くはし、私等は徒  
 らに驚異の眼を瞠るのみであつた。しかし彼自身の立場から  
 考へるに、彼の眼中には、その相手になつて彼に不慮の努力  
 と緊張を要求する様な、威力のある俳優が無いらしく、そ  
 れ程に彼は偉大で、従つて孤立である。私共は此點に於て甚  
 だ氣の毒に思ひ、彼自身並に見物の幸福の爲には、今少し彼  
 が下手であつたなら、なごも考へて見たことさへあつた。  
 話術に巧だつた菊五郎がその辯舌で喝采を得たもの、例へ



濱壽 花座 西郷の 豚姫 三郎の 西郷の 助之

ばこゝや茶碗の娘の次良吉なごは亦彼の當り藝の一ツであつ  
 た。私は見ないが、牡丹燈籠の伴藏なごも恐らく同様であら  
 ぶ。(上演したか否は知らないが) 即ち後年來山その他での  
 あの巧妙な臺辭まはしは、既に若い頃から彼が得意に屬する  
 ものであつた。  
 英國では俳優のスピーチがあまりに拙劣になつたので、シ  
 エターの滅亡が叫ばれて居るこいふ話であるが、吾劇界に於  
 ても舊劇の人々でさへ、臺辭の妙を稱すべきものが極めて少  
 い今日、基礎の義太夫を充分消化しきつた上に築きあげた、  
 獨特の雄辯法を會得して居る吾が仁左衛門は、殊に此點に於  
 て今の若手の是非學ばねばならぬ人である。



芝居見たま、

都 一 中

素 木 宗 一

幕が明くさ、すぐ眼に映るものは、この場「山谷堀」中借宅の、下手の塗壁に掛つてゐる古い三味線である。

その三味線のすゝたが、言はず語りのこの芝居のたましひを話しかけて来るやうな氣がする……

座敷の隅で須賀千三郎(橋三郎)も淨瑠璃本の寫しをしてゐる。此處の一中の今はたつた一人の若い弟子で優しい横顔をもつてゐる。隣家の船宿の娘、おすむ(霞仙)がこの傍で仕立てた着物を千三郎に着せやうとしてゐるが、寫し本に夢中になつてゐるので、返辭もさすれば、うはの空になりがちだし、どうやら蒼蠅さうにもされる。

『らし！』と娘の聲を辨立てる。「お前はどの頃何處ぞに女子ができたのでござんしよ。何時も夜になるご内に、やしやんせぬ……毎晩何處へお出かけて御座んすぞえ」

おすむの法界格氣からしてみること、千三郎にはの字らしい。「え、あんまりぢやわいなあ」と持つて来た着物を叩きつける、黠くちやに揉む、泣く——と、手がつけられないで持つて餘してゐるごころへ、義太夫語りの彌七惣後節流し三根助、假色つかひの勘八、大盡舞の金太、四人連でドヤドヤ門口へ探し飽ぐんだ恰好で遣つて来た。「お、こゝだ」到頭彌七が表札をめつける。踏込む。「お、手前だ、よくも毎晩吉原へ入込んで、ちごらら

邪魔をしぐさつたな！」「ふた、び仲へ行かれえやう、ご性をぶちのめしてやらあ！」と口々に凄い權幕なのだ。千三郎は黙つて俯伏せる、おすむは臍を潰して船宿の勝手口へ

「お爺さん！」

「見りやあ、お前方は吉原を流して歩く藝人達だも、人の家へ押かけて、近所隣もねえやうな……いつたい、こいつは、どうしたのだ？」

と船宿の亭主、長兵衛(卯三郎)も走つて来て千三郎を双手で背後に庇つた。四人の言分によるご、この千三郎が仲間へ挨拶をせずに毎晩吉原を流すので、美男の千三郎のため流し仲間が稼業を苦くな横取されたやうな形になつてしまつてゐる。「まあ、當人は京都から下つて来たばかりの、江戸の勝手を知らぬ者が、こゝは私にめんじて引取つて下され」長兵衛の苦勞援けた「あつかひ」で金包み丸貰つて、四人は先刻の權幕も何處へやら

ペコペコと頭ばかり下げて花道にかゝる。

「それにつけても、こなた、なんで流しにな  
ご出なすつた？」

「お話いたすも面目ない事ながら、どうぞ聞  
いて下さりませ」千三郎が手を支へるご合  
方が涙つぱく科白を縫ひはじめる。——都一

中の名も時節に合はれれば誰一人、弟子入りす  
る者もなく、その日暮しの苦しさを、千三郎

に知らせまい師匠一中の氣配り、見るに見か  
れて夜毎の流し——「もろうて歸る露の代で

二人が命を繋いでまゐりました」  
歸つて来て先刻から門口でこの述懐を偷

聞してゐた都一中(仁左衛門)は去り氣ない風  
で這入る。

『お隣の長兵衛さん、こつちから上らうと思  
うてゐたところ……私も急に思ひ立つて京都

へ歸るつもりぢや』  
『それでは私一人、江戸に残るのでござりま

すか？』  
『お、おぬしは後にのこりおすがごのさ夫

婦になつて、一中節をひろめて呉りやれ」  
かう言ひ出せば後へ退かぬ一中の氣質を

呑み込んでゐる船宿長兵衛が娘を連れて歸つ  
たあとに、一中はわが膝もとへ千三郎を寄ら

した。  
そして四代目一中を名乗つて女房に隣のお

すが持てて説いたが、千三郎は生涯女房は  
持たぬ心だと言ふ。この都一中が女房に小供

を連れて逃げられた昔のごごもな、子供心  
に眺めて來た千三郎、女は怖ろしいものと決

め込んでゐるのだ。一中も今江戸三界へ迷ひ  
出て十七年の苦勞も言はゞ連れ流女房のハ

心得からでないか。一中はその事よりも一緒  
にその時連れられて行つた娘お鶴の身の上に

かゝつてゐた。相手の男も江戸と聞いて巡り  
會ふごもあらうか、と、江戸で住む十七年

——言はゞわが子を尋ねたい、その爲であつ  
たのだ。

お鶴は今年十九の娘ざかり、母親が家出し  
た朝、人形を持つてあそんでゐたが、その人

形の右の耳を撈り取つてワツと泣出した、そ  
の顔が今もなほ眼のまへにチラついて……忘  
れられぬ」

師弟の物語は流れる涙ごにも盡きる所か  
ない。其處へ板倉屋の下女おしまが、一中の家

を：しながら出て來て、「お嬢さまは一中節  
をお稽古したいと仰言るのでお願いに出た

ので御座ります」と頼んだが、一中はモウ止め  
た、けれど弟子の千三郎を使はしませう、

になるが船宿のおすが相手も大家のお嬢様  
と聞いて、またも氣を採み出す。そのうち下

女の口からお嬢さま、生れが京と聞いて、「一  
中が江戸の名残り、これから上つてお稽古を

して進ませせう」と立ち上る。

×  
「桶場板倉屋療の場」——板倉屋治右衛門は

娘お文我童が、旗本水野頼母の分家、水野金  
之助(千代之助)を戀ひ慕つての餘り、此頃は  
枕に就いての氣患ひをしてゐる所から、娘可  
愛さに此の家へ出入りする旗本黒川久太夫(

壽三郎)に仔細を打明けて助力を頼むのだつた。

が、先方は旗本、娘は町人、身分の相違から来る不縁を思つて久太夫も二の足を踏みかけたが、治右衛門も其處を無理にも屈けて必死の頼みに久太夫は自分の養女として不及なから内談してみやう、と言つた工合に話も漕ぎ着いて治右衛門は「ご安心する。」

『夕ぐれの隅田川、好い眺めでござりますなわ』

おしまに案内されて一中も出る。その隅田川の眺めもかうしてゐる今日一日も少時名残を惜しんで佇んでゐる。

『今そこへ行て、お師匠さんにお眼にかかりませう』

若い娘の聲も奥から聞える、一中は首をか上げて咳く。

『あれは女房お清が聲に、そつくりぢや、はて、なあ……』

大きく腕を拱れくさ、頬をひらいて戀病に

わすらつたお文が出る。見るこゝわ女房の風貌にそつくり!

『お！こなたは！』

驚いて双手を出したのも一中は夢中、その素頓狂な態度にお文も吃驚して退つた。上手に治右衛門も——一中を覗いて、これも身を

のめらせて驚いた。この三ツの驚きが各自の形にキマる。本釣鐘も、封印するやうにひやく。四邊も段々暗くなる、春の夜のなやましい園に花びらが一枚、絲繻するやうに散つて

くる。こゝろで一幕日はおしまひ——

『板倉屋店先の場』——も、筋書御免!

娘お文の誕生日であり、水野金の助が招かれるその當日である。店先の手代、丁稚等は

番頭から言ひ含められて、此頃では毎日のやうにお文の留守を使つて都一中を訪れて来る

と追返してゐる。こゝへ船宿の長兵衛が機嫌伺ひに訪れる。この長兵衛と番頭忠八との會話で、先代の板倉屋が死んだ時に世繼がなか

つたのを、伯父舅の間柄から今の治右衛門も上方から娘を連れて歸つて相續した等、仄かにも都一中の女房と密通した男もこの家の治右衛門であり、連れて歸つた娘お文も、どうやら一中の娘お鶴であるらしいこゝろが模糊としてあらはれる。

『お文どのが御店へ歸つてから毎日尋ねて行けど、いつも留守で顔を見ることができぬ、今日はあひたいものぢやなあ』

花道に一中もはかなく現れる。

が、丁稚の挨拶は『今日も留守なら明日も留守、とつごま歸らつしやれ……』である。

それにしても一中節も奥から聞えてくる。一中は困じた。

『それへ參るは都の太夫でないか』水野金の助が背後から呼び止めた。『拙者はお文どの頼みにて只今其方の宅へ迎ひにまゐつたのぢや、丁度よいわ、師匠一緒にまゐらう』で道具も廻る。

「同、座敷の場」——お文も三味線を弾いてゐる處へ、女中に案内されて一中が出る。

お文は店へ歸つて半月からさ言うもの、三日にあげず呼びに上げた手紙に何故返辭をして呉れなんだ、と怨みましく言うのだった。「もうお師匠さんにお目にかゝれぬかと思つて、わたしや又病氣になりさうでござんした」

一中は金之助の祝言が今夜に返辭があるを聞いて、「どうぞ、あなたと水野様の縁を結んで進んぜたら、好い一對の夫婦もできるでござろう」と言ひながら、フト、人形の箱を眼に留めた。お文も小さい時から玩具にした古い人形として、一中の胸に一種言ひ難い懐しみの情が滾然と吹き上る。

「そんならあなたの誕生日は？」  
「享保元年四月十日の生れでござんす」  
「あの十九年前の四月十日……早う人形を見せて下され！」まさかと思ひながら手に取つて人形の首を眺めた、右の耳がない。「シテ

母御の名は何と言ひまする？」

「お清でござります」

「あの！お清——うむ」

もう口も利けなかつた。番頭忠八がお文を連れて座敷を出て行く跡に、

「これお鶴、俺はそなたの親ぢや、たつた今まで、じつこのわが娘と知らなんだ」とお文の前で言ひたかつたことを、一人になつて始めて涙を流しなむら言ふ。

「いよいよ御祝儀も近づきましたゆえ、ひまづ、お禮百はお止めに致します。些少ながら今日までのお禮、お納めなされて下さりませ」何も知らぬおしまが金包も持つて含められたまの挨拶に出た。忠八も「ありやう言へば、あなたを日那樣がお嫌ひなさるのだ。」と突堅食に言ふ。「ごもかくも、今夜はお歸り下さりませ、その中に私をお迎ひに上ります」  
おしまに取なされて審り乍ら一中は不性無精に歸つて行く。金包も受取らずに歸つて

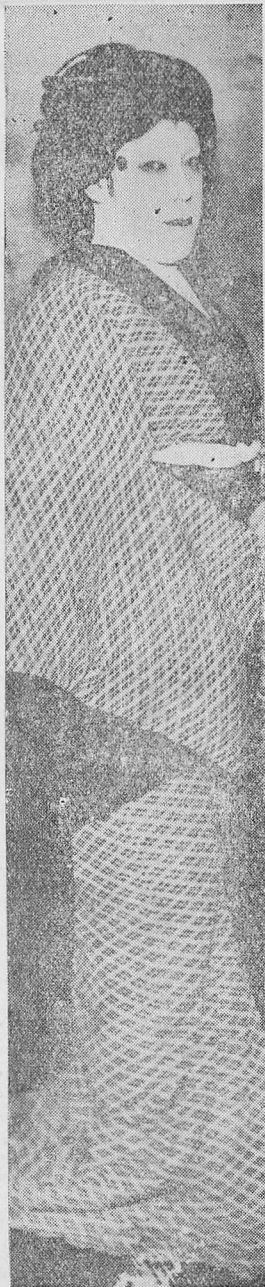
行つた跡を「可笑しな爺だ」と忠八が嗤つてゐる。お文も立つ戻て来て忠八に「少し尋れる事がある」とひらきなほつた。頼んだ手紙を師匠に一通も渡さず、又、師匠も毎日のやうに來ても留守をばうて何故歸した。「それは、その……さあ、それは」で忠八眼を白黒させて吃るのを「この治右衛門が言ひつけてさせたのぢや」  
奥から治右衛門も出た。

「あなたの爲にならぬ故、それで仲を割いたのぢや。心のまわつたあの一中……」

「かう言うこともあらうかぞ、歸る振りして聞いて居た、よくも一中を心の曲つた悪人にしをつたなあ」  
歸つた筈の一中が隆から血想變へてさび出した。

「あ、コレ、師匠！言ひたい事もあらうが、先づ俺の話から聞いて下され……」と娘を奥へ這入らせて「一中ごの、あの娘を知つてゐるか」





延若のたぶ姫

『知らいでならうか……俺の娘ぢや』

『こなたの血を分けた娘を知つてゐるなら、何も言はずに居て下され』昔の不行跡聞かせて娘に嘆きをかけて何なる、俺が憎からうが何事も、娘不慮に免じて一中ごの……治右衛門は伏拜んだ。お、一中の癖んだ心ばひさすじに娘を連れて京へ歸るさ言ひ張る。

このさなかにお文も出た。

『お父さま！』

お、果してそれは執力の親に呼びかけた聲であらう。治右衛門も一中も凝然となつて息を呑む。娘は一中に近づいた。ごちらも氣で氣でない。

『お師匠さん、父も得心の行きますやう、よ

う話を下さりましたかえ』

その眼にいつげい涙を貯めて聲ふるはせながら言つたのはこれ！一中も黙つて頷いてみせた。

黒川久太夫と水野金の助が案内されて這入つてくる。水野頼母にも祝言に異議なし喜びを携へて「否、この縁談は」治右衛門も言ひかけたのを、「何も言はつしやるな。私はこのお悦びを見て、明日は京へ立ちまする」始めて朗らかに眼を輝して一中もそれを押し止めた。お文は泣く。

『もう此の世では重れてお目にかくれぬ爺に泣き顔見せて下さりませ、私もこのさほり笑ふて居ります、へへへへ』と涙でにちん

だ苦しい笑ひ顔をして見せる。

『さやうなら、モウ、お暇をいたしませう』と起上る。

『もし！お……』行きかける袂に細嚙みついたお文は一中の老顔を沁々こ『お、お師匠さん！』

『幾末かけてかばらぬ御縁を』こわも子ならわも子と言へぬ娘の身體抱寄せるのむ頭

『祈りますぞや』

治右衛門は耐らず隆の手を合掌して泣く。娘も泣いてゐる。昔も泣く。たちもたの恩愛の絆を、今、娘のために断つたのだから、これ泣かずに見られやうか、さ筆記者も不覺の涙もホロリ！同時に幕もトリリ！（終）

# 追善に就いて思ひ出す事ども

## 片岡我童談



（童我）奴供（門衛左仁目代十）見後

我當の後は實弟の秀太郎（現在の仁左衛門）をして嗣がすこにした。

土之助は江戸淺草今戸十二番地の實家に生れたが、丁度その年は父（八代目）の厄年に當つてゐたので、昔から厄年の兒は育たぬといふ迷信を恐れて、一旦捨子にされ縁類者である先々代嵐璃寛が拾ひあげ名も土が産んだ土之助に附けたのだと云ふ逸話も残つてゐるが、彼が八代目に死別したのは、文久三年道頓堀角座の正月興行で（八代目は當時我童と云つてゐた）出し物は『傾城總神故』（さんく三吉）で我童（八代目）は若黨八藏、船頭梶六、慶政檢校、莫屋三吉で我當の伊達の興作、土之助は丁稚を演つてゐたが、八代目はこの狂言中に病死したので土之助（當時十三歳）弟秀太郎（當時七歳）は巡禮姿に仕立てられ、涙ぐましい口上を述べて見物の同情を惹いたといふことである。殊に八代目死後土之助から松若と改名して、中國四國九州各地巡業中は、彼の一生を通じて最も尊い試練時代さといふべく、あらゆる困難に

古今を通じて長壽を謳はれた人の中に三浦大助百〇六歳の名があるが、八代目仁左衛門（先代仁左衛門の父）はその三浦大助の三男であつた、それが七代目片岡の娘の養子となり後に八代目を嗣いだだが、彼には子供がなかつたそのために先代我當（先代片岡市藏の兄に當る人）を養子に迎へたが、世に所謂儼みつ兒の謂ある如く、我當を迎へるの間もなく土之助（十代目）秀太郎（十一代目）ツネの三人の兄弟が相次いで生れた。従つて後日九代目襲名に就いては種々物議を醸したが、これは何れも義を重んじる義兄弟の美しい心の逆りで、八代目の實子土之助に家督を譲らんとした我當はその一生を我當の名に終つた、然し義に厚い土之助は後松島家を嗣ぐに當つて十代目を名乗り、既に故人となつてゐた義兄我當を立て、九代目とした。そして

鬪つたが、後間もなく我童を襲名して東上するに、猿若町の猿若座及び、明治座の前身千歳座に據つて一躍帝都の人氣を一身に集めるに至つた。當時は常に先代市川團藏、五代目菊五郎、九代目團十郎、先代權十郎等ミ一座してゐるが、我童の勘平で歌右衛門のお輕は當時の呼物であつたなご、彼の合方は多く歌右衛門に依つてなされてゐた。

越えて明治二十一年九月再び畿内巡業の途に登り、名古屋新守座を始め豊橋濱松から岐阜早六日づゝの興行は大變な人氣であつた。京都に先代の菩提所がある所から、この畿内の巡業を終るに、京都へ寄つたが、それが縁となり、當時道頓堀の角の芝居の「大清」云ふ仕打から手代の荒井を使ひに立て、一座は大阪に迎へられる事となり、愈々角の芝居箱月興行は、中村宗十郎先々代嵐璃寛先代市川右團次（後に齋仁）先代阪東壽三郎松島家兄弟（我當我童）等當時の東西大名題揃ひで、一番目が「傾城總神故」（さんく／＼三吉）中幕は宗十郎の俊寛で「鬼界ヶ島」二番目は「賢女鑑」の八ツ目を「名大阪最負片岡」にして、我童の片岡造酒頭、大切は右團次の「吉野山」であつたが、一番目は先代我童の死んだ時の狂言なごで東京の秀太郎は盛んに擔いで兄の身邊を氣遣つたさうであるが、幸ひに何事もなくこの興行は打ち揚げ同時に非常な人氣を呼んで、其れ以來大阪に引き止まる事になつた。

最初生國魂神社の附近の千方樓を宿にしてゐるが、南波の榮亭の二階を借りるに其處に引き移つた、それから間もない事であつたが、榮亭の主人である老婆の斡旋で「古娘連」といふ芝居連中が組織された。以來會も幾多の變遷を経て、今日尙古娘會の名に依つて繼續されてゐるが、この會は先代仁左衛門が我童時代彼のために組織された後援會なのである。

東京で鍛えあげたゞめか、總じて十代目は滋味もあり色氣もありそし、品位もあるに云つた様な役を得意にしてゐた。「梅忠」「夕ぎり伊左衛門」「三七馬切」などは松島家の藝として特に定評あるものであつたが「富士見加藤」の加藤「片桐忠義」の根津右衛門「先代萩」の頼兼仁木強正等が最も得意の役々で、大阪では齋入（先代右團次）梅玉（福助時代）故多見藏（多見之助時代）先々代璃寛先代吉三郎等ミ常に行動を共にしてゐた。

最後の舞臺は京都の南座で、明治廿七年の顔見世興行であつた。一番目が「忠臣藏」で鷹治郎の勘平で我童（十代目）は師直ミ由良の助ミ定九郎の三役を勤め、尙二番目「保名」では保名ミ奴の與勘平を演つてゐるが、この狂言中大鷹加答兒を病んで舞臺を休むの止むなきに至つた、そのために由良之助は鷹治郎が、保名は福助が替はり役をした（住田生）



# 都一中事蹟考

高 原 慶 三

◆仁左衛門が久しぶりに故榎本破笠氏遺作『都一中』を出す所のだが、この狂言は、外言は、外國物の焼直しだから、事實の存否は保證出來ぬし、主人公の都三中は何代目の一中に當る人か、それを穿さくするのも甚だ野暮な話、それかミ云つて主人公を都一中としたならば歴史上の實在人物だけにあまり空しく虚構な脚色もできない、そこで題名を『都一中』と大きく觸れ出して主人公を都三中ににけた處、故人仲々味をやつてゐる。ミ云つてその都一中がどの程度まで實在の人物かといふ證據があつたか、これもツヒ最近までは頗るほんやりした記録しかなかつたのである。

一中は元來、本願寺派の僧なり、山本土佐椽、松本治太夫等の流れを和らけ、一流を語り出せり、亂髮にて十徳を着白き長袴をはきて出語したりさなむ(竹豊故事)ほんのこの程度にしかならなかつた。ミころが、一中歿し

て享保九年二百年、大正十二年春淺い頃、その實在を裏書するに動かすべからざる確證をつかみ得た。

京都市堺町御池東入る、明福寺住職青池周郁師は代々眞宗本願寺派にて、十七代の法脈、血脈を受けてゐるが同寺の過去帳中に三代目周意の息に惠俊なるものがあつた。

(過去帳) 享保九年五月十四日歿、法名周可(前名惠俊)都入夫一中、性、音前を好み品行、正良ならずして寺を繼ぐを欲せず、船頭町に別居す。

この旨を認めて、大津市石場、義仲寺無名庵なる瀬川露城宗匠に一通を寄せられた。宗匠はそこで只今高津吉助跡に住せらるゝ宇治派一中節の名取る寺村鐵光氏等と相談つて、未見の小生を特に指名されて都一中の生誕事蹟發表のこころを打明けられた。

◆そこで宗匠三人は青池師を訪れて寺記等によつて詳細に



調べ上げた結果、いよ／＼一中の存在を邦樂史上に立派に登載出来る文献が二三現るゝに到つた、即ち『寺記』による寛文九年巳酉十月十五日、本山より、當寺門徒に當てたる許川狀一通あり文に

明福寺死後實子無に付弟惠俊後住並に自分刺刀差許すこ見ゆ

時推して之を考ふれば周閑師(一中の兄)歿後一百日に當る明福寺は周閑師を指し弟惠俊は即ち一中法名(後周可)なり

これを按ずるに一中は最初惠俊と云つて三代住職周意師の二男で兄周閑師四代となり周閑歿後一時五代となるのだつたが寺世を繼がず性・音曲を好んで遂に濁俗し都人夫一中と名のつて、一中の流れをはじめたのであつた。

又、一中の妻は周恵といひ六條光隆寺の開基智空師の女で一中と周恵の間に出來た周謙は父の代りに明福寺五代の住職となつたことが明かになつたその周謙が竹豊故事中にある、一中の子が和泉嫁とあつて二代目一中となつたその血脈的關係、及び女婚の三中といふからには娘の正體は何か? なるに、少し事詳細に亘るので未だ調査の機を得ない。墓はさだかにそれは分らぬが明福寺代々の墓所が洛東烏邊山の半腹にある以上、恐らくそこに一中は永き眠りについでるこ

ことが想像されるのである。

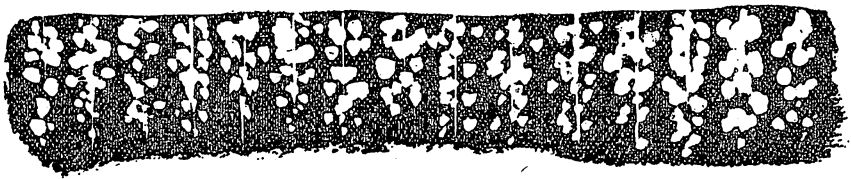
引續いて畫像も出た。これは今ハッキリ記憶に存しないが、聲曲願察中にある如く、後水尾帝の御前演奏をした時の總髮に十徳、法眼袴といふ出立ちでなく、何でも頭は圓めてゐたやうに思はれる。たゞひ、品行不良と過去帳には記してゐるこはいへ、世俗でいふやうな乞食坊主で、更々ないことを請合つておく。又、須賀千林と云ふ名に對しては十分疑義がはさまれるのであるが、或は法名の周可、即ち須賀と同首なる故そこに多少の脈絡がないでもない。

◇微力なる我々ごもの調査によつて、さにもかくにも都一中の事蹟について、邦樂史上に有力なる資料を發表なし得たこゝに頗る欣快する處であつた。されば大正十五年一月版の高野辰之博士の大著『日本歌謡史』中にも

……一中はもミ京都本願寺派明福寺の第三世周意の子惠俊なる者に起つた。……(中略)

……歿したのは京都の地で享保九年五月十四日(從來の世説では享保八年だつたのを博士は明かにこれで訂正せられてゐる)即ち近松巢林子と同年であつた。

ミ、我々の發表に據つてゐられる。以て至上の光榮とするものである。



片岡十首

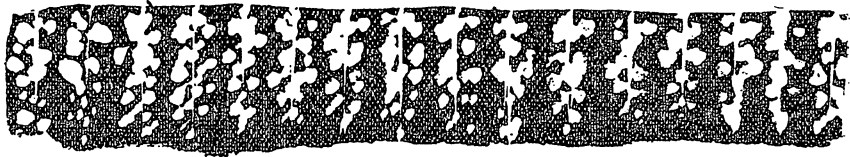
木村富子

一中がかい抱きたる耳なしの人形さへもかなしきものを

友禪の炬燵ふさんミ伊左衛門の紙衣を照らす宵のもし火

貰切る音ミ媪の副唄ミ淋しうまじる岡崎の雪

忍ぶ夜の伏編笠に床しきは應山公の紫ふくさ



主<sup>ぬし</sup>やたれ時<sup>とき</sup>雨<sup>あめ</sup>に追<sup>お</sup>はれ行<sup>な</sup>める軒<sup>のき</sup>端<sup>は</sup>つたふてかをる柴<sup>しば</sup>舟<sup>ふね</sup>

幕<sup>まく</sup>閉<sup>と</sup>ぢぬ眼<sup>め</sup>に悲<sup>かな</sup>しうも残<sup>のこ</sup>れるはいもすさまじき且<sup>かつ</sup>元<sup>もと</sup>の顔<sup>かほ</sup>

さんな又<sup>また</sup>あろかこ唄<sup>うた</sup>ふ與<sup>よ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>ろう</sup>につれて小<sup>こ</sup>猿<sup>ざる</sup>が踊<sup>おど</sup>るあはれさ

行<sup>ゆき</sup>燈<sup>とう</sup>の灯<sup>ひ</sup>に浮<sup>う</sup>きいでぬ淨<sup>きよ</sup>閑<sup>かん</sup>がやる方<sup>かた</sup>なけの淋<sup>さび</sup>しきひこみ

やうくく<sup>く</sup>に赤<sup>あか</sup>繪<sup>え</sup>は成<sup>な</sup>れき柿<sup>かき</sup>右<sup>みぎ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>が笑<sup>わら</sup>ふ聲<sup>こゑ</sup>音<sup>ね</sup>のうつろなるかな

名<sup>な</sup>物<sup>ぶつ</sup>の富<sup>ふ</sup>士<sup>じ</sup>見<sup>み</sup>白<sup>しろ</sup>酒<sup>しゅ</sup>召<sup>めい</sup>せこいふ氣<sup>き</sup>散<sup>さん</sup>じらしき床<sup>とこ</sup>の連<sup>つ</sup>れびき



(門衛左仁目代) 正彈木仁

## 回顧一束

### 片岡我童

父(十代目)の亡くなった時ですか……

さうです明治二十八年でしたから、私が十四歳の時でした、何しろ前年の京都顔見世興行の途中に病氣(大膳加答兒)で倒れたのが、漸く全治して、いよいよ四月一日から十代目仁左衛門の襲名披露と共に全快後最初の舞臺に立つさいふので、とても人變な人氣でした、劇場は辨天座で、出し物は得意の『八陣守護城』で表飾りもすっかり出来、初日を待つばかりになって再び發病したわけですから、私達初め、表方の狼狽

振つたらありませんでした止むを得ず初日を伸ばす事にして、極力看病に勤めました

がその甲斐もなく、遂々四月の十五日に他界してしまひました。勿論父の病中も辨天座の表飾りもそのままにしてあつたものだから、葬式を済ますと、そのころ齋入さん等と共に中の芝居に出てゐた叔父の我當(十一代目仁左衛門)は折角襲名披露の準備に骨を折つて戴いたお客先や仕打に對して濟まぬさいつて兄(故人)に代り、漸く翌五月に初日を出しました。

え、さうです、その時私は二代目土之助を襲名しました、その披露も叔父が云つて呉れました。

×

え！ いえ、その時ぢやありません、初舞臺はずつと前です、私が三つの歳でしたから明治十七年でしたけれど……今の明治座が未だ千歳座と呼ばれてゐた時分で然もその柿葺落興行が初舞臺です、父(當時我童)が團十郎さん一座してゐましたので『將來役者として立たせるなら、又さないこんな機に初舞臺を踏ませたらどうだ……』と云つて下すつた團十郎さんの言葉に父もその氣になつたんでせう、口上も團十郎さんと父と二人で云つて呉れましたが、何んぞ云つても三つの時の事ですからね、本當にその時の記憶は臆氣です。

初舞臺の話はこの位にして先刻の續きに移りませう。

×

問題の辨天座を打ち上げると、私は母と共に叔父に連れられて、名古屋の末廣座に行きました、『鞍馬山』の牛若を演つて、こ



くても叔父が口上をのべて呉れましたが、この興行中に、叔父から改めて私の行末に附いて、私自身に相談がありました。父を喪つて間もない私に未だ纏つた考へがあらう筈もありませんでした。母は父に逝かれて其の涙の跡も乾かぬ中に、私までも手放す氣にはなれなかつたのでせう、それに今一つは、役者の十四歳から、十五六歳までは一番役の取れない時で、又この時代が最も色んな誘惑にかゝる時ですから、そんな事も心配して、自分と共に東京へ連れて歸へり度いといふ意向でした、それがために、母と叔父との間には少ちやな争ひ(?)といふよりも互ひに氣まずい思ひをする位の反目があつたのでせうが、何れも私の行末を案じての事は勿論でした、そして私は母と共に東京に歸へる事になりました。

×

歸京するに未だ父が大阪へ行く前に建築中であつた六番地の方へ引越しました、父の存命中は家族も大勢でしたし、廣々とした溝へもそれ程に感じませんでした。尤も父は自分が建てた家でありながら、六番地の方へは一日の寝起きもしないうちに

亡くなつたのです——母と私と女中の三人きりになつて見ると、一層淋しさ悲しさが増すのでした、そして悲愁の裡にその年も暮近くなつた時です、先代片岡市藏さんの所へあづけられる事になりました。父の門下の人ですが、親類筋にもなつてゐますし女手一つでは私の養育し兼ねるであらうと云つて、取り敢へず客分として市藏さんの家へ引き取られる事となつたのです、當時片岡の家は本所の警察署の裏で、故市藏さん二人で淺草田町の先代花柳壽輔(踊)さんの所と本所濱町の藤間(踊)さんと淺草駒形の杵屋千代(長唄)と三人のお師匠さん所へ行くのが日課でした。

これ丈け一ト廻りするに行き丈けが二里半もありましたが、市藏さんは大變に嚴格な人で修業中は煙草も吸はせず小使も持たせず勿論道中に乗物も使用させませんでした、そればかりでなく、少し歸宅の時間が後れると随分酷く叱られたものです、然し平常は我が子の故市藏さんと分け隔てもせず可愛がつて呉れました、斯うした厳しい修業を十六の年まで積みましたが、その間一番楽しみにしてゐた事は、稽古の餘暇を

見て今戸の母に逢ひに歸へる事でした。

×

十六年の正月興行に初舞臺を踏む事になりました。

え！三歳の時の初舞臺——勿論初舞臺には相違ありませんが、あれはほんの舞臺に出たといふばかりです、この度は歌舞伎座で團十郎さん初め、權十郎さん、猿三さん、新藏さん、市藏さん、先代猿之助さん、高麗藏(幸四郎)さんといふ一座で大切に新年會といふ正月らしい芝居が出て、その新年會の餘興として、劇中劇に子供ばかりで『車曳き』を演る事になつたのです、それの『松王』で出るつもりでしたが、仕打の方で『時平』をさせと云ふ、市藏さんは是非松王丸を云つて、一寸もめましたが、結局芝居には出ない事となり、劇中の新年會に集まつた人となつて九代目團十郎さんの口上でいよいよ初舞臺の披露を致しました、舞臺が新年會丈けに、團十郎さんが『曾我對面』の似たりや／＼の意氣ですつかり芝居もどきの口上でしたが、口上が終ると、何時もの通りどうぞよろしくと座頭の團十郎さんが頭を下げるので、新年會に集つた

人々として舞臺に出てゐた總一座員が悉く頭を下げらさいふ始末で、仲々どうして大變な御披露振でした。

處がこの披露に附いて今一つ面白い話があるんです。

× 私がいよ／＼初舞臺の御披露をするさいふ話が決まりますよ——父が存命中大阪初下りの時船乗り込みをしましたが、五代目さん（菊五郎）が、初下りの時又船乗り込みをする事になり、父に相談された事がありました。その縁故から——五代目さんから「松島屋の俵が初舞臺を踏むなら俺が口上を云つてやる……」と云つて下さいました。既に市藏さんから團十郎さんに口上の事はお願ひした後で、兩方への義理合で市藏さんは一寸苦んだ様子でしたが、色々話し合ひの上で、團十郎さんにお願ひする事となりその時お客先へ配つた扇面の繪も書いて戴きました。そして裏書は福知櫻痴先生が書いて下さいました。翌月の二月興行は、愈々明治座で五代目さんが口上を云つて下さる事になりました。

その時の狂言は「遠廻し」で五代目の興次郎、榮三郎（今の梅幸さん）のお後、菊之助（梅幸さん一兄さん）の傳平、先代壽美藏さんの婆で、私は稽古娘のお鶴を演りましたが、五代目の興次郎がかけざりに合つて稽古一枚にされてゐる所へ、私の稽古娘が出て「鳥邊山」を全て唄ふのです。三味線も自分が弾いて唄ひましたが、それが又馬鹿に觀客の同情を引いた様でした。歌が終ると、五代目の興次郎が「何うやら見た事のある様な娘……」と前置して、これ又すつかり芝居もぎきで、しかも、ウント世話にくだけた口上ですつかりお客様を泣かせました。

× さうです、天下の名優一人に口上を云つて貰つたわけですよ。

× さうです、餘りない例でせうね、恐らく私が初めてせう。

× それからですか、一年餘り引き續き東京にゐました。菊五郎さんや、先代左團次さんの一座で大體明治座に出てゐましたが、

私が十七歳の五月ごろだつたと思ひますが、すつと大阪にゐた叔父（我當）が春木座（今の本郷座）に來ました。叔父は芝浦に宿を取つてゐましたが、市藏さんに連れられて、久々で肉親の叔父に逢つた時には流石に口がきけませんでした。

× さうです、全二年振なんですから、恐らく叔父さても思ひは同じだつたでせう。

× 市藏さんも叔父の一座に加はる事になりました。然し市藏さんの家から劇場までは可成の道程がありましたので、叔父は春木町の座主の家を間借りして、在京中丈けでも云つて私を引き取つてくれましたが、叔父と共に間借した當時の事は、今でも忘れられぬ懐しい思出の一つです。

× この興行は非常な好評で五ヶ月餘りも打ち續けましたが、叔父が歸阪する事になり、私も叔父の一座に加はる事になりました。母の抗議もありましたが、私さしても役の取り難い他の座に居るよりも叔父と一緒にして無理な役でも附けて貰ふ方が餘程まじだと思ひました。愈々その年の十月興行

は角座でお目見得する事になり、狂言は「菊烟」で、私が虎藏、政二郎(今の福助さん)が昔鶴姫、福助時代の梅玉さんの鬼一で叔父が智慧内(我當時代)でした、それから順々に叔父の引きで、役を附けて貰つてゐましたが、翌三十一年は父の死去以來私の家と高島屋さんの所と、さかく不仲であつたのを、小林佐兵衛といふ大顔役の取りなしで、浪々座の十一月興行には愈々仲直り芝居をする事になり狂言は一番目「日本晴伊賀報讐」中幕「三七信孝」大切「廻山姥」で「伊賀報讐」の宵寝の宗次、中幕「大和橋」では三七信孝をしました。その翌年、十八歳の時、明治三十二年アシモト足元(樂屋から舞臺へ出入の途中足元の明りにランプを使用する事)を許され部屋も一人つきりで、名題に昇進しましたが、この年の正月から文樂座の「今で云ふ」青年歌舞伎さかけ持をする事となり、それまで私の藝に附いては、舉手一投足までも言葉を挟んでゐた叔父も「これから先はお前自身の工夫に委す」といつて一切干渉せず心もさない乍ら一本立ちとなりましたので今の相生橋附近に一戸を借りて母と同居し

相變らず文樂と道頓堀をかけ持ちで三十三年の五月まで全一年と五ヶ月勤めました、その翌年は父の七回忌に當りますので四月興行は角座で父の追善、と同時に私も我童を襲名しましたが、その時の出し物は「先陣問答」で私が源太、勝太郎の千鳥、松助の軍内、珊瑚郎の景高で叔父は母延壽といふ役々でした。

それからの追善興行ですが……

四十一年の角座四月興行に拾參回忌追善、狂言は「天満宮榮種御供」「黒手組曲輪達引」連名は仁左衛門(四十年角座の一月興行に我當吹め十一代目片岡仁左衛門襲名)徳三郎、芝雀、我童、市藏、松之助、當十郎、當若

四十四年、浪花座三月興行、拾七回忌追善、狂言は「丹後鯛」連名は、多見之助、福助、我童、市藏、峯子、愛之助、吉右衛門、歌六、千代、助、播市、徳三郎、橋三郎、梅玉、仁左衛門  
大正八年中座の参月興行廿五日追善、狂言「松平長七郎」

私が松竹入りした時ですか……三十七年の九月興行です、當時京都の新京極で、延二郎時代の延若さん、蓮三郎時代の正雀さん達が出てゐられました、松竹さんから買ひに來られて、私も共處へ出る事になりましたが、その歳の十一月、所作事の「戻駕」が出る事となり禿が入用なので、郎さんに來て戴く事になりましたが、延若さん嵐吉さんのお兩人に續いで、これで仲々私は松竹の古參なんです。

この當時から松竹さんもそろ／＼東西の各大名題連を呼び迎へられて現在に到つた譯ですが、その間彼れ此れ三十年、私をこれまでにして戴いたのも一重に松竹さんのお蔭だと思つてゐます。

亦それと同時に私として忘れる事の出來ない事は、家にあつては士氣質と云つた様な母の訓へ、外では、嚴格な叔父初め既に故人となつた片岡市藏さんの薫陶の賜だと思ひ廻らしては、父に早く死別しながら何時も幸せ多く今日に至つた事を衷心から喜びに思つてゐます。



## 姥谷 生

### 作家と俳優

ある戯曲が立體化され脚燈を浴するに先立つて、俳優と作家との間にその演技が戯曲より貶黜されることに依つて起る争論は、劇界にあつて餘りに珍らしいことでないかも知れないが、最近に起つた兩者の問題に私見を交へて、一般識者に紹介したいのである。

それは先月、浪花座で大阪毎日新聞連載の三上於菟吉氏原作「炎の空」劇が上演された時のことである。おそらく本誌に掲載されてゐた脚本を讀まれて、あの芝居を觀られた方には不審に思はれたこ

とであらうが、最後の一場面は脚色者の中井泰孝氏が描いてゐた世界さ、舞臺で觀た小野一郎に扮する梅島昇氏の演出が、より以上な情景を展開させて大變な相違を見せてゐたのである。

あの脚本では吹雪の中で測らずも出會した今は冷落の淵にある皇子を陰ながら見送り、戀て自身も去つて行くのであるが、上演を見

た時には、小野が皇子（東愛子）を呼び止めて、序幕第一場、別れ際に興へた意見にちかい言葉を繰返へした後に、今は何うするこの出来ない自分を語つて、それは如何にもお芝居らしく纏上げて別れて行くのである。勿論その幕切れに麗子（水谷八重子）親子が小野を追つて来て、吹雪の中に小野を呼ぶ姿は、脚本通りに演出されてゐたのである。

これは只小野なる者が昔の戀人に言葉を懸けたか懸げないかの些細な争論のやうに思はれるかも知

れないが、この人生に於ける一瞬の交錯までも言ひたい「偶然」によつて展開されて行く。「運命」は測り難いものである。

原作者の凡てに忠實をもつて脚色せなければならぬ中井氏が、まだ前篇とあるからには後篇を脚色する上に大變な影響をばすも

のミとして、作家を無視した俳優の僭越に憤慨したのも無理からぬことである。また一方俳優の立場にある梅島昇氏が（私の觀たところでは）如何にも芝居らしく前篇の大周圓としかつたのかも知れない。茲に兩者の立場の上から大變な争論が醸し出されたことは言はずも知れたことである。

それに就て中井氏は梅島氏に對して嚴談に及んだ末のこと、梅島氏が「このまゝ演出すれば俳優が笑はれる」

と察語したのを、すかます中井氏は「そんなことされると作者が笑はれる」

と反復して一矢を酬ひたさうである。

この場合に脚本が不完全なものとして、これはハアゲマンが舞臺監督に於て述べてゐることであるが「舞臺的效果を重する意味で、脚本の改竄添削を求める権利がある。根本的な修正でなくて稽古の結果より生ずる脚本の小變更である」と、俳優としても作家に要求することが出来る譯であるが、假に作家に脚本の修正を「要求する」とせしめず、俳優が獨斷で演じたものとしたならば、作家を無視すると共に僭越も甚だしいと言はなければならぬ。

また俳優にしても、實際家として劇場經營の經驗すらあるゲエテのやうに、俳優は詩人の單に忠實なる助手に止まること望むものこ



したならば、俳優の立場ひいては藝術としての演技の獨立性さへも疑はしくなつてくるのである。

俳優の僭越が演劇全體の墮落を惹起するものとして、作家の潜越は必ずしもさうでないとは言へない譯である。

こゝで兩者の立場から各々が僭越であつたかは、諸彦の賢察を仰ぐことにして私は次のやうなことを甲論乙駁してみたいのである。

### 戯曲と演技

この争論は相互の立場の誤りから起ることであるが、悲しいかな吾劇界では名優本位の歌舞伎は勿論のこと、戯曲本位であらなければならぬ新劇の中の俳優でさへも、戯曲の價値を引卸して演技の爲めの素材に止まるべきものさしか取扱はない悪弊が深く根差してゐるのである。

かうした前提から立體化される演劇は藝術品としての外見を呈し

てゐるに過ぎないのである。

眞の演劇は戯曲も獨立性をもつた一つの藝術作品として、俳優の演技の特殊と普通の辯證によつて完成されるべきものであるとしたならば、俳優が戯曲を作者の自然環境の認識から出發して、詩的創作された藝術作品であるを、尊重しない限りは、その演技も藝術としての獨立性を持たないものと言へるのである。おそらく俳優が戯曲に對する因襲的侮蔑の概念を捨てない限りは、眞の演劇は成立されないのである。

およそ藝術にあつて、凡ての理念は現實と姿で表現せらるべきものであるならば、戯曲もまた現實性を含むものである。それで演技が戯曲に與へ得る現實性は戯曲の有する現實性に逆意的に異質のものでなければならぬ筈である。ハアゲマンの演劇論を俟たずとも、戯曲中の一人物の客體となつて演技する主體は俳優、即ち人間

である。只與へられたまゝの現實を再現することが演技であるとしたならば、俳優は文學の人物のやうになつて終ふだらう。

俳優の演技の本質は戯曲の現實化のみではないのである。俳優が戯曲の教えてゐる環境に當嵌て行く演技はモザイクにせられるのではない。その現實性に該適する心情を創造することに依つて、モザイクでなく俳優としての演技の凡てがあるのではなからうか、かくこそ演技が藝術としての獨立性を持ち、尊重しなければならぬものだと思ふのである。

いやに理論めいて、自分ながら消化出來難いほど、また言ひ足りないところも澤山あるが、要はこれからの俳優たるべき者は、戯曲を尊重すると共に演技それ自身の獨立性を謙遜に考究研精せられむことを、切に望んで已まないのである。

現今の戯曲を讀むと、その多く

は俳優や舞臺を頭に置いてゐないやうな作品ばかりであるが、作家も將來の演劇のためにもつと自重して欲しい。兩者がこの立場を自覺したならば、恐らく前提のやうな醜い争論は醸されることがないであらうと信ずるのである。

### ある時評

菊池寛氏が「演劇新潮」誌上で毎月のように、歌舞伎滅亡と演技の末梢のみを觀られて、痛快なほど酷評してゐる。それで私も何だか毎月のやうに菊池氏の所謂「劇壇時評」なるものに、何か書かなければならぬやうな氣がするのである。

何故に梅幸氏の「蜘蛛」が大人氣ない馬々しい狂言なのか、舌を出された憤慨されたのでもあるまい。何分にも現文壇には「あの作家は嫌ひだから、その作品はきらいだ」と言ひ得るお歴々方「新潮合評會」なるものもあるが。



# 十郎さんの思出

新谷誠水

『私が生てるる限り、決して損はさせまへん、外の興行はやめなはれ』

K市のT氏といふ、素人の興行屋さんの前で、曾我廻家十郎氏は堅く口を切つた。

T氏の先代は、K市開港と同時に大きな時計屋さんを営んで資産十萬圓を残した人である、二代目のT氏は其産を受けついで、K市で指折の通人だつた。自轉車が流行するに先立つてこれに乗る、繪葉書が流行るに、又K市一番の蒐集家になつて了ふ、勿論K市へ来る藝人の多くは、此人の恩恵を蒙らぬ人はなかつた、曾我廻家が第二の故郷ともいふK市T大盡の力が預かつた事は云ふまでもなかつた、十郎氏とT氏は特別に、其趣味の點から親い友人になり切つてゐた、お大盡を取まく期間、繪師、今は俳優の中に、今時めてゐる人達も

すくなくない、現に新書壇の大家、橋本關雪氏も其一人だつた。

T大盡は、斯うして、通る世界に浸り切つてゐる間に、漸く先代の残した産を無くして了つたのである。そして其余生を趣味の劇方面に送るべく、興行屋さんになつたが、お大盡の半面は、こゝでも發揮されてゐた、その最後の救は十郎氏で、自身の収入は頭になかつたのである。T大盡に儲けさせねば濟まない!十郎氏が大阪には現れずに、度々K市に現れたのも、そうした美談が残つてゐる、然も最後まで盡さうとした十郎氏は、不幸にもT大盡に先立つて了つたのである

×

私と十郎氏は、十数年からの知己だつた。従つて、此人の思ひ出は數々あるが、中にも敬服措く能はざるものは、こ

人の創作力であつた。舞臺の一寸した暇にも、書生に筆を取らしながら、新作に熱中した人である。弟分の五郎氏の作品はあゝして活字になつて世に出でるに反して、この人の著作が一篇も活字になつてないのは、實に残念に思つてならない。その創造か、奇抜な創造に如何に富んでゐるかそれには一つの挿話がある、或る作者が例の平家物語の『叡屋のさり替へ子』を喜劇仕立にしたいものゝ、創作に熱中してゐた、叡屋の生んだ男の子を、うまく獻上物の小鳥に仕立て、鳥籠に入れて、風呂敷にして、産殿深く持込み、まんまこすり替へて、御殿を下る所までは書けたが、喜劇としての落がつかない。この落だけに、十日廿日一ヶ月も頭を悩ました結果が、十郎氏に話込んだのである、十郎氏は舞臺に出るべく上手で待ち合せながら此話を聞くに『面白うまんな……斯うしなはれ、其鳥かごから小便させまんね、それで立派に喜劇だす』十郎氏の下言は即座に喜劇になつて、一座が呼物として非常に喝采を博した、こんな話は、この人には多い。

X

座員を愛する心も非常に深かつた。ボケのうまかつた童三が、患つた時なども、病院の費用から愈々危篤となるに、忙しい舞臺生活の中から特に病院へ日参して看護をした。師匠

の心づくしに心安らかに此世と別れを告げた童三の遺族達は十郎氏が死ぬまで日々の面倒を見てゐたのも有名な話である。数多いお弟子の内、書生連中は、芝居休みが来るに、伊勢松阪の本宅の二階で暮してゐた。若い書生連の事にて、つひ悪所通ひを初める。それが十郎氏のかみさんは厭だつた、夜になるに、表を閉じて一人も出さない様にする、それが十郎氏には氣に入らなかつた、さりまてかみさんに逆らつてまでも、さいふ氣は無い。

二階の表戸を開けてすぐそこに立つてゐる電柱を指さして『何んぞ事さいふたらこの電柱から上り下りしたらえ、な』案に外出の方法を教へて、愛子にお弟子達の外出を默認した『若い時だすもの辛抱は出来まへん』お弟子達が神り様に敬つたのも無理ない事である。

十郎氏の親戚の老人に、郵便爲替の領收書の一片を金になるものゝ思ひ込んで、一生懸命貯め込んでゐる人があつた。これがモデルになつて喜劇になつたのが有名な『祖母さん』である。祖母さんが東京で好評を博したのは、筋も奇抜であつたに相違ないが、背景の思ひ付がよかつたからである。丁度帝展の當時柄鳳氏の畫いた本願寺の茶飲所確か『あみだ様』の繪畫そのまゝを舞臺に用ゐて、京都氣分を見せたのが評判

になつたのであつた。機を見る事も確にうまかつたのである。成金全盛に生れた『阿房宮』や古くは日露戦争時代の『無筆の號外』これなどは會我廻家の出世狂言であつた。

然し一面、此人の狂言は、一般受けがしなかつたものが多  
い、特に大阪の人々には、あつさり過ぎるさされて、不思議  
ミ大阪の水に合はなかつた。東京ミ神戸のみで賞讃されたミ  
いつていゝ程で、地方巡業等には全然不向であつた、それは  
何の狂言にも、一種の俳味を帯びて、俳諧を見る感じがあつ  
た、奇抜な背景にも、一種の洒落氣を帯んでゐた、その洒落  
氣が、大阪の人達ミ、かけ離れ過つてゐた感があつた『馬鹿に  
しるる』一概にけなされてしふ所があつた、その『馬鹿にし  
るる』が十郎氏の生命であつたのである『西行の銀猫』『手』  
『深草少將』等は人を馬鹿にしきつた狂言であつたが、その  
馬鹿にした狂言が馬鹿に受けていまだに頭に残つて離れない  
程いゝ狂言であつた。

◇

お弟子の中で名を成した人も少くない目下晩年のお弟子に  
は、東京にゐる十次郎ミ淡海一座の十太郎等がそれである。  
五郎氏の家の辨天も喜劇への第一歩は十郎氏であつた、十次

郎は師匠が世中に『さうも師匠は困る期うしたら受けるミ  
思ふ所でも却て受けさゝないので』ミ、よくこぼしてゐるたが  
没後『やつぱりゑらうました自分一人になつてさて思ふまゝ  
やつて見るさ、たゞ受けるだけで、眞に味が出来へん』ミ感  
心をしてゐる事があつた十次郎が今日あるは全く前受けより  
味そのものに就て十郎氏から厳しく教えられたからであらう

×

年々お正月に賞ふ新年狀の趣向に面白いのがあつた、頭に  
残つてゐるののでいつの年だつたが勅題『海上の松』に對して  
松魚節の上箱の木目ミ商標ミが巧に貼られてあつた、又一枚  
には、列車を書いて明治何年から何年への變り目を驛名揭示  
板にしてある等、いつも樂みにしてゐるものである、博多土  
産の御人形に自分の似顔に七福神の道具を全部持たして『七  
福人が御宅へ参られますが、私が一足先へ御荷物を持つて参  
りました』ミ記した土人形は、私の家の床の間にまだ飾られ  
てゐる。その人形の話から先頃、十郎氏懇意であつた錢谷氏  
から、西行法師に扮した似顔の人形を贈られた共に私の家で  
愛撫する人形の一つである。

私の思出は仲々につきないが、拙文此人の徳を汚すのみで  
その一端も傳へる事が出来ないのを悲しむ。



# 十郎十いろ

藤本 福造

母が貰つて来てくれたお稻荷さんの隣りに一人で七福神になつてゐる博多人形の十郎がゐる。

「ホテルになつて塔を持つてゐると知らん間に手が下つてゐて」

と、聞いたのは、宿りつけだった木や町の山城屋別荘の座敷だったと記憶する。

「キレイ紙を斯うやつて使つてますが、あいさんに、そつが出るよ、本店へ注意してやつたりします」  
十郎の涕は有名である。

「電話をきいて居乍ら用事があるよ、其方の話へも聞耳を立てるので、何だか言はれた事があるがそれは役者の徳である」と。

「おてふずに行つて、邪魔くさい時には、

手を洗うのがおつくうである、ぢやあく水を流す音だけの時もある」

とも聞いた、之はよく似た例がある、以上山城やを訪れた時のお話。

「壁がぬれぬので、板壁です」と。お湯へ這入つてお歸り」

と嬉しい言葉を殘して弟子三人に送られて御殿場驛を發つたのも一ト昔以上になる。癡ながら見える富士、親孝行の場面の様な御尊母十郎、令閨、愛弟子、と私、忘れる事の出来ぬ敷時間でした。

「母を送つてからなら何時死んでもいいのです、舞臺の上で例れたら尙満足です」と。

「あなたのお母あさんと私と一つ違ひ位で其息子さんと私と友達であるよ云ふのも一寸かわつてますね」

と、は千歳町で御事をよげなから聞いた様に思ふ。

夷谷座の樂屋で復活の際病後を思はせる身體に一体さんの姿をして働く椅子に腰をかけた振つて貰つてゐる姿を見た時は涙ぐましかつて、舞臺が好きやと一見して知れてしまふ。

内弟子の福壽はどうした、胸を病んでゐたが氣になる一人。甚十郎は五九郎、脚本主任になつてゐるので安心。小壽は此間文福の仕打見たいになつて夷谷座で逢つても嬉しなつた。十郎の弟子には本名の福松と十郎をこつた名が多かつた。

五郎は猿股、十郎は禪とは事實であり、又何物をも物語つてゐる。淡海へ入座した弟子の連中が研究会をして毎月、山科あたりで劇をやつたことがあるが、其時十郎が禪を見せて弟子に蚊取香水を腰にぬらせて居たのも思ひ出の種である。山科に居た、島田が喜劇會我廻家十郎をコンダンスして喜會十三郎として活界に奮勵してゐるのも面白い。終りに御無沙汰してゐる賢婦人直佐恵さんの健康を祈る。

# これからの喜劇について

(順序不同)

## 岡本綺堂

喜劇はこれからいよいよ流行すると思はれます。勿論その種類は色々ありますが、當分は明るい気分分の喜劇が歡ばれるだらうと想像されます。それと同時に、在來の笑劇とは異つた内容形式を持つ、眞の喜劇も出現するでせう。

## 上司水劍

喜劇 (Comedie) というものゝ眞意義がまだ一般俗衆の頭によく入つてゐないやうにも思はれます。將來のこゝは、誰れにもわかりませんが、小生一個趣味としては、諷刺喜劇の傑作の出るこゝを望んでゐます。

## 佐々木信綱

笑はさるゝ喜劇にあらでこゝろより

笑ふ喜劇を見まほしみこそ

## 三宅やす子

云ふまでなく見えすいたくすぐりでないもの。喜劇でも涙の出るような軽いものが、たくさんほほしいとおもひます。

## 生田葵

喜劇の時代が來たやうに思ひます。かうした思潮の紛亂した時代にはしつかりこゝそれを解決するこゝが出來ぬ人それから又傍觀者にならうとするものが出來て、皮肉な言葉と嘲笑が然うした人の胸には反響が強いのです。然うした喜劇流行の時代が來たのです。在來の十郎氏や五郎氏のものでなく、文明批評の立場で、時代の人間を諷刺したもの、それが舞臺を支配するでせう。

## 長田幹彦

事件よりも心境の上の喜劇がみたいと思ひます。喰け違つた心持らなぞに或意味を發見していつたらさうでせうか。

## 西宮藤朝

これからの喜劇と言つても、要するところ、笑はせた後で考へさせるやうなものを、もつと盛んに發達させ度く考へる丈けです。

## 島中雄作

これからの喜劇はウフ、フ、でなくてははいけない、アハ、ハ、ハは禁物だ。企まざる可笑しさが實は人生に流れてゐるのだ。それを見逃して無理から笑はせようとするから大阪の二輪加ふたいなものになる。箸の轉けたこゝにだ

つてユーモアがあるのだから、無理に笑はしちやいけない、機つちやいけない。

## 江 口 渥

今後の喜劇は今までのやうな單に面白可笑しい喜劇ではなく諷刺的喜劇が殊 社會意識 上に立脚した社會諷刺的な喜劇が出るだらうと思ひます。そしてつと取材の範圍もひろくなり、えぐり方も深刻になる事でせう。

## 土 田 杏 村

現實相が深刻になればなる程、また其の他面じ人間の詩的要求が強まれば強まる程、喜劇は發達して來なければならぬ。現實社會の全面を取材として詩的ユウモアをみなぎらせた喜劇は發達してくれる事を私は希つて居ります。喜劇の作家は他の劇以上の天分を要ませう。近來の劇によく見る、手際の良い、會話の巧妙にまごめられた

こじんまりした喜劇(翻譯物の影響の多い)には、私は動かされるこゝが少ない。これでは人工的な貴族的な玩具の氣分が強よすぎる。

## 高 原 慶 三

六つかしい御質問ですね！一寸分りませんよ。

然してこれからはあらゆる芝居が喜劇化する傾向はまらがないと存じます。だから喜劇的素質をもつ作者はいまよく黄金時代ですよ、楠本木念仁先生なんかもつて腹すべきでせうね。

フアースなんかも時代にひきずられて變つて來るでせうね、そうして作者の想像力が、時世が複雑になるにつれ思ひもうけぬ方面に突走るから、だんだん奇抜なものが出來る代り、シンミリス考へて味はう態のフアースなんかだん／＼骨董品になるのでせうね。勿論現在でもそうですがね……。

## 上 泉 秀 信

チエホフの『櫻の園』を喜劇だといふのは作者その人位のもので一般にはその反對の要素を多分に含んでゐる作品を解釋されて居ります。併し作者にさう言はれて見るこゝなるほごとうなづける節がないでもない。否や解釋に依つては立派な喜劇になります。——これからの喜劇はこんなものでなければならぬなごの理屈は外に、私は此種の喜劇なら(或ひは喜劇ではないかも知れないが、名稱の如何を問はず)双手を上げて歓迎致します。

## 前 田 河 廣 一 郎

これからの喜劇は、主として社會構成の矛盾から兆したいろ／＼ないでオロギーの破綻の上に組み立てられるやうな傾向が見えます。大自然の壓迫の下に、なほ國と國、人種と人種、階級と階級なきがむきになつて争ひつゝ、本來の大自然といふ敵を忘れてゐるな

きは人類の撒きつゝある最大な喜劇であるかも知れません。

### 千葉龜雄

『これからの喜劇』ではなくて、喜劇はこれからだと思ひます。だつて、今まで碌な喜劇なんてものは、殆んど無かつたではないですか。地口、語呂合せ、駄洒落なごいふ類がユウモア文藝の名で通つてゐる現代の日本で、いわゆる『喜劇』が仁和我に毛の生いたものに過ぎなかつたのは止むを得ずまいが、それにしてもウ井ツトやユウモア、サタイヤは及びもないごし、せめてジョオクにすらならぬ程度にくすぐりが、喜劇で通つてゐるのは困ります。しかし、観衆がごうならうご無からうご、私はこれからの我劇界で、一番必要で、一番有望なもの、一つは『喜劇』だと思ひます。殊に現代は、喜劇或は悲喜劇的素材が、途方もなく多い時代であるごみからも、それなのに、稀に

ある近頃のメロドラマさへも、何ごいふ氣の利かない、垢抜けない新五左衛門式なのでせう。

### 葉山嘉樹

實は、私は演劇の方は、素人なんです。が、これからの喜劇は矢張は、ウキツトフオーケルの『誰が番馬鹿だ?』風のものでないご、観客にピツタリ來ないご思ひます。無産者大衆の惱み、その忘れられた處には、これからの喜劇はないご思ひます。先づお答まで

### 小水井不木

喜劇はやはりごこまでも観客を樂しませるものであつてほしいご思ひます。諷刺もよろしいけれど、あまり深刻なのは喜劇に求めたくありません。ゲラゲラ笑はせるのも困りものですが、あごになつて考へても、笑はずに居れぬものがほしいご思ひます。

### 高須芳次郎

矛盾多く反理多き現代生活の欠陥を抉出した眞面目な喜劇、或理想例へば小生の唱ふるオリエンタリズムの考へを寓した哲理味ある深さある喜劇の出現を希望す。

### 萩原朔太郎

日本の從來の喜劇(笑劇、映畫、ニワカ、曾我廼家落語の類を含めて)はすべて陰氣で薄暗く、妙に醜怪の感じのするものが多い。かうした日本的喜劇はもう廢るでせう。喜劇の本來の目的は、人生を陽快にすることにあり。だから、舞臺もできるだけ花やかに、氣分を明るく、美人なごを多く出して一體に陰氣を避けねばならない。この點から淺草公團の五九郎喜劇は比較的時代的です。

### 加宮貴一

喜劇は悲劇やその他のものより情緒の上に於て複雑性を持つてゐるから、今後益々人性の複雑化と共に發達し、

繁榮して行くと思ふ。然し、今後の喜劇は、今迄のソガノヤ式常識的な人情喜劇では、到底近代人の頭や胸へは來ない。もつと鋭角的なデリケートなそれである。濼瀾とした取材や演出が必要だ。喜劇作者が、今のところ日本にはあまりに少ない。イヤ、殆ど新しい喜劇作者が居ない位だ。

## 土屋 充

すつかり餘太つばちで、初めから仕舞ひまで笑はせてしまふ笑劇風になるしんみり聞き入つてゐた人情噺にサゲがあつたので、おや、と思はせる上手な落語云つたやうな物や、喜劇ですよ笑ひなさいよと櫂つるやうなのなきが今迄には多いが、是からは劇のそれ全體が大きな諷刺や皮肉であり、運命のたはむれである云つたバーナード・ショー式の喜劇が榮える。

矛盾した前記の二つ……兩極端にある二つの存在が續きその中間的な（今

頃式）のが姿を追々消すと思ひます。

## 山崎 紫 紅

ここまでも眞面目のもの、くすぐりのないもの、うらに涙などはあつてもなくても、そんな古いこゝは今云はず

## 小島 徳 彌

喜劇であるから、『二輪加』でなく、『コメデイ』の意味だと思ふが、今日喜劇で通つてゐる曾我廼家や志賀廼家のあれは、要するに大阪二輪加の時代要求と共に進歩したものにすぎないのであつて、『これからの喜劇』は、曾後廼家や志賀廼家のそれが大阪二輪加から如何に進歩したものであるとしても、それを土臺として進まるべきものでは無論ない。當來の喜劇、それは新らしい意味に於ける喜劇作者喜劇俳優として指揮者の出現を俟つて始めてそのコースに入るであらうが、現在の我が國では未だそのスタートも切られてゐないやうな氣がする。如何に？

## 小野田 益 三

從來のやうに、俳優の舞臺上技巧の下劣さを一掃しなければならぬ。

内容から來る、純粹なユーモアでなくてはならぬ。

以上の意味からして、眞面目な人生を表現する、明るい、そしてシニカルユーモアを主潮としたもの、つまり自然さ口の、ほぐれる喜劇の出現を期待する。

近代人はあまり、あはたしい生活をしてゐる。あまり刺戟に壓迫されてゐる。それらより解放される時間を喜劇が占める。こゝを要求する

## 石割 松 太郎

現在の喜劇は五郎一派と淡海一派で、共に可なりに纏つた一團です。五郎一派以下及齒牙にもかゝらぬ手合みすれば、五郎、淡海が『今』の立場ですが、共に關西の産物です。が、この兩得が『これからの』の立物？ごう？



私の思ふ處はこれからの喜劇はもつこ／＼軽いものでなくばならぬと思ふ。關西は喜劇團の發祥の地といふ各答をえてゐますが、大成はさうあらうか。近來の池田大伍氏の作品に『これから』の喜劇の暗示がほの見えるやうに思ひます。が、この『新喜劇』の舞臺への着手は誰？ 關西の喜劇界の人々の襁をしめ直さねばならぬ時は今ですよ。

### 中 木 貞 一

理智的な物。組立に於いて、表現の方法に於いて。又それをあらはに示した物裏にした物があるであらう。又只笑ふ物ミ皮肉な物ミにも分れるだらう。然て根本に於て、もつこ理智的變更の加へらるべきは、當然の事である。

### 中 村 正 常

歌右衛門先生や菊五郎先生が五九郎先生のような喜劇を僕たちにみせて下

さるようになり、そして……だなんてせめてこれからの喜劇について考へるには、まづ充分に最初に突つてからのことにしたい。それから、かういやにまじめに首をひねつて、でもいゝ考も出ないや、やつぱしこれからの喜劇はいまみたいいたいして面白くもないことであらう……だなんて。

### 原 久 一 郎

深遠な人生の意義ミ暗示ミを抱有する嚴肅な喜劇の出現を望みます。

### 福 田 正 夫

喜劇の新作が本氣につくられてい、と思ひますね、文學ミして……いまの喜劇の世界ミは變つたものがそこにあらはれませんか。

### 江 澤 春 霞

——これからの喜劇は、無論に意義のある物でなければならず、人生を唱破したものでなければ可けませんさ

ミて、考へ落ちのやうな、觀終つた後に滓の残るやうな物も忌だと思ひます但、何分にも、今の處は、曾我廼家畑の喜劇が斯界を縦斷してゐますから、喜劇ミ云ふミ、五郎だミか又は五九郎だミかを聯想しますので、一部具眼の士を除くの外、餘りむづかしい事を云つてもお分りになりますまいが、私は新派劇の俳優に依つて演じるのが最も適當である可き、新派劇脱化の人情喜劇の隆昌を見る事を、密に望んで居ります。しかも、大きな聲で笑ひながら見物の笹まるやうな物の出現を望みます。

### 須 藤 鐘 一

く十ぐりばかりのやうな之れまでの喜劇を見てゐる方が冷汗をかゝねばならぬ。五郎、十郎あたりではまだくミいひ度い。しかし現在、日本には之れぞいふ喜劇の團體がないのは、淋しい。グレゴリー夫人の『喧嘩仲間』

菊地寛の『真似』なぎのほんミウの味が、新しい喜劇園によつて演出される日は、いつの事か。

### 喜 志 邦 三

理智にうつたへる喜劇でなく感情にうつたへる喜劇の發達を期待します。換言すれば筋や白が直接に喜劇であるのでなく其等が融合して全體ミなる時始めて一つの喜劇的雰囲気を作り出される様なものが欲しいといふのです。詩化されたる喜劇ミ云つても差支へありません。

### 坪 内 士 行

ロスタンの『シラノ・ド・ベルヂュラック』パリーの『天晴れクライトン』ペンネットの『一里塚』グレゴリー夫人の『人格者』や『噂のひろまり』以上のやうなものを、これからの日本の喜劇のお手本にしたいと思ひます

### 中 河 與 一

單純な内容による形式的美の要素を多分に持つ喜劇。ひびく考へねばならぬやうな喜劇には賛成出来かねます。

### 佐 々 木 俊 郎

厚顔ましいこゝではあるが——單なる笑ひの劇だけで終らせたく無い。笑はせる科白や動作の中にも、觀客の胸を打つものがあらねばならないと思ふ。その一例として、私は、チエホフの『申込』をあけて置く。

近頃、會我廼家五郎の喜劇が、その傾向を見せてゐるのは嬉しい。

### 新 居 格

先達て池田大伍氏の『親友』を本郷座でみてその複雑な筋に感心した。それとは別だがこれからの喜劇には特に喜劇として覗はない喜劇（武者小路氏のものなんかには作者が大眞面目であるとして喜劇なのがある）なり、

轉快で上品なもの、グロテスクの中に喜劇ミなつてゐるもの、そんなものが欲しいと思ひます。ノンキナトウサンなんかは詰らない。

### 木 村 毅

マーケットエーンの『ジャンピング・フロツグ』ミ言ふ小説のやうな味の出た喜劇が生れ、ばい、と思ひます。

### 三 宅 幾 三 郎

これからの喜劇は何うなるかといふやうな問題は批評家にお任せして、作家としては、これから何んな喜劇が書きたいかといふ意味でお答へすればいいと思ふ。一般的に云つて、今日の多くの喜劇は寧ろフアース（笑劇）の部に屬すべきものであつて、主要人物の誰かゞ必ず愚弄嘲笑の目的ミなつてゐるさうした被害者をなると出さない幸福劇といふ意味に於ける喜劇を書いて見たい。皮肉な喜劇はあり過ぎるが

幸福な喜劇が少なすぎると思ふ。

## 藤井眞澄

今日までの喜劇を振り返つて見るに、ハイカラなところで(1)自然主義の喜劇(2)表現主義の喜劇があり日本では(3)會我廻家式の喜劇(4)太郎冠者式喜劇(井上正夫なきが近頃試みつゝある、例へば殉死世に出ぬ豪傑なきが考へられる現在では(5)が一番新しく感ぜられる。之はこれからもつゝ發達するでせうが之も矢張り過渡期の物に過ぎない。將來偉大なる喜劇文化を大成するものとしては、以上五種の性質を綜合したる意義の自由な巨きな形式だと思ふ。つまり今日までの喜劇の良い處を取つて來て、更らに新しい大なるのを創造するのだと思ふのです。

## 秋元柳風

そこに人情の機微が含まれてなくては叶ひません、そして尠くも實際的な

又は如實的な事件でありたいと思ひます、諷刺結構皮肉や警句も結構ですが人間生活を忘れぬ程のものでありたい——さいふのが私の喜劇に對する希望です。

## 桂田重治

現代の喜劇は俄に域を脱してゐないやうです、喜劇役者云へば一段下に見られてゐる云ふ傾向があります、純正喜劇たさへばチエホウあたりのものが、否あ、云つた傾向のものが、もう少しやかましく云はれていゝ筈です、時代喜劇でも池田大伍氏の男達ばかりや綺堂の小栗柄長兵衛なきのやうなもの之から迎へられると思ひますが、あれもです、演出をもう少し考へて儀式化された演出にでもしたら一寸いゝものになると思へます、

## 佐々木千之

門外漢のわたしには、よくわかりま

せんが、多分喜劇は發達するに思ひます。會我廻家風のもの一方にあり、一方には例へば岸田國士氏風のもの之がさん／＼出て來ると思ひます。しかし、望むらくはブレンソッドばかりでなく、せめて牛肉位のもが出て來てほしいです。チエホフの新しいものが正道さへませう。

## 間宮茂輔

私は、日本に於て、眞の喜劇を見たことは有りません。それは、日本人の性格が喜劇を理解し、喜劇を愛するに相應しくないからだと思ひます。五郎及五九郎の芝居を喜劇として認めてゐる間は眞の喜劇は生れないと思ひます。今後、日本に新しい喜劇が生れるとすれば、生活に根ざした或は生活の底を流れてゐる喜劇の要素を心理的に或は推理的に發展させてゆくことから出發してゆく他はないと思ひます。末の末なる舞臺技巧のみ役者も民衆も共に

偏愛し過ぎる。現在を、正しい意味の喜劇に亦戻らせる道は、それより他にないを考へます。

### 吉田 孤羊

これからの舞臺に望ましい喜劇は滅びゆく階級——換言すればブルジョアジイのカタボリズムに對する心理を鋭く描出したものです。これは現在有識無産階級が、無意識に要求してゐる喜劇ではないでせうか。作者にしても劇場にしても、まだこの邊まで眼がこぼかないのを見るに残念な氣がします。これは勿論、私一個の皮相な觀察から日本のプロカルト運動の隆盛にならぬことを悲觀してゐるせいにもよりませうが。

### 綿貫 六助

本當に良い喜劇が日本のものには少いやうです。小説を書く人が無暗に劇を書くのがあまり面白くないを云ふ事

も中央の劇場でも證明されかけたやうです。由來日本人は喜劇を云ふものを書くにも實演するにもあまり得手でないやうです。それだけ將來の喜劇には多くの餘地がある譯です、偉大な劇作家適良な俳優その他を得て他に劣らぬ喜劇を見せて頂きたいのですが……

### 武川 重太郎

餘りくすぐらせでない喜劇を希望します。私は實を云ふに曾我廼家五郎の喜劇さへ見てゐないから大きい事は云へないが、他の一流劇場などで時たま見る喜劇は、さうも大向けのくすぐらせが多くて困る。却つて不思議なこころには、日本の所作なごに自然な、明るい喜劇の要素を見出します。先日井上一座で鈴木善太郎氏演出の親友といふ芝居を見たがちよいとい、演出が伺へて面白かつた。たゞ、正邦宏さか、米津左喜子のやうな、あの時の演技は困つたものだ。あ、いふ誇張は、飽く

まで除いて欲しい。

### 森本 巖夫

ほんの愚見で恐縮ですが、折角ですから一寸。——喜劇にも程度種類いろいろありませうが、われ／＼の問題とするのは純藝術作品としての喜劇ですそれは大阪のわか式なものや櫛ぐりて笑はせる落語仕込みのものでは勿論ありません。そんなものは喜劇といふよりも寧ろ低級な悲劇さしか見えません。將來の喜劇は社會の罪惡——虚榮や欺瞞や偽善や怠惰なごに加へる鐵槌であり、また正しき人間同志の間の誤解や鬭争を解決する鍵であつたりするやうな光明に睿智の花火でなければなりません。

### 山田 清三郎

都々逸、川柳等に依つて代表せられる所謂町人趣味の人情味や、素朴な家族主義的喜怒哀樂を基調としたものか

ら、須らく解放されなければならぬと思ひます。脚本の題材を生々とした全社會層から求めること。動搖期の時代が生みつゝあるところの儼々泣き笑ひを、端的に把握し、曝露したようなものこそ、これからの喜劇でなければならぬと思ひます。

### 川端康成

日本の新劇界に何よりも缺乏してゐるのは、云ふまでもなく、喜劇です。これからの喜劇について、云ふ問題を解決する第一の鍵は、先づいゝ喜劇作者の出ることです。至てはそれからの喜劇を豫望することは出来ません。

### 並山拜石

『喜劇』云ふ意味が、暗に『五郎』とか『淡海』とか『五九郎』とかの演技を指してゐるのならば、『新派』のそれと同様、凋落の日も近く迫つてゐます。彼

等の一座は、その出發當時とされだけ變つてゐるでせう、されだけ時代を見てゐるでせう、それは『新派』のそれと同様です。死期近きにあり。眞の喜劇に就いては別問題です。

### 今東光

特に新しいイデオロギイを感ぜしめる必要もないでしょうが、太郎冠者でも困ります。然し今さう指示すること出来かねますが、これからは徒らにセンチメンタルなものより喜劇時代が来るやうな氣もして居ります。

### 畑耕一

喜劇はやつぱり考へて面白いといふものよりも見て面白いといふ方が徳でせう。こいつてクスグリやアテ込みは困ります。下手な諷刺めいたもの教訓レエヴの所謂『自然』といふことが喜劇の本領で、將來のものは時代の心を

背景とした自然のユーモアがほしいのです。

### 小寺融吉

曾我廼家五郎の劇を近ごろ見てをらぬためなんにも云へませんが、益田太郎冠者氏の喜劇は小生大きらひです。何れよりは丸一の大神樂のカチ合ひを聞いてゐる方がよつほさ愉快です。曾我廼家は知りませんが喜劇云ふこと、さかく俳優が進んでオツチヨコチヨイの芝居をするといふ習慣が昭和二年にもなほ存在するのを實際目撃して嫌な氣がしました。わざ／＼浮はついたりリフ廻し、わざ／＼浮はついたりたゞ／＼見物を笑はせること受けてゐるのだと喜んでゐるかの如く思はれ芝居を見てゐる氣も失せ、バカ／＼しくなりました。これからの喜劇は、あれではいけません

### 津村京村



これからの喜劇は必ず上品な、言ひ換へれば所謂藝術的な喜劇！笑劇では無しに、本當のユーモアを持つた喜劇が迎へられもし、又さうならなければならぬと思ひます。もう一言別な言葉で言へば、『明るい悲劇』さう言つた喜劇が出て来るだらうと思ひます。私なごもさういふものを書きたいと思ふて居ります。

### 井 東 憲

人生の喜劇へ——いろくゝな意味で最も内容の豊かな深味のあるものゝなるでせう。

單なるくすぐりの面白味より、人生の喜劇へ向ふのが當然です。今の多くの觀客を標準では、喜劇の改革は却々大變でせうが、兎に角進んで行かなければダメです。

### 林 信 一

見渡した處現代の劇壇には未だ喜劇

らしいものが存在して居ないと思ひます將來の喜劇——それはアントン・チエホフの作品に現はれて居る様な人間生活のトラヂカルなユーモア、少くもアンドレエフの『なぐられるあいつ』の様な深刻なものでなくてはならないと思ひます。チャツプリンのゴルド・ラツシュ程度度の喜劇さへ存在しない云ふ事は何ご云ふ情けない事だらうかと思ひます。

### 額 田 六 福

會我廻家五郎君が、現代作家の創作喜劇例へば小栗栖の長兵衛時の氏神等をやる日が来るごも、それが一番興味をもつて期待されます。

### 松 永 延 造

悲しみは人の神經を痛く勞らすか笑ひは時に人の能率を高める事さへある現代人は常に精神の烈しい浪費を恐れるから、悲劇よりも喜劇が流行して好

い善であり、アメリカ人の如きは大小此の傾向へ這入つて來てゐる。何んな形式の喜劇が理想的なものか云へば短い言葉では答へ盡せぬが、大體に於て私は斯う思ふ。何の場面にも山があり、その山が次の山と聯絡して、少しも無駄な筋道を通らぬやうに努めねばならぬ。最後の山へ到達するため前の幾場面を筋の犠牲にしては不可である面白い言葉ご共に速かな行動が必要であり、時には『月世界旅行』ご云つたやうな荒唐無稽なものも出して見るが好いだらう。

### 戸 川 貞 雄

悲劇よりも喜劇を創るごの方がむづかしいごいふのは定説である。事實喜劇ですぐれたものは少ない、現に日本には今までのごころ喜劇はない。茶番か笑劇めいたものは往々見受けるけれども、御質問は『これからの喜劇』ごいふのであるが、答は『喜劇は

これから』である。差當り現在生れなければならぬのは諷刺劇ではないかと思ふ。例のゴーゴリの『監察官』なども諷刺劇である。

### 今野賢三

喜劇はもつとも大衆的だといふ意味において、非常な發展性を持つてゐると思つてゐますが、現在のやうに、すぐれた喜劇俳優が出ない（つまり時代生活を理解し得ない）のでは發展し得ないのでせう。けれども、主役俳優本位でない、総合的な、演出者のあたまで統一される喜劇團が生れて時代生活に接觸し、新しい脚本を（新人の作）上演するやうにしたら、一境地を開拓し得ることは眼に見えてあきらかです。

### 尾關岩二

今までの二〇加式な喜劇はもうい、かげんに消えてもよいと思ひます。これからはもつとまじめなもので、しか

もおかしまのあるものが出てきさうに思ひます。要するに充分深味のあるものになりませう。専門外のことで、少し勝手がわかりませんが、ごりあへず右御返辭申上げます。

### 安間 確郎

歌舞伎の世界は俗に過ぎ、新劇はペダンティックである。——少くとも、現在日本の劇壇に就いては、私は斯う言ひ得られると思ふ。喜劇に於て、殊にさうである。

前者で喜劇と言へば、藝術價値の殆んど疑はれるひさいファースであり、後では、極まつて、いやに氣取つたコメディである。

馬鹿氣きつた大喜利もの、太郎冠者ものなき、藝者の前で、ララララてなソロを得意がるモダンボーイのやうなキザな新劇の喜劇。こんな脚本は共に堪まらないではないか。そして、此の事は、亦、同時に、斯

うした脚本を書く作家と時代を共にして居る俳優に置きかへる事も出来るのである。

私は、大阪の劇壇に餘り精はしいものではないが假りに、例をとつて、憎くまれ口を叩けばば、箱トラ氏と坪内士行氏であらうか。斯う言ふと、坪内氏なきは、（或ひは箱トラ氏にしても）それは、脚本に忠實にやつて居るのだと言はれるかも知れないが、言ふ迄もなく、俳優の使命は、只、盲的に、脚本の短所をまでも、そのまゝ生かす事ではない。生かすべき處を生かし、殺すべき處を殺して、其の劇全體の藝術價値を觀客に肯んぜしめる事こそ、眞の俳優の庶すべき態度でなくてはならない。

資本主義文明の禍ひは、現實に於て笑ふ餘地もない、逼迫に陥れてしまつて居る。斯うした時、最も其の心的愉潤の醜母として、私は喜劇を、またなく尊ぶものである。ファースよく、コ

メディー亦讚して止まい。

只、前述の如く、現在日本劇壇の多くのものには、作家か、俳優も、それを操る劇場當事者、經營者も、共に、深い反省をしなければなるまいと思ふ。

### 井澤 弘

喜劇らしい喜劇のない日本、これからは喜劇専門の大家が出て、明るい晴れやかな、しかも相当厚みのあるものを作つてもらひ度い存じます。人間の生活の断面から、本當の『笑ひ』をピツクアップする人が出て來てもよい頃でせう。

### 井汲 清治

陽氣で、愉快で、すばらしく、つちつちが會つて、それでゐてうそでないもの。而も新しいこいふ感じが、これから喜劇には必要、深刻になりたがるのはいけない。

### 佐近 益榮

今の喜劇がだん／＼成長して、舞踊的音樂的要素を多分に含んでもつゝ典雅になつて來ると思ひます。勿論民衆に離れて來るかも知れませんが、それは餘儀ないことで、民衆の要求をみたすものは別に誕生するにちがひありません。喜劇が若し、今のまゝで生長しなければ天死します。

### 宮原晃一郎

舞臺に上ぼせて、商賣上成功を見るにはまだちつこは早いかも知れませんが、シヨオの喜劇なんごの雛案もよかるべきか存ぜられます。モリエールの雛案は古くありますがね、もつゝ新時代に適したやり方をしたら、まだまだ舞臺にかける價值がありませうよ。和製喜劇は今のところ、あんまり敬服したのものありませんが、岸田氏あたりには、のがないでせうか。フランスやイギリスに、のが（現代）ありさ

うです。廣い題目で、實はお答へのしかたがなく、こんなこころを。——

### 風早 次郎

喜劇をたゞ單に『笑はず芝居』としてみてゐた時は過ぎ去つたと思ひます。すくなくとも、これからの喜劇はその内容に於てまた形式に於て、もつゝもつゝ人生的意義云ふか兎に角生活的な根據から出發さるべきです。なんでもない笑を笑ふべく、我々の時代はもはや、それほぎにヌーボーではないと思ひます。

以上私の現在の喜劇に對してあきたらないと思つただけを。——

### 樋口 二葉

從來の如き、五郎、淡海、五九郎、なぎが上演してゐる或は上演しつゝある芝居が本當の喜劇、所謂コメディーであるか何うか云ふ事が既に問題であります。若しこれ等の芝居を稱して

喜劇だこなし得るならばそして従來の

ま、でありこするならばこれからの喜劇は全く心細い次第です。新派が現在衰頽のドン底にある事を思ひ、その原因が奈邊にあるかこ考へて見れば喜劇も同儕今の内に何こかせねばやがて興行者俳優自身で墓穴を掘る事になるでせう。兎に角すぐれた脚本作家が居て相當頭のすぐれて居る五郎なごが第一番に今後進むべき途を開拓せねばなりません。聞けば五郎五九郎何れも本作は洋行をするそうですから勿論何れは新機軸を見出す事です。

### 飛田角一郎

喜劇——の概念に囚はれたものや、作者の意圖の見透いたもの、觀ても讀んでも對話のあやだけで、そのあこに何も残らないやうなものは御免を蒙りたい。笑ひの中にも自然こ人生があり盛られたユーモアーの中にも、たくまぬ生活のあるやうな、素直な喜劇なら

結構だこ思ひます。

### 山上貞一

新舊思想の衝突こいふこは或はもう起らない時代になつてゐるかも知れないが、少くこも此の主題が悲劇を生む時代でない事は事實だ。そして喜劇を生む時代になつてゐる。笑劇でもなく仁輪加でもなく正面切つての喜劇は所謂新作の現代劇中そこにもこ、にも發見する事。出來る菊池寛氏の『盆栽』なんかいゝ例だ。私は最近『解決』こいふ現代劇を書いた。最初は悲劇であるべく筆をこつたがつい明るくありたいこ思つた爲めに喜劇にして失つた。その方が作者の意途も盡くせてよい。一般觀客の心理もこれによく似た傾向ではなからうかこ私は思つてゐる。

### 井手蕉雨

だいぶむつかしい問題です、私はかねてより開演中めちやく／＼に見物を泣

かせておいて、さて幕がしまつてからアツ何故自分は泣いたのだらう？こおかしくなつてふき出すやうな喜劇が書いて見たいこ思つてゐながら未だうまくこままりません、何しろモウ今までのやうなクスグリ澤山の喜劇は飽かれたやうです、泣くにしても笑ふにしてもウンこ深味のあるものが望まれます

### 八木柳縁

道話的教訓の時代は過ぎ去つたやうです。

帝劇所演の高速度喜劇や天勝一派の寸劇の持つ内容を氣の利いた劇に引延ばして、それで自然の可笑し味を豊富に盛つた、所謂笑劇なるものが喜ばれませう。

### 梅原北明

一、笑劇と喜劇との區別を確定せしむるここ。(絶対に混同すべからず)  
二、眞の喜劇は眞の悲劇也。(涙の笑

ひこそ此れからの喜劇である)

三、無理に笑はせるこゝ絶對に慎むべし(嚴肅そのもの、中に必然的に笑ひを發せしむ要素を含有せしめよ)以上の三件を備へしものが來るべき眞の喜劇であらうと考へます。一例を舉ぐればデカメロン上巻中二日目の第五話(雪隠の陥穽)等は其の適例です。ここかで初演を實現したら吃度受けるこゝ、些か自己宣傳をして置きます。

### 百田 宗 治

喜劇については明確な意見も持つて居りません、強ひて言へばさうも日本には小生等の漠然と望むやうな喜劇は生ひ立たぬらしいといふやうな、これも漠然とした御答しか出來ません。

### 長 谷 部 孝

これからの喜劇がさうなるか云ふ御質問なら、明るい理智的なものになつて行くだらうと僕は思つてゐます。

多幕物は兎も角、一幕物は殆ど全部が全部さうでせう。たゞへ陰慘な出來事が描かれてゐても、その裏には常に明るい感じを伴つたもの、さう云つた見當て進んで行くと思ひます。これから喜劇をさうしなければならぬか云ふこゝになるが、これは少し大變なこゝになります。

### 大 木 雄 三

言葉で笑はせるこゝはもう駄目でせう。殊にシヤレなんかいけないでせう。僕は、社會時事に觸れて、しかも逆説的な内容をもちたものが生れなければならぬと思ひます。そして耳でなく目にうつたへる方法を賢いと思ひます

### 中 山 重 孝

これからの喜劇? まださうした考へを起した事ありませんが、何しろピカ／＼光つた安物のハリボテ鬘をかぶつた板付きの人が『わしもまあかう

やつて』と筋を賣つてゐた謂はゆる仁輪加を、曾我廻家五郎クンが寫實風に改造した劃期的革命は認めねばなりません。その五郎クンも和田久一の本名で更に一新機軸を出さうと試みた筈でしたが、其後の消息を審らかにせぬうち立消えの體で、更に曾我廻家五郎劇と銘打つて今日の教訓的悲喜劇を賣り物にしたと思ひます、之までの經路を顧みて、さうした變遷のあつた如く、多少の動搖は免れませんが、餅屋は餅屋に任せておく事です。素人の出姿婆る幕でないと思ひます。

### 家 門 櫻 谿

角座三月の志智廻家一派二の替り狂言の四種が皆、純喜劇であるこゝは悦ばしい。日本一を以て威張つてゐる曾我廻家五郎は中座に出演する毎に、臭味の多い舊劇仕立のもの一幕は、必ず舞臺に懸けるが、是れこそはこれからの喜劇の歩みの、列中に加へてはなら



ぬ。

## 新谷 誠水

私は特種の立場から喜劇が好きで見  
てゐますから、廣い意味の喜劇に就て  
申上る事は出来ませんが花柳界の表裏  
を巧に出すものは喜劇より外にありま  
せん、然るに此頃の喜劇は理窟つぽく  
なつてゐるのが一番悪い事で、瀬戸英  
一クンにでも花柳界の喜劇を書いて貰  
つたならと思ひます。

## 白岡 道太郎

現在を基礎としての、喜劇の將來に  
就ては、何の期待する優も、期待すべ  
き作家もないと思ひます。今のクスグ  
リ本位の物は、早く亡びて了ふべきが  
當然だと思ひます。若し將來に迎へら  
れる喜劇を考へるならば、現在の社會  
の底に流れて居る——非宗教觀念から  
來るニヒリズム、それを多分にこりい  
れ且つ消化されたものこそ、大衆に喜

ばれるでせう。例へば、江戸末期の洒  
落本の流行は、かうした傾向を明かに  
示したものではありませんか。最も今  
日、あんな洒落本が、そのまゝ舞臺に  
活される——と言ふのはありません

## 竹内 勝太郎

これからの喜劇は何よりも、もつこ  
人生に觸れたものでなければならぬこ  
思ひます。いつまでも茶番狂言や大阪  
俄の繰返し、然も西洋種の焼直しでは  
承知しませまい。お能の方の狂言が完  
成し切つて固定してしまつてから、日  
本に喜劇の發達せぬのは爾來日本民族  
に廣やかな人生觀を生み出す生活の根  
強さがをかつたからではないでせうか  
徳川期に洒落本や、滑稽文學が相等盛  
んでありながら喜劇不振で茶番やフア  
ースの範圍から脱し得ぬのは人生の見  
方が皮相だからでせう。即ち内部にミ  
云ふよりは皮一重に深刻な悲劇を包ん  
だ喜劇こそ本當の喜劇だと思ひます。

## 松村 英一

永い間芝居を見ないので段々興味が  
なくなつて行く。少し見つゞけるこゝ、  
またそこに特別の味が感じられるのだ  
らうが、さういふ心持の動く時がない  
のは仕方がない。一つは心から惹き  
つけるやうな芝居がない故かも知れな  
い。これでも一頃は月に四五度は必ず  
見たものだが。さて御問合せであるが  
喜劇ももう少し上等のものが欲しいこ  
思ふ。これまでのものは作爲の誇張が  
餘り露はに眼につき過ぎる感があつた  
もつこ自然な、それでゐて我等の生活  
にびつたりするものが見たい。一體日  
本にはいゝ喜劇作者がゐないやうです  
な。

## 中井 新三郎

五郎一座所謂五郎劇亡べよ  
五九郎一座の所謂五九郎劇亡べよ  
而して後  
理屈も説教も道話も何も無い。

阿呆らしいほご暢氣な喜劇の起らん  
こゝを祈る。

### 相田 隆太郎

一、洗練された理智的要素がもつミ加へられるでせう

一、新鮮な感覺的要素（漠然と斯ういつて置きます）も要求されます。

一、そしてやはり文明的なペーソスミユーモアの交織。

一、それからいゝ子役を得られないので困難でせうが、純真な子供の世界に材をこつた美しい透明を喜劇（必ずしも子供等のそれが主でなくともいゝ、伴奏ぐらゐでも）がほしい。子供のみならずさういふ喜劇は善良な父親や母親の心をひく事と思ひます、

### 山内 房吉

かなり廣い意味にこれる御質問だと思ひます。私は今の喜劇なるものが、ほんごうに私たちを笑はせて呉れない

こゝを不満に思つてゐるものです。それは喜劇の作者も演出者も俳優も餘りに故意に観客を笑はせうとするからではないでせうか。しかしほんごうに笑へるものは、もつミ深い現實の把握から生れるだらうと思ひます。最近、築地小劇場でやつたルナチャルスキーの（解放されたドンキホーテ）なご本格の喜劇だと思ひます。私たちは心から笑へる喜劇（ファースでない）を要求します。

### 白石 實三

何よりもよい喜劇作者が出てほしい俳優も歌舞伎役者でない素人で、時代に理解のある新人が出てほしい。『獅子に喰はれた女』など、すこしも喜劇らしい感じがされません。それより『盛遠』の方がカルカチュラブルで面白かつた。よく現在の俳優をつかひこなしてゐると思ひました。観る眼には現實はなれがして、あゝにふかい何物か

をのこされるやうな喜劇がほしい。昔見たゴーゴリの『檢察官』なご、底をわりすぎてゐて面白くなかつた。内容はあれでも、もつミ舞臺効果のあるものが観たい。

### 姥 谷 生

この月も文壇劇界の諸氏に『これからの喜劇について』の御回答を求めました。そして、かく大多数の著名の方々から御意見御伺ひ得たこゝを深謝してゐます。

私は演劇の將來に、きつミ喜劇の劃期時代が来るだらうと思ひます。或ひは今その機運に向いてゐるやうに思はれます。

「これからの喜劇」は藝術としての反射的感情である『笑』が、今の大眾を救ふこゝの出来るやうな積極的なものでなければならぬやうに思ひます。大眾にこつても教室にちかい新劇よりも「見て面白い」喜劇が悦ばれるこゝ信じます。

浪花座四月興行上演

# 小楠公

壹幕

大森痴雪氏作

## 時所人

正平三年十二月二十七日

芳野山如意輪堂

楠帶刀正行

楠次郎正時

楠小次郎正儀

和田新發意賢秀

和田新兵衛高家

紀六郎左衛門

野田四郎

三輪四郎兵衛

關地良圓

秦信連

童清里

河邊石掬丸

大塚掃部助

阿間了願

原四郎三郎

小寺一乘坊

四條中納言隆資

その他楠氏の家臣、中納言の家臣等

中央から上手一面に如意輪堂の建物。正面に階段、その上に扉、左右は廻廊と半藪、檜皮葺の屋根。堂前の廣庭には古木の櫻と松など。下手正面から側面へ、塔の尾の御陵に通じる山路も、木立の間に延びて居る曇つた日の午後。

御陵道の登り口に數名の郎黨が控えてゐる。

郎黨の一 御參拜が大層長いではないか。

同 二 今度は大事な合戦ゆえ、先帝の御前にひたすら戦勝の御祈願をなされるのであらう。

同 三 藤井寺に住吉の二度の合戦に手ごりした高

氏め、今度は執権兄弟を總大將にして六萬さやから十萬さやらの軍勢を差向けたさ云ふからは、さ

うで凄まじい大戦ミなるのであらう、俺達も一期の腕の試し時ぢや

郎黨の一 合戦の場所は何所か、この間の御勝利の例もあるで、今度も屹つミ迎へ討ちをなされるのであらう。

楠小次郎正儀(十四五歳烏帽子、直垂)三輪四郎兵衛(六十餘歳、同)揚幕から出る。

正儀 兄上方は

郎黨の一 お二方ミも唯今先帝の御陵に御参拜中のござります。

三輪 暫らくこれでお待受けなされませ。

郎黨は敷セを敷く、二人坐す。

険しい山路で和子には嘸お草臥でござりましたらう。

正儀 故郷の金剛山に比ぶればこの芳野山などが何であらう、然し爺こそ嘸難儀であつたらう。

三輪 手前などは昔からは山には馴れて居ります、なアに、何ミもござりません。

正儀 藏王堂に辿りついた頃には大分息づかいが苦しさをであつたぞ。

三輪 正直を申すミ、歳の老るさいふこミほご人間に取つて怨めしいものはござりません、過ぐる湊川の合戦には手疵のためにお供に別れて先殿河内守様

の御先途も見奉らず今度はまた老ぼれて留守居をせいに仰せられる、何ミも口惜しいこミでござりまする。

正儀 その代り私が兄上のお供をして爺の分までも働いてやる、屹つミ兎首を土産に持つて戻つてやる、それでよいであらう、もう愚痴などは申さぬがよい。

三輪 忝けなふござります、それでこそ四郎兵衛がお守り申上る和子様でござります。

郎黨の一 小次郎様には今度の合戦に御出陣遊ばす思召しでござりまするか。

三輪 是非ミも初陣かしたいミのお望み、それでお母儀様にも御内聞にして、これまで兄上様方のお跡を追ふて参られたのぢや。

郎黨の一 天晴なお心がけ、殿にも嘸かし御満足に思召さる、でござりませう。

和田新渡意賢秀(二十四五歳、腹巻、法衣)が御陵の道を降つて出る。

賢秀 殿には程なふ御下向ぢや、引續き如意輪堂に御参詣あらせられるから、お座をミ、のへて置け。

郎黨の一 はッ。

郎黨等は堂前に座を設ける。

賢秀 小次郎殿さうしてこれへおいでなされた。

三輪 實は兄上様へお願ひの儀があらせられてござりまする。

賢秀 ふう、殿へ。

三輪 一門の好誼、御發意様からもさうぞ然るべくお言葉添へを。

正儀 今度の合戦は一期の大事に聞きます。私はさうでもの出陣がしたい。なア新發意殿、お身も兄弟で行く、兄上も兄弟で行かせられる、それに私一人跡に残る、私はそれが口惜しい。

三輪 道理をせめた小次郎様のお歎き、四郎兵衛は一應も二應も殿のお叱り受くるは覺悟の前でお供して参りました、新發意様、暮々も和子のお心を酌分けられて、さうぞ御出陣のかなふやうにお執成しを。

賢秀 健氣な小次郎殿、然し河内發足の砌りの仰せに背き押つけに願はれたまで、よもやお許しはあるまい、先づ如意輪堂の御參詣が終るを待ち、御機嫌を見圖らうて願はれるがよろしからう、暫らくあの房で待たせられるがよ。

和田新兵衛高家(二十歳、鎧、烏帽子)が陵道から出る。

高家 兄上、御下向でござるぞ。

賢秀 さ、小次郎殿。

三輪 では新發意様、暮々もお願ひ申す。

正儀 四郎兵衛は下手へ去る。

楠帶刀正行(二十五歳、鎧、烏帽子) 弟次郎正時(二十二歳、同) 紀六郎左衛門(三十歳、同) 野田四郎(同) 關地良圓(腹巻、法衣) 阿間了願(同) 河邊石塙丸(鎧)その他臣數名、御陵道から出る。正行は直ぐ堂前に坐し、祈願する、此これにならう。

大塚掃部助(二十七歳、鎧)が小寺の一乗坊(三十餘歳、腹巻、法衣、頭部、腕、脚等に綱帶し居る)を高手に手を縛め、郎黨數名を従へて下手から出る。

郎黨の一人は一乗坊の持つてゐたらしい長巻をつぐ。

賢秀 掃部助か、こやつは何者ぢや。

掃部助 あの谷をさまよふ怪しい奴

まさしう敵方の間者が刺客に相違ないこ見て引捕らへました。

一乗房 いや、それがしは刺客でも間者でもない、楠帶

刀正行殿の見参に入りたさに

掃部助 いふな、それなら何の爲めに人目を忍んであの

谷底を徘徊して居つたのか。

一乗房 大手は山門の固めが厳しうて登山もかなわす、

餘儀なう谷を傳ふて参つたが、理不盡に捕へられ



てこの有様、然し疑ひの眼で見らる、お身等に辯解しても役には立つまい、兎角は大將の前で申さう直様楠殿の許へ曳いて行かれい。

正行は祈願を了つて床几にかける。

正行 見れば夥多しう手を負ふる、様子、兎にあれその縛めを解いてやれ。

掃部助 ハッ

繩を解く。

一乗房

一乗坊はよるめき寄つて正行の前に手を仕へる。

お、お、楠殿、殿には所詮御見覺えもござりませまい、それがしは山名伊豆守時氏殿の旗下に

小寺の一乗房を名告るもいでござる。

掃部助 果して敵方ぢやな。

斬りかけやうとする。

正行 待て、その敵方の一乗房をやら。何んの爲めにこの芳野へは忍び入つたぞ。

一乗房 殿の御仁惠肝に銘じて前非を悟りせめて敗殘の命を捧げたく遙々都より參つてございます。

正行 ふう、命を捧ぐる……

一乗房 殿、先月二十六日の住吉合戦に味方六千の大軍を持ちながら千にも足らぬ殿の軍勢に斯けなやまされて、散々の敗北、大軍のなりひこは云ひながら崩れ立つて一支えもなく、人雪崩をうつて渡部

の橋へさしか、り、追ひ落されて溺る、もの數知れず、それがし辛く踏み止まり、爰を先途に防ぎ戦ふたれぎ、素より續く味方はなし、忽ち大勢の中に取圍まれ、所詮討死するならばよき大將を引組まんご必死になつて斬りかけたる緋絨の騎馬武者が、誰あらう總人將の楠帶刀正行殿は後に至つて知り申した。

正行 ごは後に至つて知り申した。正行さてはあの時の

荒法師、大長老を阿修羅の如く打振つて、それがしが馬の脚をながんご斯け向ふたはお身であつたか。

一乗房 馬は駿足、此方は徒歩立ち逸つてないだ一振り馬足にミッか空を切る。

正行 得たりごそれがし横さまに突きおろしたる鎗は面を外れて、こめかみのその疵か。

一乗房 突かれて思はず控つごなり、跳ね起きる間に間は隔つ、然かも左右に荒手の武者、喚き叫んで斬りかゝる。

正時 お、その武者こそはそれがしぢやア。

一乗房 してお身様は。

正時 弟次郎正時。

一乗房 今一騎の法師武者は賢秀 利田新發意賢秀ぢや。

正時

大將手づから太刀討たるは軽々し、それがし代つて討取らんこ、馬を棄捨て駆け向へば新發意殿も同じ思ひか、徒歩立になつて左右一度に斬つてかかつた。

賢秀

眞向眼がけて打ちおろす大長巻を引外し、右手の腕の小手の外れを丁ミ斬れば、正時殿も草摺の絨を縫ふて高段を裏まで通れ、突き立てられた。

正時

突かれて敵はたまり得ず、もんざり打つて渡部川へ眞逆様。

一乗房

あら恐ろしや勿體なや、存ぜねばこそ武士の身にて一天萬乗の大君が股肱ミたのみおはします桶家の大將三人、まで劍を合はす、御覽ぜられい、斯く、如く不具に等しき身なり果てたは、ひこへに神罰佛罰でなうて何でござらう、方々それかしは味方ミ共に渡部川の水に溺れて八寒地獄のまん底に沈むべき身を殿の御手に救ひ上られ醫藥を給ふて手厚き御介抱、斯くの如く太刀物の具もかづけられ、剩さへ路中難澁ならんて馬までも與へられたる前代末聞の御仁恵そのみならず虜一同ミ都へ還さる、砌りには大將手から禮を厚うして懇ろに稿らはれたる御情け、凡そ日本廣し云へぎもかゝる良將が又ミ一人在さうか、一天萬乗の大君は申すも更なり、かゝる大將に弓ひくこ

冥罰の程も怖ろしく、よしや物の役には立たずもあれ、まさかの時は殿の矢面に立ち閉がつても命の御恩に報ひ参らせたう。

正行

待たれい、命の恩ミ云はるゝが、正行曾て御身は素より何人にも、さばかりの大恩を施した覺えはない。

一乗房

渡邊川の御仁恵が命の恩でなうて何でござりませう。

正行

戦ふうちこそ敵なれぎ、すでに戦ふ力を失ふたるものは敵にあらず況して溺るゝ者を救ふは當然の人の道、獨りそれがしに限つたこゝではない。

一乗房

いゝや殿なればこそ救はせられた、恐らく足利殿、軍勢ならば、岸に登らんミするものを突きはめても殺し盡さいでは措きますまい。

正時

兄上、一乗房の願ひは、時にミつて此上もなき吉兆ではござりませぬか、新發意殿もさう思はるゝであらう。

賢秀

營に吉兆のみならず、一乗房の心がやがて千人萬人の敵の心に通じる時、始めて逆賊討滅の大願は成就するのでござります。

一乗房

殿の御仁恵に泣くものは敵軍のうちにも少からずござりますぞ、おこがましけれぎ、先づこの魂より、平にく

この以前正儀と四郎兵衛下手から出で窺ふ。

正行 折角の志忝う存するが、この度の合戦は正行思ふ仔細あつて外様を交えず一族ばかりを具して参る一乗坊ではそれがしの願ひは……

正行 志は受け申すが、お身は本来取るべき途が他におはさう

三輪 殿、一門譜代の輩なら御供が叶ひまするぢやな

正行 四郎兵衛……小次郎もか。

正儀 兄上、大事な合戦に小次郎一人残さるゝは口惜しうござりまする。

正行 小次郎、これへ来い。

正儀 はい

正行はちつと正儀を見て涙を拭ふ。

正行 今小次郎がこの體を見るにつけ、思ひ起すは延元の昔櫻井の驛にて父河内守正成公に別れたる當年の悲しみ、小次郎よつくお聞きやれその時それがし僅かに十三歳、今そちがさうあるやうに父の膝近う召し寄せられ、この度の戦萬に一つも生還は期し難し、それがし討死し極らば必定天下は逆賊の手に落ちやう、そちはこれより河内に歸り成人の後に一門一族のあらん限り頼まれ参らせたる上御一人の爲めに身命を捧げひさへに奉公の誠を盡せ、ゆめ／＼富貴榮達に心を惑はずべからず

かなる御教訓、果せるかな父上には湊川にて御生害、その時最期の一念にて七度び人間に生れて逆賊を亡ぼさんとの御言葉は取りも直さず桶家子々孫々への御遺言、今兄が出陣にのぞみそちに云ひ遣すもこの御教訓より外にはない、櫻井の驛にて父上に別れた時のこの兄が心を思ひ、そちも今から河内へ歸れ、返す／＼も七生報國の御志を忘れまいぞよ。

正儀 兄上の御教訓に従ひ出陣は思止まり、今から故郷へ歸りまする、

三輪 殿、眞平お許し下さりませ、和子が御出陣遊ばせば爺も御供して天晴死に晴れを、目前の義ばかり思ふたは四郎兵衛が一生のあやまり、歳老ひては體ばかりか心までが、淺猿しうなり果て面目次第もござりませぬ。

正行 戦ふばかりが忠でもなく、死するばかりが義でもない。

一乗坊 然るに今のお言葉にてはまさしう殿には……

正行 いや方々も聞かれい、それがし今日天顔に咫尺し謹んで奏し奉るやうは、父正成脆弱の身を以て大敵を碎き先帝の宸襟を安んじ奉りしが幾程もなく天下再び亂れて終に湊川に於て討死仕る。然るに正行正時既に壯年に及び有侍の身萬一病に瘳る、

ここでもあらば、君の御爲めには不忠の身となり

父の爲めには不孝の子となる、今度尊氏大軍を差  
向け君を惱まし奉らんす、まさしうこれ一期の  
大事止行身命を盡して合戦仕り敵將師直師泰が首  
を我が手に討取るか、但しは正行正時<sup>の</sup>首を彼に  
授くるか二つに一つを覺悟仕る。仍て今生にて今  
一度龍顔を拜し奉らん爲め、斯くは内仕るに申  
上ぐれば勿體なくも主上には汝を以て股肱となす  
に世に有難き御仰せ、勅答申す言葉も知らず退出  
なし、今先帝の御廟にも勝利を得ずんば再び拜し  
申すまじき最期の御暇を告げ奉つた。方々も知る  
如く今年父が年忌に當る、千倍萬倍の供養より  
敵に向つて忠戦を勵み力盡きなば討死して名を百  
代に垂れてこそ眞に追善供養なれ、親を討たれ兄  
弟を亡び一家一門勤王の一事に殉じたる方々も思  
ひは正行と同じであらうな。

賢秀は珠数を引切つて地上に投つける。

賢秀 佛果も頼まぬ、後世も願ふまい唯この一戦に思ひ  
をこめて雌雄のほさを決し申さう、賢秀一門郎黨  
百四十餘名に代つて、殿に一命を捧ぐることを誓  
ひ申す。(皆一齊に髮髮を切つて示す。)

一同 殿。

如意輪堂の扉を開いて原四郎三郎が出る。

四郎三郎 我れこそ楠殿を狙ふ刺客ぢや

一乘房 や、お身は原四郎三郎殿ぢやな

四郎三郎 一乘房、同じく渡部川に命を救はれても頑  
迷不覺の四郎三郎は肉身の兄弟二人を討たれた怨  
みは去らず、當の敵は正行殿、一太刀怨まん忍  
び寄つたが、大義の爲めに命を捧ぐる大將のお覺  
悟に一心發起して斯くの通り、楠殿、京四郎三郎  
は足利方に少しは武名を知られた男、門出の血祭  
りにして不足はござるまい、同じくは大將お手づ  
から御成敗下されい。

正行 い、や討つまい、お身既に敵ではない

四郎三郎 討たれずば腹かつさばいて

一乘房 待たれい、同じ死ぬる命をなぜ楠殿へ、いや朝  
廷には捧げられぬ。

四郎三郎 何云ふ

一乘房 思へばそれがしは太刀さるすべも覺束なきこの  
體、今より本來の道に歸り申さう、お身は代つて  
朝廷の御爲めに

四郎三郎 朝廷の御爲めに……楠殿、殿の御供は申す  
まい、主上に捧ぐるこの命を何卒御手へお預り下  
され。

正行 ようぞ申された、お身もそれがしも等しく草莽の  
臣下なり、如何にも戰場へ伴ひ申さうぞ。

四郎三郎 忝けない、いざ合戦の砌りには一番駆けの華  
華しい斬死を見せ申さうぞ。

一乗房 本来の我に歸れば一所不住の一乗房、楠河内守  
橘の正成公を初めし王事に仕れし方々の後世安  
樂を祈り申さう、おさらばでゐる。

正行 小次郎そちも直様ふる里へ。  
正儀 はッ兄上お暇申上げまする。

揚幕から葦清里へ出る。

清里 四條中納言の卿の御來着にござりまする。  
正行 お出迎へ、

揚幕から四條中納言藤原隆資輿に乗り錦旗を捧げ  
た秦信連其他を随へて出る。

信連 先帝の御陵に御參詣に承り中納言の卿には御軍議  
の爲、輿をこれへ進められてゐる。

隆資 畏くも主上より重ねて御沙汰を賜はつてござるぞ  
正行 はッ。

隆資 この度の合戦天下の安危たるべし、さりながら進  
退度に當り、變化機に應ずるは勇士の心とする所  
勝敗必らずしもこの一擧に限るべからず、謹て命  
を完ふし股肱ミタのむ我が心に副ふべしとの御説

正行 世に有難き御仰せ、正行謹んで御請け仕りまする  
信連 尚隆資卿を總大將に任せられ、紀伊、和泉の一揆  
二萬餘人を引具し、正行を援けよき錦旗を下し給  
はつてござるぞ。

正行 中納言の卿御出軍あつて、敵の一方を押さへ給は  
らば、それがし慕直に本陣へ突撃し師直兄弟と一  
期の合戦仕らん、今を名残の吉野山……

信連 敵は巳の都を發し、八幡に於て軍勢の到着を待つ  
ミの注進、乾坤一擲の大合戦は早や目睫に迫つて  
御座るぞ。

正行 今を限りの芳野山……。

旗を以て堂の扉に歌を書き、名を記す。

隆資 かへらじこかねて思へば梓弓

正行 なき數に入る名をぞこぼむる。

四郎三郎 なき數に入る名をぞこぼむる。

正時 桶帶刀橘正行……兄上。

正行 御堂の壁板に各々の名を書き連ね桶一門が過去帳  
として残されい、次郎。(矢を渡す)

正時は扉に名を記す、他も皆矢又は小柄を援取る  
雪しきりに降る。

幕

中座四月興行上演

喜劇 金！金！金！

一幕二場

楠本木念仁氏作

一塚漁人氏補訂

現代

冬、北海道北見國枝幸

場劇

第一 北見國枝幸川水源の洞窟  
第二 枝幸町望雲館階上の廣間

登場人物

アイヌ人 ベツツナイ  
アンコシ 呼ばれる熊  
炭礦家 飯島時彦  
技席長 平手格太郎  
技手 山田三郎  
同 島山竹三郎  
藝妓 秀若

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同  
會社員 仲居

里愛福菊玉お 菊太 菊三  
甲乙丙丁 甲乙丙丁 夫  
丁丙乙甲 丁丙乙甲



第一 北見國枝幸川水源の洞窟

本舞臺平舞臺の通り上手より七分程哦々たる斷崖絶壁の背景處々斷崖の突起せる好みにて雪に深くかくれてある下手は積雪の山又山の書割（上より繩を下ろして人の出入ある）上下を通じて平舞臺に白樺ぶな松等の大樹數本、千古斧鉞を入れざる物凄々體、窟の向ふに細き河流の流れを見せる上手斷崖の中央に高さ四尺餘の洞穴の入口中黒眞の事、舞臺一面熊笹の枯れたる雪持ちを置く、洞窟の入口に一尺程の切石二個を置く此切石は砂が澤山に含有して有る心、所々に金色や星の如く輝いてあるものを立てかけ、中央に焚火がチヨロ／＼と燃へて居る其に獸肉を串にさして二三炙られて有る、總て北海道枝幸川水源の場面物凄々詭へにて好みの鳴物にて。——幕明く。

ベツツナイは熊を圖背ゐて弓を持ち上手に身構へる。下手に飯島、平手はピストル、山田、島山はハンマアを持ち身構へる

暗き光線にてピストル四五發の音にて山嵐で幕明く光線あかるくなる。

ベ  
ヤイ誰だ、俺の手飼の可愛い此アンコに鐵砲打つたのはきいつだ、サア吐せ、ア鐵砲打つなら打つて見よ、アイヌの矢には千に一つも仇矢のねハ事は知つてゐるか、この矢の先には怖ろしい毒がぬつてある事を知つてるか、當つたら最後狂ひ死だ

ぞ、サア鐵砲打つなら覺悟して打て。

弓矢を番へてキツさなる。

四人ベツタリ座してブル／＼さなる。

飯島

フワ。まア／＼待つてくれ／＼君が飼つてゐる熊さ知つたら何打つものか、出し抜にこんな兇暴な奴が現はれたからこつちの命が大事だからツイ一發放したのだよ、サア此の通りピストルを投出すから君も其弓矢を何さかしてくれ給へ。オイ諸君、皆エモノを投出し給へ／＼。

これにて皆々エモノ投出して平伏なし

三人

オイ／＼、助けてくれ／＼此の通りだ／＼。  
ヨシツ、打たないミ云ふなら許してやる。オイアンコよ、弱い奴等だ勸忍してやれよ

平手

オイ熊にものを云ふて判るのかい  
當り前よ、何十年の間此山に一所に暮している熊だ、口こそ利けないが、俺の言葉はチャンミ聞分けるのだ、ナアアンコよ

これにてアンコ合點する。

飯島

コリや驚いたね、  
驚いたらサア熊にもあやまれ

飯島

ホイ／＼  
何がホイ／＼だ、變な事を云ふミ俺は兎に角此奴がすぐに喰ひ殺すぞ。

飯島

フワ、オイ諸君もあやまつてくれ給へ、アイヌ人の云ふ事に嘘はないよ、悪くするに本當に喰ひ殺されるぜ。

三人

フワ、あやまりますも〜

四人熊に向つて両手をつき

飯島

熊君、誠に失敬な真似をして何卒許してくれ給へ  
三人 此通りあやまるよ、許して呉給へ〜。

三人

これにて熊も両手をついて頭を下る

飯島

さうだ諸君、両手をついて我々の謝罪を諒解して  
るよ、益々禮儀の亂れてゆく都會の人間は此熊君に對して耻しいね。

べ

都會云ふにお前等はシャモだね。

平手

シャモだなんて鶏見たいに云ふてるよ。

飯島

そ、ぢやないよ〜、シャモ云ふのはアイヌ語だよ、我々内地人をよぶにはシャモ〜云ふのだ。つまり旦那云ふ意味なんだ。

平手

ハーン、するに我々を尊敬してゐる譯ですな。

山田

そつ聞くよ、まさか腹も立ちませんね。

島山

オイ、アイヌ君、我々はシャモだよ〜。

べ

そうだらうね皆面上けて見せろ。成程なつかしいな、お前等人間だな、人の聲人の面、永い間見ねへから忘れてゐた、見りや矢張り人間がなつかしい様な氣持ちがする、世の中にはこんな人間がウ

ジャ〜動いてゐるのぢやナ、ア、珍らしい、何

の用でこんな山の中へ来たのかわらねへが寒かんべい、サア火が此處にあるからあたつて行けやい

飯島

有難う。さうだ諸君、アイヌ云ふものは情の深いものだとは聞いてゐたが、成程親切なものだね

平手

全くですね、オイ皆あたらしめて貰ふぢやないか。

山田

賛成々々

島山

有難う〜

べ

捨棄詞の内に一同焚火を圍む内ベツツナイは穴より枯柴を持ち來りて火にくべる。

べ

サア、アンコ、われも此處へ來て火にあたれよ。

飯島

君々、大丈夫かい。

べ

ナニ大丈夫、さうするものかい、オイアンコよ

飯島

われも安心して此處へ來て火にあたれよ、こいつ

べ

等こんな怖ろしい面をしてわれ〜を喰ひ殺し相

山田

な人相ぢやが、案外弱虫だから安心して此處へ來

平手

い。

山田

そう云はれるにぎつちが猛獸だか分らないね。

島山

ちがひなしだ、ハ、ハ、ハ。

べ

笑つてやがる、笑ふ程變な面になるが、こわがる

山田

に及ばないよ、俺がついてる〜サア〜來いよ

べ

來いよ。

山田

これにてアンコはノソ〜ベツツナイの側へ來り

べ

來いよ。

山田

これにてアンコはノソ〜ベツツナイの側へ來り

て兩手を出して火にあたる。

此内飯島ウイスキーを出して

飯島 成程よく馴れたものだね、オイ、アイヌ君、一つやり給へ。

コップにウイスキーついで出。

べ へエー、コレヤ何だい。

飯 酒だよ、ウイスキーだよ、お前酒は嫌ひかい。

べ 嫌ひじゃねへが、酒の味なんてモウ永い間飲まねエからさんな味だか忘れたよ。

飯島 忘れたなら呑んで見たまへよ、英國製の甘味い酒だよ。

べ そうかい、ぢや御馳走になるべい、ヒヤーおそろしい味だ、コリヤ毒ぢやあるめへな。

飯島 大丈夫だよ。

べ オうめいなく、體中がグワーミなつてい、氣持だね、オイアンコよ、我も一杯やらねへか、さうだい、よい氣持かい、オーさうか、オヤ兩手を

ついてよろこんでるよ。モ一杯くんねエ。

飯島 よしくおしやくしよう、しかしこんな深山の谷間

間で人間に逢ふなんて豫期してゐなかつた事だが

こんな山の中に君達の部落があるのかい。

部落！そんなものはねへだ、この廣い山の中に住んでゐるのは俺さ此のアンコだけだよ。

べ

飯島

べ

べ

べ

アンコの頭をなぞる。アンコ合點する

飯島 實に聖代の御代に見る事も出来ない原始的の生活

だね。ネ君、こんなに不自由な生活より文化の發達したシャモの町が或ひは益々賑やかになつて行く

くアイヌの部落へなせ出ないのだい。

べ 俺は出られねへ身の上なんだ、うつかりアイヌの

部落へでも歸つたらスグ仲間の奴に殺されるのだ

俺は自業自得であきらめるが、此アンコも一緒に

殺される、それが可愛相で歸らねへ、ナアーアン

コ一生この山で暮そうなア。

飯島 フーン、するミアイヌの部落で何か悪い事でもやつて、此の山の中へ逃げこんで來たのだね。

べ そうだ、俺は神様に背いたでナ、アイヌにしちや

神様にそむくミ云ふ事が一番悪い事なんだ。

べ へエー、神様にそむいたミは何をそむいたのだ。

平手 アイヌならうつかりしやべれねエが、お前達はシ

ヤモだから話してもよかんべい、お前等アイヌの

熊祭りミ云ふものを知つてるかい。

四人 聞いてるよ、知つてるよ、それがさうしたのだ。

べ

四人

べ

べ

べ

べ

べ

べ

其殺される熊はね汚れた熊ぢや駄目なんだ、それで山へ入つて熊の赤坊を一匹生捕りにしてよ、そいつを人間の女の乳を吞ましてまア二三年育て、大きくするのよ、其大きくなつた奴をよ、熊祭の時に引出して、大勢か、つて射殺して神様へ供へるのだ、見てやつてくれ、このアンコムナー俺の親父が山の中でまだ赤坊の此アンコをよ生捕つて歸つてよ、俺のお母の乳で育て上げたよ、俺も此奴とは同じ乳で大きくなつて、畜生でも俺の爲にや乳兄弟よ、俺は此奴がかわい、よく、此奴も俺をつけまわして子供の時分から一つ伏きで寝て来たよ、俺が病氣すりや此奴が心配して病氣になる、此奴が病めば俺も夜の目も寝ずに介抱してチツミも養生は思はねへ。ア、思出すさへ怖ろしい、俺が十八の年の熊祭り、村の掟で神様のお祭熊を出すのが俺の家、殺されるのが此アンコ、前の日から清められ赤い絹やら青い紐で五色にからだを飾つて貰つてもナ、そこが養生の悲しさに明日殺されるは夢にも知らず喜んでゐる、此奴の姿見るにおいらは、たまらねへ其夜は寝ても寝つかれねへ、かわい相やらいじらしいので、俺は泣いて泣き狂ふた。アンコ寒い晩じやつたな

熊は合點する。手を目にあて、泣く。

平手 社長々々熊が泣いてますよ。

飯島 人語を解する感情の猛獸にも一種の靈感に打たれるのだね。それから、

べ サアそれからさうかして此奴の命を助けたいと思つたのが神様に背く始めだよ、明日お祭云ふ前の夜にさう、此奴を盗み出して此山奥まで逃げ出したのよ。

飯島 思ひ切つた事をやつたね、後で村では大騒ぎだつたらうね。

べ そりや大騒ぎだつたに違いねえ。熊が居なけりや熊祭は出来やしねへ、外の熊ぢや間にあはずさ。

大抵は村中手分けして俺も此奴を探したに違いねえ、その危い中を此奴も二人山又山と逃げまはつた、もしや見つかつて見ろ、此奴は元より俺の命もありやしねへ、さうぞ見つからねへやうも滅多に人の分らねエ此山の谷の中、このほら穴が二人のかくれ場所だよ。

飯島 成程ね、アイヌは情が深いと聞いてゐたが、本當だね、一體君が此處へ逃げ込んでから何年になるのだい。

べ サア何年になるかな、正月もなけりやお祭もねへ山の中だから、何年になるかハツキリ判らぬえ、

飯島

成程ね、アイヌは情が深いと聞いてゐたが、本當だね、一體君が此處へ逃げ込んでから何年になるのだい。

べ サア何年になるかな、正月もなけりやお祭もねへ山の中だから、何年になるかハツキリ判らぬえ、

飯島

成程ね、アイヌは情が深いと聞いてゐたが、本當だね、一體君が此處へ逃げ込んでから何年になるのだい。

オ、そうだ、そこにあるブナの木ね、あれがこれつばかりの細つこい木だつたが、何時の間にやらあんな大きな木になつたからナ。

飯島 フムーあの木がコレツばかりだこは驚いたね、少くとも二十年からになるぜ。

山田 驚きましたね、オイ君一體君のゐるた部落はなんこ云ふ處だつたのだい。

ベ 枝幸こ云つたよ。

飯島 オヤ枝幸かい、コレも驚いたね、オイ君、枝幸の街なら今我々がゐる町だよ、二十年前の枝幸はアイヌ部落だつたのかね、今はね、枝幸の街は文化が發達してアイヌの姿なんて見ようたつて見られないよ。

ベ ヘエー、だん／＼シャモの奴が入込んで来し吾々アイヌを迫出して仕舞ふのだね、大かた俺のお父つさんもお袋も、モウ此世には居ねへだらうな。

兩手を組み無限の思入、此時平手は焚火の切石をしきりに調らべて居たが、だしぬけに大聲にて

平手 ヒヤツ、砂金だツ！

これにて皆々飛上る。

飯島 吃驚するぢやないか、さうしたんだツ  
社長ツ、さうもこも有るものですか、御覽なさい、此奴は素晴らしい砂金層ですよ。

飯島 ヒエツ何？砂金ツ？

立上り石を前へけり出し、

オ、オヤ／＼。

じつこ石をながめ無言の驚き山田鳥山の兩人左右よりハンマーにてこつ／＼叩き驚きの思入れ

山 ヒヤツ砂金だツ

オ、素的な砂金だツ

平 素的にも何にもこんな素晴らしい奴は世界にも餘り數がないよ僕もすいぶん標本を見たが此容積に是位の澤山自然金を含有してゐる砂金層を見るのは初めてだ、

飯 ア、有難い——我飯島鑛山株式會社は終に破産を免がれるのみか、將來世界的大發展だ諸君本社の爲に萬歳を發聲したまへ。

平 飯島鑛山會社萬歳ツ

四人 萬歳ツ／＼、

兩手をあげ大聲、ハツツナイは驚く。

ベ 何だツ／＼お前方向を喜んでゐる、アンコよシャモ云ふ人間は一寸變だナ。

飯 君々々は一體此石塊を何んこ思つてゐるんだよ。

ベ 何さと思つてしないよ。

飯 呑氣だねこれは大變な物だよ。此石塊は大した値うちの有る物だよ。

べ ナニを云ふそんな石塊に價値が有つてたまるかいは俺は只一寸きれいな石だと思つたから拾つて來て焚火の灰除けにつかつてゐるのだ、そんな石塊なら俺が知つてゐる所にベタ一面にころがつてゐるア

飯 ヒエツベタ一面にアノベタ一面にかいオイごこだご。だベタ一面に有るごはごこ／＼ごこ／＼だ。所かい、そうだナお前それをきいて何するつもりだ。

平 ハア、先生大分警戒したナ

飯 夫れや君アイヌ人種の特性として、サイギ心の強いもりだよ、冷靜に／＼、さてアイヌ君此石塊の有家はごこだ／＼、さうぞゆふてくれ給へ此通り頼むよ／＼。

べ お前そんな所きいて何をするのだアレ嫌だ此シヤモは顔色眞青にして目を血走しらしてよ氣味の悪いシヤモだね。

飯 顔色も變るだろよ、一體此石塊を何ご思つてるだこれは金だよ。

金？

べ 金だよ黄金だよ黄金だよ我々人数が命にかけても手に入れようとしてゐる世界の寶物だよソラ此石をねカネさゆふものに替へるごねごんな素晴らし

平 い生活でも出来るのだサアごこに有るのか夫れを云ひ給へそしてこれがドン／＼町に持ち出して行くごね莫大な金に替るのだサアごこに有るのだ云つてくれ給へ。

平 君にも立派な生活をさして充分な利益を得させるよ。

山 サア云へよ／＼、仰つしやつて下さいな／＼。

飯 此通り頭を下けて頼むよ／＼、オイ皆もしつかり頼み給へ／＼。

三人 此通りだ、ゆふてくれ給へ／＼。

べ そりや云わねえ事もね／＼まづ此處から俺の足で一日もかゝるべい、お前なんかなら七日かな、さてもシヤモの足の入れた事もネイ所だ一體金でものはごんなもりだい。

飯 二十年來世の中ごかけはなれて自然の中で生活をつゞけて來た君にはカネの威力を知らないのだナ

べ 一君カネさゆふものは無限の力をもつてゐるのだい、か君早い話が此帽子此甘い酒キモノ此ピストル、ソレ此金時計あらゆるものは皆カネによつて買へるのだカネを澤山もつてゐる人間が世界中で一番偉いんだ人間の幸不幸は全部金、つまり此石塊が人間の運命を左右してゐるのだドウだ君



も人間に生れたのだから一番偉い人間になりたくないかい。

成つてゐるから成りたくねへ人に人間のゐない此の山ではつまり俺が一番偉い人間だ第一此石塊が金ごゆふものにかわつてそんなに力のあるものはトント俺には存み込めねへ。

社長困りましたね黄金萬能の世の中に金の威力を知らない ゆふのですから手がつけれませんねよしッこうしよう、オイ君これから僕等と一緒に一層街へ来しくれ給へそして吾々が建設し、物質文明の有難さを實地に見せて證明仕様夫れが一番近道だ。サ一所に来てくれ給へ。

嫌だ。  
そんな事云はねえで来てくれ給へ、町ごゆへば立派な家が建ち並んでね、美味い喰物が澤山有つて香りの高い酒、温いキモノ失敬だがこんな穴の中で土籠の様な生活をしし一生くらしして人間に生れた甲斐がここに有る、だまされたと思つて一寸でい、から来てくれ給へそして華かな都會生活夫れが君の氣に入つたら、此砂金層の有り所を云ふてくれ給へ、君にも大利益を分配して一生涯幸福にくらそうじゃないか。

嫌だ俺はこれで澤山だ温い毛布は有るし鹿、兎、

鮭、山鳥ご食ひたいものは取り放題さむい思もひ

もじい思もなんにもない春がくればこんな山にも花が咲く花がさいたら美しい小鳥がよい聲をまかに来る、月もさゆれば夕日も赤い氣の合つた乳兄弟のアンコもそばにゐてくれる俺はこんな、結構な處はない、思ふてゐるのだ、此山の中に俺のほしいものは何でも有るのだよ。

オイアイヌ君、君のほしいものは何じも有るご云つたねへ。  
有るよ！

何でも有るだらうが、女が有るかい

女？

そうよ、君を心からなぐさめてくれる女が有るかい。

女？女！ハアン、オレのお袋は女だつた、俺は永年人間に女ごゆふものが有る事を忘れてゐた、人間には男ご女が有るのだつたなア

そうよ獸にだつて雌ご雄ごが有るのだぜ。

それが俺には何もねへ、

苟も男に産れて一生涯女ごゆふものを知らずに死んで仕舞ふさは、怖らく人間中で一番不幸な人間だな

才俺は一番不幸な人間だな。

飯 無論、鳥獸でもめ戀しさに自然の毛並をそろへて

ゐるじやろ

べ ム、成程スルト俺は獸より劣つてゐるね、

飯 そうよ、夫れが君人間に生れて幸福な生活ミゆへ  
るか。

飯 そうだな、君、女ミゆふものを欲しくないか、

永年忘れてゐたのだがそう言はれるミ俺だつて美  
しい女が欲しいやナ！身體が熱くなつたり寒くな  
つたりすらア！アレ皆俺のかほ見て笑つてらア！  
きまりが悪いやハ、ハ、ハ。

飯 ナニ氣まりの悪い事が有るものか、世の中に何が

よいたつて、女ほごよいものはないのだよその女  
がね町へゆけばいくらでもゐるのだよ、柳腰のス  
ツキリした女でも現代流の丸ボチャで色の白いハ  
チキレ相な肉體美を備へた美人ざれでもこれでも  
此金さへもつてゆけばみんな自由になるのだよ、  
氣に入つたら連れて歸つて女房にも出来るのだよ  
俺見たいなアイヌ人にでも、女房になつてくれる  
女が有るだらうかね、

べ サアそれが皆此金の力で自由になるのだよ。

飯 嬉しいなこんな石塊を持つて行つて生きた美しい  
女が、女房になつてくれるミは、サア用意しなよ  
何の用意をするのだ。

べ シヤモは氣が永いねへ、美しい女のゐる街へゆく  
のだ、サアく早く支度しなよく。

飯 オヤく馬鹿に氣が早いね、

平 社長うまく行きましたね。

飯 サアく早く支度しなよ、

三人 萬歳々々。

此内ベツツナイは熊に綱をかけたける、

平 オイく君、其熊を連れてゆくのかい、

べ 一人置いてやるのは可愛相だから一所につれてい  
つてやるのよ、

山 オイくじよだんぢやねへぜ、そんな猛獸をつれ  
て行つた日にや町の人間が腰をぬかすよ、

べ だつて一人のこしておいてやるのは、かわいい相だ  
もの、

島 だつてそんなものを連れて行けや美しい女はお前  
のそばへよりはしないのよ、第一女がほれてくれ  
ないよ、

べ ア左様か、アンコもかわい相だが美しい女にはか  
へられんワイ、オイ、アンコよ淋しからうがお前  
は今日は連れて行かねへよ、お前がついてゐるミ  
俺に女がほれねへミよ、ナニを思案がほしてゐる  
のだよ、俺は直ぐに引かへして歸つて来るよ今度  
歸つて来る時は美しい女房を連れて歸つてくるよ

平 そして三人仲よく暮さうね、ヤ嫌な奴だ、頭をかいていやがるナ

平 大方おたのしみさゆふているのだろ、オイ熊君そ  
うだろノ、

これにて熊はせりふ、通りよろしく手まれ

ベ 何だかアノコにも耻しいねへ、サアノ淋しから  
ふが俺が歸るまで穴の中でまつてゐる當分くひも  
のは穴の中に用意してあるからね、冬中穴ごもり  
したつて大丈夫だサアノ、這入つてろノ

熊イヤノするをなだめて穴へ入れる、

俺の歸る迄必ず外へ出るじやないよ、又こんな怪  
しいシヤモが來たら大變だからね。

云ひつゝ熊笹澤山持ち來りて穴の口をおほひ雪を  
あつめて穴の口へおく、内平手はしきりに石を調

らべつゝ、

平 ネエ社長見れば見る程立派な砂金屑ですな、よく  
分析しなければ判りませんが、私が今自分量でも  
少く共此石だけに三ペアセントの自然金を含んで  
ゐますねへ、

飯 ヒエー、それだけの石に三ペアセントの黄金が含  
有してあるは全く地球上の奇蹟だね、それがゴ  
ロノ、到る處にころがつてゐるは無限の寶庫の  
カギを握つた譯だね、

山 三ペアセントミ云ひますミ、時價に直していくら  
ぐらゐになりますね、

飯 まづザツト六百圓以上だね、

島 ヒエー此石が六百圓ですつて、

ベ 六百圓さいふミ、ミの位のかねなんだ。

飯 何も知らないネ、ヨシあの石塊を即金で五百圓で  
僕が買ふ、サア受取り給へ、

ベ こりや何だ、

飯 帝國政府發行の百圓紙幣五枚だ。

ベ こんな紙屑は入らねへ

飯 勿體ない事するな。サア懷中へ入れておけ此金で  
ね無論さ此石塊が君の望む美しい女ミかわるのだ  
よ、

これにてベツツナイは嬉しげによだれを出す

平 オイ、アイヌ君よだれがたれてるよ、

ベ へ……………

苦笑するミ同時に穴の中よりアノコ飛んで來りい  
きなりベツツナイの肩にいきよよく抱きつく四  
人は驚いて、下手へバタノミ逃げる、  
ベツツナイは熊を抱きしめる、

ベ 何だノ一人ゐるのは淋しいか、かわいそうだが  
待つてゐろ！

シツト熊ミ氣味合四人不動の姿にて此様をじつミ  
見る。  
—— 暗轉 ——

第二 枝幸町望雲館階上大廣間

本舞臺通りの平舞臺の大廣間、正面は長崎風の立派なる大襖は左右に開き高尙なる高欄付の廊下、正面は庭の背景、上手に本床好みの大幅、大花生瓶に松の老木を風雅に生け、置物其の他立派なる品は正面に、赤地仕立に大額を掲げる、上手斜に瓦燈口の出入は扉、上手寄りに緞通を敷き、猫足大名火鉢、立派なる齋、脇息、銀づくしに茶道具、巻畫の文臺に香をたいてある下手に鏡一本はめ込んだる朱塗りの大衝立を置き中央に唐木の臺に白絹を敷き其上に前の石が安置されて有る、總て一流の料亭大廣間の體、詭らへの賑やかなる離しにて道具納まる、明燈する

藝者里榮、愛三、福太郎、菊助、玉吉皆々好みの拵へにて、砂金層の廻りを圖形に座して各自指輪金かんざし、櫛、腕時計、平打かんざし、金縁のカマ口等をぬいて石さくらべてある

里 チョイトぎう、慥かに私の指輪と同じ色よ、  
愛 全くね、斯んな石の中に純金があるなんて不思議だね、

福 本當ね、飯島の旦那は大變な物を見付けて入らつたのね、

菊 こんな物山の中に一杯あるのでござさ、  
玉 うらやましいはね、此石一ツだけだつて指輪の二ツや三ツは出来るだらうね、

里 冗談お言ひでないよ、二ツや三ツ處か平打ちのかんざしなら百本位取れるのだよ、

愛 まア欲しはね、

里 そんなに欲しけりや愛ちゃん此ま、お前さん貰つたらぎう

愛 頂きたいね、モシ頂いたら金かんざしなんて百本は入らないは此の石に足をつけて此儘島田の根ざしにさして見たいはね、

福 愛ちゃんらしい事云ふのね、此石此儘根ざしにしたら、頭おしつぶされて死んで仕舞うよ

愛 イーヨ此不景氣に純金さ心中したら本望よ

皆々 違いなしたわ、オホ……………

端唄になつて下手廊下より、秀若、若き藝者の拵

（物思ひに沈みし氣性にて出て來り）  
秀 オ、皆様、此處にゐらつしやつたのですか

言ひつゝ上手の柱に身を寄せる

里 オ、秀ちゃんお前さんさ飯島の旦那の命令で此座敷へ來たのでしょ、

エ、さうなの、

でしよう、一番お互に腕によりを掛けて競争しようぢやないか、旦那が連々に歸つた彼のアイヌ人ね、あれをうま／＼物にすれば五百圓だござ……

チョイト靜かになさいよ、下の座敷には飯島さん

が砂金を見付けた前祝だ。澤山な會社の方だの工夫まで招いて、大騒ぎの宴會ぢやないの、モシお耳に入つちや叱られるよ、

姉さんも皆さんもあのアイヌさんに本當に惚れてゐるの

止してお呉れよ、彼んな獸だか人間だが判らないアイヌに惚れる女がある者かね、詰り金が敵の世の中だよ、

エ、マ、つく／＼藝者稼業が厭やになつた。

思入れあつて座す、同時に上手奥にて仲居お笑の  
笑聲

オホ……………アハ……………

何がおかしいのだ、おかしけりやあつちへ行け。

ハイ、オホ……………

仲居お笑上手より出で來り中央に笑ひ倒れる、各  
自ふしぎさうに

オホ……………

チヨイミお笑姉さんごうしたの、

何がそんなに可笑しいの、

だつて飯島さんが連れて來たあのアイヌ先生かさ

ホ……………

姉さん、アイヌがごうしたのさ。

それがねお前さん、あのアイヌ先生が今お湯から

笑 菊

上つて來たのさ、オホ……………  
變な事が可笑しいのね

だつておかしいぢやないか考へて御覽なさいな、何處の世界に風呂に這入るに弓ミ刃をぶら下けてはゐるの、だもの

まあ、大變ね

笑 里

それだけならいゝのだがね、クル／＼裸になつて湯の中に飛び込むとすぐ顔色かへてさび上つてねおれはこんな氣持の悪い水の風呂へ入つた事はねへさ、あのアイヌさんお湯てへものは知らないのさ、いきなり水溜の水の中へ飛び込んでアゝゝ氣持ちださ來るの、だもの、笑はれないぢやならないわよ、

笑 里

オヤ／＼話をきいたゞけでふるへるわね

おまけにドテラを着せてやつたらこんな物を着ちやクスグツたいといつてね元の毛皮を着て私の顔を見てニヤ／＼ミ笑ふの、だもの可笑しいやら物凄いやら、たまらないから逃げて來たのよ

お笑姉さん、あのアイヌ先生おまへに氣があるのぢやなるの

止して頂戴よ、いくら惚れられたつてあの化物は御免蒙るわよ。

福

だつて姉さん、甘くやれば飯島から五百圓よ、

笑 津五百圓、五百圓になれば一寸考へるわねエ

此時再び、ベツツナイの聲

ベ オイ女々々々、女は何處へ行つた。

笑 オヤ五百圓が此處へ來るらしいよ。

皆 オ、來るわよ、

笑 シイ、

押へる、此の時奥よりベツツナイ弓矢を持ち出來る

ベ ヒヤ美しいメノコが澤山居るだ、まあキフーだナ

笑 まあ、おせじのい、事を被仰います事サア、

ベ まあその座ぶこんの上へ、

ベ なんこシヤモの手はきれいな手だなア、ヤきれいな腕だ、人間ぢやねへやうだ、

笑 まあおせじのい、事、そんな事を仰有るこほんこ

うにしますよ。

ベ 本當だベイ、アイヌは嘘はつかねエよ。

笑 まあ、此んは女殺しねエ

ベ ナニツ、誰が女を殺した、猪、狼は毎日殺して

るが、人間の女を何時殺した太い事をいやがるこ

承知しねえぞ

笑 一寸誰か替つて頂戴よ、

下手へ避ける、里菊はツカ／＼と出て

里 姉さん、いけないわ、こんな人に洒落も冗談も通

じるものですかね、オホ、、旦那今晚は、

べ お前は何だ

里 なんだつて藝者ですよ、

べ 藝者でなんだ、

里 まあいやだねエ、チヨイミ藝者こは何んだミ來た

わよ、

愛 里菊姉さん、あきれる事はないわよ、アイヌ部落

里 に藝者なんかあるものかね判らないのが當り前さ

愛 そうね、この先生を陥落させるのは中々苦戦よ、

里 藝者こいふのはねお座敷へ出てお客の機嫌をさる

商買よ、妾は高砂やの里菊云ふの覺へてゐて下

さいな

べ シヤモには妙な稼業があるのだナア、だがめつこ

いなお姫さま見たいダ、酋長の姫様だつてこんな

メッコイ事はあるめいなア

里 まあ嬉しいのね、チヨイミお氣に召したらさうで

もなるわよ、(手をつれる)

べ このあまつちよう、何をしやがるのだい

里菊をまつて投げる

痛い

里 一寸姉さん、やり方がまづいよ、つねりや紫、喰

ひつきや紅よ、なんてそんな意氣な事があの先生

に分るものですか



里

陥落方法をあやまつたわねエ

べ

何をいやがるのだ、あのあまア、何の意根があつて俺をつねつた、返答によつちや手前は射殺すぞ

里

フワ

愛

イエ／＼アイヌさん怒らないで下さいナ、内地の男なら藝者につねられたら喜ぶのよ、

べ

シヤモはそんな事を喜ぶか知らねえがアイヌはそんな事を喜ばねえぞ。

愛

まあ頼母もしいわね、男らしいわね同じ男をもつなら矢張り勇ましい力の強い男を持つて暮したいわネ (色目をつかふ)

べ

アラお前、眼をさうかしたのかい

愛

アラ嫌だ、感じのないのねエ、お前さんに秋波を送つてるのよ。

べ

秋波でなんだい。

愛

判らないね、氣があれば目も口程に物を云ふのを目が物を云ふ不思議だナア、アイヌ人は皆口でものを云ふのだが、シヤモは目でものが言へるこは成程開けたものだな。

べ

一寸、誰か變つておくれよ。

愛

さて、サア一度目で物を言ふてきかせてくれ、

笑

いえ、アイヌさん目でものを云ふこはお前さんに其人が惚れてゐるこ云ふ事ですよ。

べ

ぢやお前、俺に惚れてくれているのかい

愛

え、そうなのアイヌさん、さうでも自由にして頂戴な、

べ

へ、へ、へ

福

チョイと愛ちゃん、あんまり厚かましいぢやないの、そのアイヌさんはお前一人のものぢやないよ

愛

先んずるものは人を制するさ、これが軍略の奥の手よ

福

まア

べ

上手に行きすがつて

菊

一寸アイヌさん初めてあなたを見た時からボーッなる程惚れたのは妾よ、外の女に惚れちやいややお前も俺に惚れたのかい、へ、へ、へ、

べ

イエ／＼一番命限り思ひ込んだのは妾よモシヤ嫌やだなんて云つて御覽なさい、妾は狂ひ死に死んで仕舞ふよ

玉

ヒやお前は命がけて俺に惚れてゐるのかい。

べ

チョイとアイヌさん、一番命がけて惚れてゐるのは妾よ、あなたがお歸りになる時は必ず連れて歸つて頂くつもりでモウ家財屋財を荷造して大きな

べ

決心で此處へ來てゐる青松葉玉吉よ、こんな恐ろしい山奥でもお前さん二人暮せるなら本望よ、

べ

連れて歸つて頂戴な。

玉 べ ヒヤツ山の中まで一シヨに來るさいふのかい  
 エーお前さんの爲に命がけよ、  
 ヒヤトこゝ惚れられちや困るだナア  
 笑 べ なんの困る事があるものですか、内地の男にだつて、これ程女に持てる男はありやしませんよ、  
 嬉しいにや、嬉しいがこんな澤山カ、アは入らねエ、アイヌ人は男でも女でも一生に一人しか相手はよれねエのもの、  
 笑 べ まア頼母しいわね、  
 だだからよ惚れてくれるなら一人でいゝのだ、こんなに澤山女があつた日にや、おれの方がウロ／＼すら、  
 笑 成程さうかね、頼母しい國だね、それじゃ、さう  
 此中でお前さんが好きだと思ふ女があれば名指しで云ふて御覽なさいよ。  
 だつて耻しいだもの……  
 笑 べ まあ初心ねエ、此中に好きな人はあるにはあるのだがねエ  
 ……………(うなづく)  
 笑 べ おやあるの、誰、さの人云ふて御覽なさいな——  
 (顔を出して) 妾なの、  
 (ツラナイ首をふる  
 おや／＼)

福 笑 べ それじや妾、(アイヌ首をふる) おや／＼失  
 敗／＼、  
 愛 笑 べ それじやいよ／＼妾だね(同じく首をふる) オヤオ  
 ヤ落選々々  
 下手へ來る  
 二人 笑 べ オヤそれじやあの二人のどつちかなの  
 ぎつちもいやだ  
 おや／＼、  
 贅澤な事をいふやうだが初めてシヤモの女を見た  
 時にはこれもこれも神様のやうに美しいと思ふた  
 がヤツミ心が落付いてからジツト女を見つめたら  
 まつ白の物を顔へ塗つて赤る物を口につけて美し  
 い着物で持へ上げた飾り物が多いのに屹驚した。  
 そうしてみんなよくしやべるあんな女を山へ連れ  
 歸つたら山のアンコが呆れ返る、俺りや女らしい  
 女でなけりや、女房にするのが嫌になつた、  
 オヤ馬鹿に注文が贅澤だね、今時そんな女は一寸  
 内地にありやしませんよ  
 あるよ。  
 笑 べ ぎこにあるの  
 先刻から彼處にジツミうつむいてゐるあのメノコ  
 よ、彼奴等のやうに口数はきかずジツミうつむい  
 てゐるあのしほらしさ、俺の心は初めからあのメ

秀 ノコへ許り通ふてゐる、オイ其處のメノコよ、一寸來いやい。

秀若はオツ／＼と前に來り

御用でございますの

お前、俺見たいなアイヌ人は嫌ひだらうなア

イ、エ、

嫌ひやねエか、

エ、

嬉しなア手を堅く握る

あら、痛いわよ、

すまねえ／＼

チヨイミ皆さん、思はぬ處へ白羽の矢が立つたわ

よ、

つまり我々は月夜に釜をぬかれたのね、

ネツが事するこは此事よ

秀若さんはアイヌ向きに出來てるのね

矢張り牛は牛連れねエ

秀若さん

お楽しみ……………

やかましいお前等用がねえから外の座敷へ散つて

仕舞へッ、尻上げなけりや叩き出すぞ

オヤ／＼命仕事だよサア／＼皆さんおひらき／＼

全部上手へ入る、後に兩人顔見合して思入れ  
ねエおまへ、秀若ミ云ふのだつてね、

エ、さうなの、

ねえ、秀若よ今のやうな大きな聲を出したからア

アイヌ人は恐しいと思つてくれるなよ、こゝろ見えて

も氣がやさしいのだからね、お前ミ夫婦になつたら

腹一杯大事にするよ、俺もお前を可愛がるから

お前もおれを可愛がつてよ

エ、私もお前を可愛がるわよ、

ア、嬉しい、此の世の中に人間ミ生れてこんな嬉

しい思ひが人間にあるミ云ふ事を此年まで知らな

んだ、コレ秀若此の世を死んでゆく時はお前ミ一

緒に死なうなア

此時、鏡の衝立を見て驚き、秀若を圍んできつこ

なり

ヒヤツ誰だツ！ウヌは一體何處の部落のアイヌだ

ナニツ俺に向つて來る氣だな、よしッ、サア來い

弓矢をとれば仇矢のねえベツツナイだサア來い

弓に矢をつがへる、秀若はそれを止めて

チヨイミ貴方氣が變になつたのぢやないの、しつ

かりして下さいな

止めるな／＼お前に怪我をさしチャ大變だ何處の

部落のアイヌか知らんが俺の命をさりに來やがつ

秀 ベ 秀 ベ 秀 ベ 秀 ベ 秀 ベ 秀

たのだッ

アレ氣を靜めて下さいよ、何處にも誰もゐやしませんよ

居ねエ事があるものか、ソレそこに、ヤ、俺も同じ様にきれいなメノコを連れてやがる、ソレ／＼そこに

そこに

ソレ／＼お前の顔によく似たメノコを連れてゐるべい

まあいやですよ、吃驚したわ、あなたあれは鏡ぢやないの

鏡？鏡ミは何だ。

アラ鏡が判らないのね、あれは硝子でこしらへた姿見よ、それに貴方ミ私の姿がうつつてゐるのよ

なんだ俺ミお前の姿がうつつてゐるミ、道理であるメノコの顔がお前によく似てゐるミ思つたよ、

似てゐる筈ですわ、妾ですもの

アレはおめへだなア

そうですよ

チヨイミ、あの方向いて立つて見

こうですの

オ、同じだ／＼すわつて見な

こうですの

ベ

お前がすれば鏡もするわ、面白いな、ヤッ俺が笑へば笑つてゐやがる、イヨ／＼俺がする通り寸分違はず鏡もやるよ／＼面白いな／＼ハハ、フム俺の顔はこれか、オ、俺の顔はこんな面か初めて見る自分の顔、ア、耻かしい我面乍らなんて恐しい面だ、なんていやな面だ人間か獸か自分でさへ判らねえ、俺のお袋や父さんはナゼこんな顔形に生みつけた、こんな面で町へ来て大きな耻をかきに来たのかッ

思入れにてツツと沈む、秀若は氣の毒さうに側へ来て

ねエ貴方さんの顔だつてお姿だつて男に見得は入りませんよ、顔や姿はさうでもいゝのよ、

腕にすがつて云ふ突然に

うそつきメノコめッ

ポンとける、秀若は呆氣にさらされて

貴方、私をけつたのねエ

オ、けつた／＼嘘つきだから、けつたのだ、アイヌ人には嘘はねえのだ

私は何を嘘をついたのですよ

お前俺に惚れてゐるミ云ふのは大きな嘘だ、嘘つきめッ

きめッ

秀

なんのそんな

吐すな嘘つきめノ、こらッよく物を考へてみいシ  
ヤモだつてアイヌ人だつて人情には變りはねえぞ  
誰だつて美しいきれいなものは好きだ、汚ないみ  
にくいものは嫌なのは當り前よ、見ろ俺の此面を  
生れて初めて見た俺の面我面乍らなんと恐ろしい  
きたねエ面だ、人間だか獸だか別らねエ此面構へ  
きたねえ面だ狼の糞みたいな面だ、これが自分の  
面は今日の今まで知らなかつた、ア、情けねえ  
ノ、それにノ、お前はさうだメンコいだ美しい  
だお姫様の様に美しい神様のやうに氣高いだ、俺  
は傍にかうしてゐるさへ身がふるへる程美しいお  
めへが女房になるなんてうそつきめツ理由も道理  
も道理も知らねえがこんなきたねえ俺の面に女神  
のやうなおめへさんが惚れたのなんのミ嘘つきめ  
ツ、アイヌ人には嘘はねエのだ、うそつく奴は打  
ち殺したつて構わねえミ云ふアイヌの掟を知らね  
エか、知らなきや此處で教へてやらア

弓矢に手をかけるにすがり

秀

アレー待つて下さい妾が悪かつたわ、許して下さい  
い、なんば靡育ちの女でも神様の様な心を持つ  
ていらつしやるお前さんに勿體なくつて嘘は云へ  
ません、本當は貴方に惚れてはるませんのよ。

ベ

ソレ見ろノ、それになんて惚れたなんておそろし  
い嘘をつくのだ

秀

許して下さい、夫れもみんなお金の爲ですよ。  
ナニツ金の爲だ。

秀

淺しい女だミ笑はないで置いて下さい、お金が慾  
しさに頼まれて心にもないお前さんに……………

ベ

惚れたミ嘘をついたのかいッ

秀

堪忍して下さいよ、私計りか今の人藝者達も皆  
飯島さんに頼まれてね……………

ベ

フム、飯島てへのは俺を此處へ連れて來たシャモ  
かい、

秀

え、そうなのよ、  
ハテ、判らねエシャモ、女は人に頼まれて皆それ  
から男にほれるのかい、

秀

い、え、それも皆お金の爲に心にもない人に任  
して弱い女は泣かされて血の涙で暮してゐるのよ  
早い話が金の爲めに澤山な藝者衆が飯島の旦那に  
頼まれて好きでもないお前さんに惚れた顔して女  
を飼食にお前さんが知つてゐる齧脈さやらを聞き  
出そうミ大きな嘘をついてゐるのぢやありません  
か、

ベ

アノ畜生め、あのシャモめ油断がならねえア。  
またお前もそんなに金が欲しいのかい、見りやこ

秀

んな美しい家に住んでそんなきれいな着物を着て結構な身の上で、まだその上金がほしいのか。

何が結構なものですか、私は藝者よ、こんな身なりをしてゐても心で泣いて笑顔で送るはかないからだ、妾は此の家へ賣られて来たのよ。

べ

賣られて来た？人間が賣られて来たとは可笑しいね、一體誰に賣られて来たのだい。

べ 秀

お父さんにさ。  
ヒヤツ、シヤモてものは金がほしいミ大事な自分の娘を他人に賣るか、恐ろしい真似をするものだね、虎、狼の様なおつかねえ獣だつて我子を失へば真夜中でもホウ／＼泣いて山の中をウロ／＼

して我子の行衛を探してゐるぜ、それにおめへの様な美しい子を金が欲しさに人に賣るは虎、狼より恐ろしい、シヤモは顔は美しいが心の中は地獄の鬼だ、賣る奴も賣る奴だが買ふ奴も買ふ奴だ

ナ

それもこれも親の爲なら仕方がないわ、今度もお父さんの商買の手違ひから無利な高利のお金を借りてあした中に五百圓の金を返さねば詐偽した罪で訴へられてお父さんは監獄へ行かなけりやならないのですもの

べ

監獄てへのはなんだい、

秀

オヤまあ監獄をお存じないとはうらやましいほど罪のない、お前さんは幸福なお身の上ね、監獄といふのはね此世の地獄よ、悪い事をした人間を二年でも三年でも投り込んで置く處なの、

べ

悪い事とはどんな事を悪いミ云ふのだい、人を偽したり、人を殺したり、人の家に火をつけて焼いて見たり、人の物を盗んだりね、

秀

一寸待て、何故そんな恐ろしい真似を人間はしなけりやならないのだ、

べ

サア、それが皆金ミ云ふ恐ろしい悪魔のためよ、ナニツ悪魔、フムお前の目には金ミ云ふものが悪魔に見えるかい、

秀

え、見えますとも恐ろしい悪魔ですわ、金ミ云ふものさへ此世になくば妾もこんな恥かしい、つらい、つこめはしやしないわ、

秀

夫れにさつきの飯島ミ云ふ男は金ほご人間を幸にする者は外にはないミさう云ふた、シヤモの住んでゐる世の中は不幸だか、幸だかおいらにやちつとも判らねえ、

べ

イ、エ不幸よ、お金で幸福になる人は百人の内一人か二人、後の九十九人は金の爲に大抵命を縮めて居ますわよ、生きた證據は目の前に今の妾を見て下さい、今晚中に五百圓の金がなくなれば明日は

秀

見えて下さい、今晚中に五百圓の金がなくなれば明日は



恐ろしい監獄へ親を入れねばなりません、助けて下さいアイヌさん、こんな汚れた體ですがお前の自由になりますから、たつた一人の大事な親、此寒空に監獄へやるのを助けて下さいな

これはまた、なんて可愛想な身の上だ、惚れてもゐねえこの俺に金の爲めに自由になるさほシヤモの世の中に暮す人は氣の毒だ、監獄ばかりが地獄ぢやねえ、こんな美しい着物を着てこんなきれいな座敷の中にこんな地獄があろうさはおいら夢にも知らなんだ、女神のやうに美しい姿で此世へ生れ乍ら金のために恐ろしい獸の様な此俺にござうでも自由にしてくれさば熊祭りに殺される熊よりはるかにいじらしい、胸が痛い、ア、頭が痛い、アア目からこんな汗が出て来たよ……こりやなんだ嬉しいわよアイヌさん、妾の爲に泣いて下さつたお前の涙よ。

涙、オー涙、涙、人間には涙さいふものがあつた山へ這入つて何十年アンコミニ二人で毎日楽しく笑つて暮した、そうして涙さいふものを忘れてゐたに嫌なノ、町へ出てお前の話に泣かされて情けねえ、俺の涙を俺が見た、ア、また、涙が出て来やがる、エ、泣くなよメノコ、泣いてくれるな、おめえが泣くこおれだつて涙がちつさも止りやし

ねえや——ワア……

此時、飯島、平手の兩入出て來り此の様子を見てイヨー、社長御覽なさい、乙な寸法のぬれ場ですよ。

これは驚いたねオイ秀若すごい腕だね、ミラノ、甘く射止めたね

飯

イヨ色男々々

飯

色男さは何が色男だい、何をしやがるのだッ

飯

アイタ金さ力がなかりけりさば色男の本文だが此

平

色男は大した力だよ、ハハ……

べ

ハハ……つまり痴蝶の夢を破られて一寸お冠りですな、ねえ色男……

べ

俺は色男さ云ふ名前ぢやねえ、俺はアイヌのベツ

べ

ツナイミ云ふのだ、オ秀若サツキこんな紙屑を五

べ

枚もらつたこれをお前にくれてやるからこんなものでも役に立つならお父サンを監獄へはるらね

べ

僕にして上げろ(手ににぎらす)

秀若

有難う

べ

禮に及ばねへ早く行け

秀若

ハイ(喜び下手へ入る)

飯島

これはナカノ、當てられるね、サアアイヌ君のみ

べ

直さうよ

べ

おれはそんな處へ行かないよ。

飯 それぢや、何處へ行くつもりですな

べ おれは此儘山へ歸るのだ

二人 へエー

平 へえ、何かお氣に入らぬ事があつたのですか

べ あつたよ、

飯 何が氣に入らないのだい

べ 何も彼も氣に入らねえ、こんな處へ連れて来て目

から汗を出したぞ、この恐ろしい世の中が氣に入

らねえ、金のためにはどんな事でも平氣でやるお

前らだ、恐ろしくなつたから山へ歸るのだ、人が

泣いたり泣かせたり、嘘をついたり、苦しめたり

きれいな面はしてても金のためには深山の奥の

虎、狼より物凄いやをならして噛み合ふてる都

會の町が恐くなつた、俺は矢ッ張り山にゐる手飼

ひのアンコが戀しくなつた、定めてあいつも淋し

い顔して俺の歸りを待つてゐよう、俺もアンコに

逢ひたくなつた、縁があつたら又逢ふぜ

オイ、一寸待つてくれ冗談じやないよ、今君に歸

へられてたまるものかい、今日の宴會だつて中々

安くついてはゐるないよ、喰ひ逃げされてたまるも

のかい

飯

い、嫌だミ云ふのに無理矢理にこんないやな町の

中へ手前が引ばつて來たのぢやねエか、

それはそれに違ひはないが、歸るなら歸るで此の

金礦の礦脈の有所だけ言つておいてくれ給へ。

嫌だ云はねエ、金のために人間は悪い事をする奴

が多いさきいた、そんな中へ澤山な金のありかを

知らしたらおそろしい人間は何をしだすか知れや

しない、云はずに山へ歸るのはお前さんの身のた

めだ、甘い物を食はして貰ふた返禮に金のありか

を云はぬのはお前さんへの御禮心だッ

待てッ

飯 何をしやがるのだ

平手君、座敷にゐるものを全部來いミ云つてくれ

たまへ

飯島 貴様俺をさうするのだ

貴様を歸してたまるものかい

何しやがるのだッ

これにて平手飯島二人上手へ入る同時に上手より

工夫社員大勢バラ／＼と出で立廻り

飯島

まてッ

何か用か馬鹿めッ 木がしら (暗轉)

ベツナイは花道へしづ／＼這入る (幕)



# 毛谷村問答

○ 川尻清潭  
△ 實川延若

○今月の『毛谷村』は誰の型で勤めるのです、又何か變つた趣向でも見せやうと云ふのでせうね。

△私は歌六さんの六助でお園を勤めたのが始めて、其時に覺えたのですから、土臺の骨組が歌六さんで、外にいろいろのを見て、自分の工夫も加へて居ます。今度は松島屋の追善興行に云ふ所から、十代目片岡仁左衛門の型さして傳はつて居る、後の着附を黒天鷲絨に銀糸の石持の紋付で演じやうかとも思つて、今その思案中です。

○私が知つて居るのでは、前の間が荒い綺に飛白の肩入、後が淺黄緋の石持付ですが、團十郎の六助は、微塵彈止が花道へ引込むと、すぐに納戸へ入つて淺黄緋の石持に着替へ其上へ白の手拭を片襷にして出て、縁端へ來て折柄の鶯

の音を聞き、三段へ腰を下して「刻限も違へず鶯がもう鳥屋に來た」云々から佛壇の方を一寸見返つて「如才ぢやごんせぬぞや、必ず叱つて下さるな」の臺詞を云ひ、立つて佛壇の花さしを手に取り、二重から一りて、其處に置いて在る手桶の水を、杵杓へ汲んで先づ口を漱ぎ、次に花差へ水を足し、片襷を外して濡れた手を拭き、手拭は帯へ挿んで上へ上り、佛壇へ花を備へてから座つて、鉦を叩いて唱名をするに云ふ手順です。但し又着物は替へずすぐに佛壇の前へ座つて、亡き母に甘えるやうに「必ず叱つて下さるな」を云ふのもある。其外幸四郎の六助は、額を割られた血汐で着物が汚れた心で、微塵彈止が入るにすぐに着替へて仕舞つて、跡で大小霰の袴だけ着ければいゝやうにし

て居ます。

△私は後を淺黄天鷲絨の石持で勤めた事があります。天鷲絨を着るのは時代物の氣分を出す爲で、關西で多く用ひられるのは、人形から出た型であらうかとも思はれます。併し今度は私の考へで、最初試合の間を淺黄緋の石持でやるつもりです、それは試合をする場合、言はゞ儀式的にも他所行きの着物を着替へて相手をする方が、本當であらうと思ふ所からの工夫です。そうして試合が済んでから横堅縮の平常着を着替へ、最後にもう一度淺黄の石持を着て、其上から袴を付けるのですが、それを舞臺でやるに長くなるので、納戸へ入つて鐵砲玉の袴まで附けて出ます。其間の舞臺の明かないやうに、前から門口に乾してある、出世模様しゅっせの着物をお園が取外して来て、小供に着替へさせるに云ふ手順です。

○東京ではアノ袴はかまを着る時の三味線を特に『六助の物着』と稱する位で、それが特に作曲してある物だけに、それを下座に弾かして、大概はお園に手傳はせて舞臺で着るのが例です。

△今幸四郎さんの話が出ましたが、私は今度徹磨彈正に額を割られる事をやめやうと思つて居ます。

○是非とも必要である條件はありませんが、本文には山賤が疵きずを尋ねる文句があつて『入口の石に蹴つまつき、竹垣で摺破つてのけたのぢや』とあります。此句を受けて居るだけ、跡の腹立ちが強くなるに云ふ趣向でせう、しかし必ずやらなければならぬに云ふ譯もありません。

△話が飛びましたから、跡へ戻して順に云ふに、花道から小石を入れたザルを引て小供が歸つて來ます。六助が玩弄具箱を出して相手をしてやる、何を見せても氣に入らない、そこで太鼓を叩いてやるに喜ぶ、六助は興に乗つて『これは天地をひろめ給ひし神武飴』云々、飴やの唄を歌ひ乍ら太鼓を打つ、小供が浮かれて踊るに云ふのがあります。○院本には無い事ですね、しかし其飴屋の唄は醍醐菅原の飴賣の淨瑠璃にも、似たやうのがあつたと思ひます、古いものでせう。

△今度はやめるつもりです。それから次ぎに、小供が膝へ寢て仕舞ふのを、抱いて二重の上へ上つて、寢かし附けて枕元へ二枚屏風を立て、やる、お園の出になつて、お園が門口に干してある小袖に目を付ける、非人共が打つて掛るのを追散らして、ボンミ内輪に足を踏出して、それが自然に外輪に極るに云ふ見得の所、六助は其足へ目を付ける事に

して居ます。

○お園は富士郎の型、彦三郎の型なきが多く用ひられて居ます。

す。其處で六助が「見れば實僧の質無僧、余つ程味をや

りおるな」を答めるのに對して、お園は女の調子で「ナー

ニ」を云つて絃で「ツン」を受けさせてから、今度は男に

なつて「質無僧の實僧とは」を云はなければ、本當にお

園を知つて居ることは言はせない、さへ傳へられて居る箇

所です。其他「うつかり眺め見れ居る」で白をズル／＼

と引摺つて臂を突いて見惚れる所「何の家來の一人や二人

さうなをしたが」で白を持上げて下に置く所、いづれも彦

三郎の型にして傳へられて居ます、それから舞臺で髪を結

直して、島田に結んで刀の下緒を根掛けに掛けるのは、こ

れは富士郎の型だそうで、梅幸が鮮かな手練を見せます。

△あすこはいろ／＼にします。袈裟を取つたり、三衣袋を外

したり、帯を前へ廻したり、六助の腰に挿んで居る手拭で

姉さんかぶりをしたり、中々急がしい所ですから、私が歌

六さんに教はつて勤めた時のお園は、帯は前で結んで挿ん

だなり、後へ廻さないで女の姿を見せて行くに云ふのが味

噌で、又手甲なごはサワリの中で取る運びになつて居まし

た。白を持上げるのはよく見ますが、女の仕料としてミウ

でせう、私のは「さうなをしたが、よいわいな」で、前に  
引出したのを邪魔な物を捌くやうに後へ押しします、お園の  
衣裳は織物で縁を取つたやうな物を着たらと思ひます。  
○東京では無地のあづき縮緬に黒の丸帯です、此方が跡にな  
つて色氣が出るやうです、梅の枝を折る時に緋縮緬の繻紵  
の肌ぬぎになります。

△六助が「何でござんす」を大きく言つて、小供が目を覺し  
た心に「われぢやない／＼」を叩いて「梵論字さん」を云  
ふのは歌六さんです、私は「何でござんす」で、小供を覗  
いて一寸叩いてゴロリと腹這ひになつて「梵論字さん」を  
云ひます。

○園十郎は煙管で一つ下を叩いて前からの寢轉んだ儘で「梵  
論字さん」を云つたやうに覺えて居ます、それからお園が  
短刀を抜いで斬かける、小供が出て抱附くのを小脇に抱へ  
た見得は、誰でも短刀を見物席の方へ向けて振上げるのが  
當り前ですが、五代目菊五郎だけは、見物席の方へ手の甲  
を見せて、短刀は後へ向けて見得する、其形に女らしい優  
しさのあつたのを覺えて居ます。

△話が入組んで前後する所もありますが、お園が斬つて掛る  
六助は煙草入を投げる、又煙管で受ける、屏風で止めて下

へ飛降りて、其屏風へ臂を突いた見得は紋切形の通りにします。

○團藏はそれを皮肉に、裏向きの見得で、お園を見上げて極めるのです、空釜を焚かれるので、それを取るのに、熱い思入れで動かし乍ら持つて来て手水鉢へ入れて、両手で耳を押へるのは普通ですが、團十郎は無難作に片手の袖口で持ちました『無理に上座へ押直し』は真ん中へ釜を伏せませす。

△私のは下へ下りてやりませす、下手に直る臼を横にして轉がすので、お園はそれに押れる心持で跡へ下り、へたくしに坐る順序です。

○珍型ですね、其臼の始末はさう附けるのです、△後に自分で下手へ引摺つて来て腰を掛けませす。

○お園の仕科で『甘の上を越し乍ら眉も其儘いかな事、か』ミ『か』の字一字を言つて『なほ含まぬ恥しさ』ミチヨボへ取つて語らせるのがありませす、場當りのやうです、此件の少し先じ『はつと許りにさうさ坐し、拳を握り悔み泣き』の所、團十郎の六助は、右の手を大きく上へ上げ、それを又大きく下して、左の袖口を段々に捲くり上げた儘、左の拳を握つた無念の形ちが立派であつた事、爰で搦みが出るのを上手のお園の方へ突やり、それを後向きでじつと見て

居ました。

△六助が『彦山の麓にて』云々の物語は、此頃大分略されるのを、私は院本通りそつくりやりませす。

○その物語の切れの『飛走る涙はらくらく、腹わたを斷つ思ひにて、慕ひ歎くぞ不便なる』の所、團十郎の六助は、お園の手を取つて見交し、チヨボの文句の止まりで左手の拳の甲で泣き上げました、老母が一間を出て臺詞を言ふ所『師の後室ミは夢いさゝか』で下手へ退つて裏向きの形ちで居ませす、『押戴きし敵々の』で二重へ上つて神棚の神酒を下して祝言の件がある、袖が斧右衛門を連れて来る、六助は下りてそれを見て 思入があつて『アノ是がフーンミ眉に皺』の所で、跡すさりで三段へ上つて腰を掛けるのが型です、又其先で『扱は袖の母をたらし込み』云々以下の臺詞は、頗る大時代に云つて『おのれ此儘』ミ切り『置くべーきーか』を甲で言つたなき、此段の臺詞廻しが有名なものでした、其勢ひで『胸も張裂く怒の齒がみ、庭の青石三尺（三寸ミ語らせた）』許り、思はず踏込む金剛力』で、始め掴み手拭を兩手に握つて引ちぎり、右の手の分を左の後、左の手の分を右の後へ投げ捨て、右足を踏出して、手先を開いた左手を前へ出し、右手を其下に受けた形の見得

で、庭石が持上るのです。

△團十郎は、三段（俗に入齒）を踏込んだき聞いて居ますが、そうではなかつたのでせうか。

○ザアそれが古くからの問題に成つて居るのです。私は自分の目で儘にそう覺えて居るのですが、大道具師の方を調べて見ると、三段を誂へられた事もあるこの事で、兩様にも證人が出て来るのですから、或はごつちか工合が悪いので、半で取替へたのだらうかとも思はれるのです。

△私は自燃石の二段の上へもう一つ石臼を乗せた三段で、それを踏込む事にして居ましたが、跡で聞くに京極屋三樹大五郎も此式であつたそうです、尙私は手拭をちぎりませんし、踏込みのしまりで見得も仕ないで、はつこ心付いて足を戻すに云ふ行き方です。

○これまでに成るのが中々の長丁場ですから、東京では爰で一つ見物に活を入れる意味にも、大見得が必要として用ひられて居る譯です。

△私の後は後に三段を下り掛ける所で、チヨボの文句の『ひらり三庭へ一足飛び』を活かして、踏込んだ場所に氣が付いて、それを除けて飛び下ります。

○大分理屈ですね、それでは天鷲絨を着なくともよさそうです

すね。

△イヤ其替はり小供が三段を下りる時に六方を踏ませて、見得もさせます。つまり小供の一つの演所にしてやるのです。團藏は上手へ石燈籠を作らせて置いて、始め小供がそこへ小石を積んで遊ぶ事にし、六助は後に燈籠の添石を踏込んだ事もあつたそうです。

○六助の臺詞で『申受けての敵討ち、お袋、女房』と言ひ掛けて、極り悪さうに『お前さんもマお出でなさいまし』云ふ所は大概變りがないやうですね。

△お園の臺詞で『油斷をされな、こちの人』と言つて顔をかぐす、私の六助はそれへ冠せて『アハ、、、』と大きく笑ふ事にして居ます。

○『一旦こそは得心にて』の所、普通は此臺詞の乗りを『一旦、こそは、得心にて』と云ふやうに、區切りを附けて云ふのが當り前なのを、團十郎は細かい區切りを附けずに、『謀り取つたる五百石、抱へられたも我情』と、一句々々を乗りの調子で續けて言ひ切りました、それを『岡太夫の乗り』と云つて、或不平を持つて關西から脱して、横濱へ来て居たその岡太夫に就て教はつたもので、『もつつけの幸ひ塞翁が、うまう出合うた、母』と大きく言ひ『女一恠』と



『ほ』字を遠慮勝に言つて、一寸襟の汗を拭く仕科をします。チヨボの『天地に慙ぢる』では、指を開いた左の掌を、見物の方へ向けて高く挙げ『義の一字』で、これも指を開いた右の掌で、左の掌を叩き、右の手と右の足を一緒に前へ出して来になり、右の手を二度舉げて居る左の掌の所まで持つて行つて上下して、股を開いてボンと箱に落ちた形ちで、今度は指を開いた右の掌を見物の方へ見せて高く挙げる、つまり始めは正反対な形ちで、左の手を下へ添へた大見得をして極ります、絃が『チャ／＼／＼』と同じ乗りの調子で『鬼神なりて京極内匠、我見る目からはへ、ひみつまみ、フ、ハ、ハ、』と爰で大きく笑つて跡を素の臺詞で『しかし御知行戴くうちは、殿の御家人討得難し』と云つて『フム、ツン、フム、ツン』と一つ／＼絃で受けさして、再び乗りに成つて『試合を願ひ勝つたる上、直に仇討御免の訴訟、元首押へて』でお園の方を見て『討たす』と大きく云ひ、次に老母の方を見て『討たせませ』と軽く云ひ、更に小供に向つて『坊んにも討たせてやるわいな』と、手を叩いてはすんで兩手で招く形をして『實にも鋭き魂を、見極め置きし吉岡が、眼力違はぬ若

者なり』まで一杯に、六助は六方を踏んで元祿見得をして極るのです。

△『しかし御知行戴くうちは』を言葉で云ふのは、私もそうして居ます、それが團十郎の型である事は知りませんでしたが、あなたかのを見た時、いゝと思つたので、ずつこそれで勤めて居ます、それからお園が梅の折枝、老母が椿の折枝を呉れるのを、私の六助は、其時分に小供を白の縁へ乗せて置いて、兩方とも小供に渡してやつて、兩手に折枝を持つた儘の小供を、右へ抱上げて下手まで行つて、足を割つて、左の袖を返した見得で幕を切ります。

○折枝の取扱ひはいろ／＼あります、梅と椿を右と左から兩襟に差す人、梅だけを襟へさし、椿は手に持つて居る人もあります、小供を抱くとお園が福草履を描へて出す、そこへ搦みが出る、椿の折枝で拂つてお園の方へやる、お園がこれを捉へる、搦みの目が飛出すなと云ふのもあります、團藏は幕外を附けて、抱いて居る小供を下ろす、小供が折枝を欲しがら、ごつちがいと見せる、兩方呉れし手を出す、二本とも渡して、扇を開いて、嬉しそうに小供を煽ぎ乍ら、俗に云ふ『春藤』の鳴物大小入で入るのが、頗る派手でよかつた事が言ひ傳へられて居ます。

△大體此位研究をして置けば結構です、しかし細目に渡つて言へば、六助が太鼓を叩き乍らの物語「聞かしかれや」で叩く事「なぶり殺し」で叩く事「尋ねでござんしたな」で叩くなきが急所である事、歌六さんは、話の間へ始終調子を付けて打込んで居ました事なきも知つて居ていゝ事とせう  
○仔細に云へばお園の仕科に就ても、まだく随分話があります。

△明日ももう一日話合つて、完全な『毛谷村研究』を拵へませうか。  
○そうすればいゝのですが、原稿の締切が廿五日なので、一度お断りをしたのを、『是非』云ふ註文で書く事にしたのですから、すぐに送らなければ間に合はないでせう、又此次に何か面白い狂言の時、充分にやりませう。  
(三月廿八日、東京歌舞伎座、延若子の部屋にて)

浪花座四月興行役割一覽

四條中納言隆資都大夫一中(仁左衛門)吉岡娘お園桶帶刀正行治右衛門娘お文實は一中娘おつる(我童)毛利音成袖斧右衛門楠次郎正時水野童之助曾我十郎祐成(千代之助)高條武泰信連(愛之助)奴友平大塚掃部助、下女しま(當之助)紀六郎右衛門仲居おきの(松鶴)鳴川曾平太野澤正四郎手代庄助(松壽)妹おきく舞子若松石掬丸(我久之助)侍女芳江(千榮藏)野田四郎下女おみつ(千代左)袖松作三輪四郎兵衛番頭忠八(我十)菊滿丸丁稚太郎吉童清里(義直)楠小次郎正儀舞子雛勇(ひさし)○衣川彌三右衛門微塵彈止實は京極内匠(巖笑)船宿長兵衛(卯三郎)原四郎三郎西郷吉之助黒川久太夫朝比奈義秀(壽三郎)衣川彌三郎長兵衛娘おすむ大磯虎御前藝妓岸野(霞仙)和田新兵衛高家(八百藏)侍女彌生家臣新吾(ゆたか)川村新吾豊後節三根介(雁藏)小ふさ(市郎)舞子玉鶴(蘆鷹)軍井軍八假壁屋勘八(市昇)袖槓藏大盡舞金太(蕙平)萬屋おきく流し彌七(延郎)袖杉兵衛寮番傳助(卯十郎)春風藤藏和田賢秀中村半次郎後に桐野利秋須賀千三郎(橋三郎)吉岡後家お幸(蕙女)大久保市介後に利通板倉屋治右衛門前身源四郎(市藏)毛谷村六助小寺一乘坊仲居お玉緯名豚姫(延若)

# 喫煙室

高橋 蓼雨

曾我廼家五郎は、己が北の方、即ち、和田安子夫人の前へ重き首を俛れて合掌、彼れ一流の特徴のある唇にて苦笑を噛み殺しつゝ、一分間に百何十回といふ急げしき瞬きを仕た。干時、昭和貳年參月十一日の夜。

×  
脚本御座れ、喜劇御座れ、漢舌御座れ、落洒御座れ、俳句御座れ、圍碁御座れ、散財御座れ、女御座れ、野球御座れ、トラム御座れ、マーザン御座れ、ピョン／＼御座れ、花札御座れ（マサカ）三面六臂、否、十三面二十六臂の彼れ五郎、博辯宏辭、煮ても焼いても喰へぬ代呂物の彼れ和田久一、忠臣藏で有名な天川屋義平、文豪ちぬの浦浪六、さ、泉州堺が産んだ三幅對の英傑彼れ一堺漁人も、此時といふ此時ばかりは鳴左衛門、オット失禮奥方お安の方の權幕にはウンさも、スンさもキユツさも言はれず石垣に潜んだ蟹のやうになつた。是れには曰く因縁古事來歴がある。大正三年の初夏、彼は歐羅巴へ漫遊した。

恰度、獨逸の伯林へ着いた時に歐州戦亂が起つた、當時英國の意圖はまだ判からぬ、付ういふものか、獨逸に於ける日本人のもて方は非常特別なものがあつた。

×  
チンブンカンブン通譯無しの啞旅行、母國出發の際は剛腹な彼も聊か心配したが、さて伯林へ着いてみるに三方四方から引張り風、朝つばらからビール酌の満を引く、晝はシャンパン、夜は葡萄酒にベルモット、鷺鳥の様なあの惡聲で、堺住吉反り橋渡る、さか、沖の暗いのに白帆が見えるさか、小唄を唄ふ踊る勿ねる飲む食う、連日連夜異國情緒に陶酔して大はしやぎ。

×  
土曜の晩、同胞の或る紳士が伯林の遊女屋を紹介すべく誘ひに來た。失戀得戀斯道にかけては戰場古參の強げ者、下々地は好きなり御意はよし、何も研究と二頭立ての馬車で砂煙立て、繰込んだ。

×  
白、黄、赤、種々の洋酒が運ばれる、聽て油繪にある様な肉體美の金髮美人と香水薫る一室へ閉ち込まれた。

×  
元より双方言語不通、啞と啞との寢物語、ア

イ、ラブ、ユーと言はうが、私、貴下、好きあります、と言はうが何が何やら薩張判からぬ。

×  
相手は水族館の魚の様な眼で凝乎五郎を見て居たが、廓育ちに似氣も無い優さしい女、妖精的な媚らかな頬に笑顔を湛え、メラ、メラペラ／＼／＼さ百舌鳥の様に轉るに同時に金齒の間から牛の様な涎たら／＼、双方取つて置ききの正月言葉の連發にて所謂情意投合、又逢う迄の印にさ翌日は大理石の柱ある家にて紀念の寫眞を撮つた。

×  
同年八月上旬、英國は獨逸へ對して戰を宣した、日本人は交戰國民同様に獨逸人の青い眼で睨まれる様になつた、五郎は時の駐獨大使の命で逃げ出さねばならぬ、止むなく悄然として彼の女と盡きぬ名残りの抱擁の禮、骨も砕けと堅き握手をして愛別、霧深き倫敦へ渡り、彈丸雨飛の中を抜けてつ潜りつ遁げ廻はり、命カラ／＼林檎色のネクタイへ大きなピンを挿して歸朝した。

×  
歸へる早々トランクの底深く忍びした紀念の寫眞を敬々數取り出し「此寫眞は獨逸有數

の貴婦人である、四海同胞の誼しみを厚くする爲め」も勿體つけて北の新地へ建てたまだ新らしい木の香のする我家の支關へ淵金の額さして、々敷く掲げた、奥方お安の方は來客ある毎に末代迄我家の寶なりと額を指して自慢した、その度毎に五郎は冷汗タラ、直視するに忍びなかつた。

×

歳去り、星移り、大正十二年の三月五郎宅の庭の小枝へ鶯が訪れて春を語り出した。

生憎彼が不在の日、獨逸で馴染になつたさいふチヨハ髭に背廣の立派な紳士がたづねて來た、お安さんは例の如く額を指して自慢した。紳士は腹を抱えて吹き出した。

「貴婦人……アツ……」

「そやおまへんの、？」

「何が貴婦人です、コレは春賣婦ですよ」

「ヒエツ……」

「而も、獨逸で有名な賤業婦です」

五郎の妻安子さんは開いた口が塞がなかつた。其會ならぬ權幕に驚きでもする事か、紳士は有る事無い事、輪に輪をかけ、走かけて嘲笑的に女の素性を素破抜いた。

紳士が歸へるなり子々孫々まで傳へる筈の曾

我廻家々唯一の重寶たる紀念の額は引摺り下るされ無慘にも八ツ裂きこなつて、塵溜箱へ捨てられた。

×

昭和貳年三月十一日の夕刊は『五郎が四月の中座を打揚げ後、北米組育へ喜劇視察に往く』と報じた。

×

東京芝公園の假寓でその夕刊を読む安子婦人は悔り仰天、皿の様な眼を睜つて邦樂座から歸へる五郎を待ち構へた。

「いんま歸つたで……オイ……唯今……」彼は大阪訛り丸出して座敷へ通つた。

「へん……何處の極道息子が歸りやばつたんだす」木で鼻を括つた突鋭鈍な挨拶。

敏感な五郎は展げし夕刊を一こ目見て妻女の肚の底が讀めた、お安さんはそこ喉を拭いて猛獸の様に眼を光らしチリ／＼と詰め寄つた。

さすがの曾我廻家五郎も居堪らず、泣いて居るのか笑つて居るのか判からぬ顔を仕て蟹の様に横しまに這うて次の間へ消えた。



# 道頓堀だより

(各座四月興行總覽)

## 編輯部

春が来て花と踊に色彩られる四月の道頓堀は、松竹座レザエーの「春のおどり」を初めとして、この度は最も大阪に於ける意義ある興行として二つの追善劇と一つの改革が行はれる。

それは明治の中葉の大阪劇壇に當時の中芝居、角の芝居、辯天座等と道頓堀に各派各流の名優が割據仰つてゐた隆盛期に出て、名聲噴々だつた十代目片岡仁左衛門の追善興行を、實弟にあたる今の仁左衛門(十一代目)や實子の我童を始め關西大歌舞伎一座で浪花座で蓋を開けてゐる。

中座には久々に歸阪した菅我廼家五郎一座が、故十郎の追善をなしてゐるの、古き傳統の文樂座が從來の長時間に亘る興行時間を晝夜三部制に改革したことである。春が来て、舞踊、喜劇と兎角に四月の道頓堀は賑やかなことである。

### 浪花座

先代仁左衛門三十三回忌に相當し、その追善興行として四月一日初日を開けて、非常な人氣を呼んでゐる。

出勤俳優は東京表より久々振りにて片岡仁左衛門親子に、片岡我童の松島家一家、これに亦東京より歸阪した實川延若、坂東壽三郎や當地より特に追善される故人に縁故の深い嵐殿笑、市川市藏、川蓮女、中村雀右衛門に病氣全快せる尾上卯三郎等の大名題揃ひである。

#### 一番目「彦山権現誓助劔」

昨年の南座顔見世に梅幸と幸四郎のお園六助で、特に鷹治郎の端役で「毛谷村」の上場を見たが、この度は「吉岡邸出立より」「毛谷村」迄を出し延若の六助、我童のお園である。

このお芝居は「鎮西御軍記」とい

ふ寫本に依つて宮本武藏の仇討に當嵌めて書かれたもので、梅野下風と近松保藏の合作である。天明六年十月竹本座上場の操淨瑠璃から舞臺に轉化されたもので、興味ある院本劇である。本誌に掲載されてゐる川尻清潭氏と實川延若丈の「毛谷村問答」を参照されたい。

#### 新作「小楠公」一幕

先代追善狂言として大森 雪氏の新作にかゝるものであるが、これは嘗て十代目がその晩年に正成に扮し、今の我童(當時東吉)の正行で櫻井驛の訣別を上演して非常な大當りをとつた事に因んで選ばれたものである。本誌に脚本が掲載してあるが、十一歳の正行が成人して弟正時、正儀と共に湊川の戦場の露も消えた亡父正行の弔合戦とも云ふべき歴史で有名な四條畷の戦を題材として兄弟の訣別を描いたものである。

この度は我童のために特に書脚

しされたもので、我童の正行を始め、ひさしの正儀で正時には千代之助が扮し義直は菊滿丸、尙仁左衛門は四條中納言隆資に出演してゐる。その他當之助の大塚掃部助松鶴の紀六良右衛門、松壽の野田四郎、我十の三輪四良兵衛等、松島家一門に延若の小寺一乗坊、壽三郎の原四良三郎、八百藏の和田新兵衛、橋三郎の和田賢秀等の新役揃で熱演してゐる。

#### 中座「西郷さぶた姫」一幕

池田大伍氏作の同狂言は、最近では大正十一年同座の四月興行にやはり延若、壽三郎で上演して非常な好評を博したものである。

この度は延若の仲居お玉(練名豚姫)市藏の大久保市介(後に利通)橋三郎の中村半次郎(後に桐野利秋)壽三郎の西郷吉之助等で京洛の風情、維新の大業正に成らんとする秋に、忙しく綯ひ交ぜられた不運な豚姫の姿には笑えてもその眞情には一掬の涙をそぐに吝ならぬ色も香もあるお芝居である。

二番目「都一中」二幕

故榎本虎彦氏作の同狂言は、當代仁左衛門の當り藝として既に定評のある自家薬籠中の逸品である當地では先に大正六年十一月中座に上演されて好評を博したものである。

この度は十一年振りの出し物で仁左衛門の都太夫一中、我童の娘おつる、千代之助の水野金之助、卯三郎の船宿兵衛、壽三郎の黒川久太夫、霞仙の娘おすが、楠三郎の須賀千三郎、市藏の源四郎等の主なる役制で、あの寂のある一中節の流祖都太夫の名人氣質を描いて、世に誇らめた寂しい人間の姿を見せた處に、この劇の眼目がある。

大切「大磯小磯」二幕  
この一幕は曾我十郎と大磯の虎の戀を描いた人間味豊かなお芝居で、松居松翁氏の傑作にかゝるものである。千代之助の曾我十郎、壽三郎の朝比奈義秀、霞仙の大磯虎御前で大活躍してゐる。

中座

こんごの「郎劇」は十郎の三回忌につき追善興行として四月一日に初日を出してゐる。

明治三十七年正月、曾我の五郎十郎兄弟の名をその儘に、曾我廻家五郎十郎と名乗つて歌舞伎から手を携へて出て喜劇を創立した義兄に當る十郎を、今日吾が喜劇界の第一人者とし一異彩として自他に許す五郎が笑の中にも涙ぐましい追善興行に狂言も新作揃ひで大奮闘をしてゐる。

第一「鴨川千鳥」二場

無粋な大工光藏に女房お久が藝者遊びを勧めること云ふ奇抜な筋。

第二「脱線」二場

この場で五郎、蝶六、大磯、小次郎等總出演で舞臺並に珍趣向の口面白く觀客を悦ばせる。

第三「金!金!金!」二場

本誌に上演脚本が掲載されてゐる。楠木木念仁翁の傑作。

第四「春雨の夕二場

「ある剛然非道の高利貸を中心にその甥の妻が可憐な世話女房振り」を發揮して、遂に叔父の無慈悲な直すと云ふ興味深い喜劇である。その主役金貸五左衛門に扮して同座へ初出演する曾我廻家十五といふ聞いたこともない喜劇俳優がある。然し故十郎の一門で、十郎そのまゝの藝風で各地を巡業してゐた文福と云へば當地では餘りに馴染ばうすが、地方では人氣のある俳優で文福、茶釜一座を組織して評判をとつてゐた。

それが今度五郎に見出されて名も十郎の十と五郎の五の字を貰つて「十五」と改名したのである。

第五「團山だん」二場

いかにも春に應はしいお笑ひの一幕で打出しとなつてゐる。

總役割は左の左の如し  
矢野良吉、中井女房おつま、アイヌ人ベツツナイ、龜田喜一(五郎)友達丑松、百姓井源重作、栗岡源太郎、僧六念(蝶六)女房お久、吉野妻お里、藝者秀若、老妓黄江(大磯)紳士山川、散髪屋

中井金太郎、炭藏家飯島時彦、石川芳舟(小次郎)佐伯龍五郎、隠居木田鐵造、仙覺院寛良、茶亭與兵衛(蝶七)女將おつる、女給おしづ、藝妓一奴(辨天)暫間二蝶、車掌北野、技手山田三郎(三郎)車掌寺田、出前持爲公(笑將)春日芳次郎、車掌向井、工夫光公(一郎)技手平手格太郎、下男平助(致雄)由井徳兵衛、暫間一蝶、豆腐屋源公(五樂)女かみゆい、お里、藝者里菊、上女中お花、藝者清榮(林蝶)店員村井、暫間四蝶(蝶太郎)師匠お白合、女中お花(胡蝶)女房お辰、藝者菊助、飯焚お今(柴蝶)藝者春駒、藝者愛三、上女中お松、藝者玉龍(時利)番頭平吉、宗蝶、揚弓屋お玉(信蝶)技手島山辨三郎(時右衛門)お豊、小菊(なつたれ)若者留吉、金貸吉野五左衛門(十五)

角座

久々歸阪の新聲劇一派が當座初出演で四月一日初日、晝夜二部興行で蓄を開けてゐる。

「俠骨幡隨院」六幕十二場

霸氣縱横の同狂言に就てはこれまで既に男伊達幡隨院長兵衛を中心とする劇は數限りない名目を取つて舞臺に表はれてゐるが之れは所謂神史小説に依つて傳へられた幡隨院長兵衛であり、又平井權八であり、旗本水野であつて、少しくつきつめて考へると不合理な男伊達、不合理な武士のきこちない争ひを矢駄螺に誇張した恨みがある。従つて態々な形色を執つて舞臺に現はされた長兵衛は何れも一篇一律の浮つすべりな長兵衛であつたが、此度は特に額田六福氏が新聲劇一派のために脚色されたもので原作は人間としての長兵衛をより深く描出した塚原濹柿園氏である。濹柿園の史的考證に附いては既に定評あるものである。氏の作中特に異彩を放つてゐる「俠骨幡隨院」は劇作界の巨星額田氏の麗筆と相俟つて辻野の權八、中田の長兵衛、小笠原の水野、和歌浦の揚卷、富士野の濃紫で一座が潑刺たる熱演振りは卯月劇團の見物で

ある。

中田の長兵衛、辻野の平井權八小笠原の旗本水野、富士野の濃紫で、その梗概は左の如し。

絹賣の彌市は熊ヶ谷堤で人手に掛り伊勢屋伊兵衛に支拂ふ可き金までも奪はれてしまつた。彌市の女房お米はそれが原因で病床に伏す身となり一家の家計は次第に不如意となつて行く平常からお米の娘お村の美貌に眼を注げてゐた伊勢屋伊兵衛は事を構へて亡き彌市の借金を矢の様な催促を向けたお村は又白柄組の加賀爪源十郎の毒牙に掛らんとしたが幡隨院長兵衛に救はれその経緯からお村の身の上も判り權八は何故か苦悶の態であつた。伊勢屋への借金を支拂ひ方方亡き父の仇敵を探し出さんものさ、お村は好いて苦海に身を沈めたが、やがて遊女揚卷の取なしで改めて權八と夫婦の契りを結ぶ。其夜權八は又日本堤に於て伊勢屋伊兵衛を殺して了つた。かうして權八と濃紫との戀

は次第に白熱したそれと同時に旗本對町奴の不仲もその度を増して行つた。一朝事が起るに及んで長兵衛が加賀爪源十郎の種ヶ島に斃れると權八は即座に源十郎を初り長兵衛に絡まる一切の罪を負うて出る權八の凡てを知つた濃紫は未來を誓つて自害する。

辨天座

文樂人形淨瑠璃卯月興行は既報の如く名篇揃ひで一日初日を出してゐるが、眞に太夫人形共に大革新を行ひ益々緊張した舞臺で三月興行は素晴らしい盛況で打ち越した一座は、此度亦從來の長時間制を廢して晝夜二部制として。晝の部午前十一時、夜の部午後五時開幕と改革され、時勢の好尚に適應した政策だと言はれてゐる。

晝の部「假名手本忠臣藏」

大序より七ツまでの通し狂言で「勘平住家の段」切勘平切腹は土佐大夫、吉兵衛で得意の語り場。尙「祇園一力の段」では津大夫の由良

之助、朝大夫のおかる其他幹部一同の掛合で糸は松太郎の大舞臺で見せる、その他の語り場は左の如し。

大序「鶴ヶ岡改め」(淀路大夫、稻丸以下)「戀歌」かけ合(源福大夫、友作以下)「殿中及傷」切(文字大夫、勝平)「裏門」(つげめ大夫、勝市)「扇ヶ谷」切(叶大夫、叶)「籠ヶ關」(綾大夫、八助、廣太郎)「山崎街道」口(相生大夫、町大夫、歌助、友之助、友造)

「二ツ玉」(奥角大夫、猿糸)「勘平住家」中(駒大夫、才治)切、土佐大夫、吉兵衛)「祇園一力茶屋」由良之助(津大夫)力彌(つげめ大夫)重太郎(相生大夫)喜多八(和泉大夫)彌五郎(島大夫)仲居(綾大夫)おかる(朝大夫)仲居(名大夫)亭主(鏡大夫)九太夫(大隅大夫)伴内(文字大夫)仲居(源路大夫)平右衛門(源大夫)三味線(松太郎)

人形役割

壱各判官、寺岡平右衛門(玉次郎)千崎彌五郎(玉七)石堂馬之



亟、早野勤平(髮龜)原郷右衛門(小兵吉)高師直(玉松)顔世御前(紋十郎)斧定九郎、一文字屋才兵衛(玉幸)桃井若狭之助(玉德)鷹阪内(扇太郎)斧り太夫(門造)大星力彌(紋太郎)藥師寺治兵左衛門(玉市)親興一兵衛(兵十郎)茶道珍齋(市松)加古川本藏(傳之助)一力亭圭(光之助)足利忠義(文之助)勤平の母(冠四)

#### 夜の部

前「義經千本櫻」  
切「三十三所壺坂寺」

夜の部は前狂言「義經千本櫻」大物ヶ浦渡海屋の段より壽しやの段まで切狂言「三十三所壺坂寺」土佐町の段よりお禮詣りの段まで、前「千本櫻」では文五郎の壽しやのお里、榮三の渡海屋銀兵衛實は新中納言知盛さいむの權太で活躍その他重なる役々は

座頭澤市(玉次郎)源義經(玉七)主馬野小金吾(髮龜)女房お柳實は祐の局、彌左衛門女房(小兵吉)武屋坊辨慶、壽しや彌左衛

門(玉松)若葉の内侍、女房お里(紋十郎)梶原平三景時(玉幸)入江の丹藏(玉德)下男彌助(扇太郎)等々

御靈文樂座に  
美聲を謳はれた

#### 菅太夫逝く

多年御靈文樂座に天性の美聲を唄はれてゐた菅太夫は六年前不圖した事から心臓を病み引き續き半身不随のために病床にあつたが去月十六日午前五時遂に不歸の客となつた。太夫は先代源太夫の門下中最も其美しい喉を以つて知られた男で本名は蜂塚直吉、紀州和歌山市に生れ壯年過ぎてから淨界に投じたもので、病氣で倒れるまで御靈文樂座に勤めてゐた。本朝二十四孝の四段目「先代萩」御殿の場などを最も得意として語つてゐた。行年六十六歳で遺族として天下茶屋柳通りの現在の住家に妻ゐい女があるばかりでそれすら目下病床にあるといふ氣の毒な次第である。尙告別式は十七日午後四時自邸でしめやかに執行された

#### 新劇の劇談會

浪花座の三月興行に第一「獅子に喰はれる女」第二「娘道成寺」第三「炎の空」の三狂言で當代新劇界の人氣を背負つて立つてゐる極島、水谷等の一派は從來の新派劇が問題のさなかにあつて然もこの人氣を博してゐるが尙明日の劇これからの新劇に對して互ひに胸襟を開いて抱負や希望を吐露すべく去月十八日正午より一座の梅島が經營する難波新地のカフェエブラムで新劇劇談會を開催した大變な盛會で來會者は劇園より梅島初め武田正憲、柳永次郎、高田亘、大矢市次郎、女優連は水谷八重子、西條靜子、新妻律子、東愛子其他一座の新進女優大勢に舞臺監督の水谷竹紫氏「炎の空」劇の脚色者である中井泰孝氏始め松竹合名社よりは日比繁次郎氏鳥江鏡也氏其他文士數名參會午後三時十分盛會裡に閉會した。

#### 東京四月の劇界

歌舞伎座は東西松竹合併とも云ふべき大合同劇鷹治郎、福助、魁車、吉三郎に中座出演中の羽左衛門、中車等地方巡業中の左團次一派に大磯に靜養中の歌右衛門が二十四日歸京と共に白井、大谷兩社長も參加し大評定を開きこれ迄になき大歌舞伎の出現▲本郷座は吉右衛門、三津五郎、時藏等一座が菊五郎一派の市村座連と合同し本年初めて菊吉顔合せをなし出した物に通し狂言の河内山と直侍、三千歳の「天衣紛上野初花」中幕は菊五郎、三津五郎の所作、大切は菊吉主演の喜劇▲松竹座は秀調、猿之助、壽美藏、松島、龜藏、芝鶴八下藏、小太夫等と河合武雄一派の合同出演▲市村座は澤田正二郎一派の新國劇「桃中軒雲右衛門」五幕六場を上演▲新橋演舞場は吉例の東おどり▲邦樂座は廣塚少女歌劇の公演▲帝劇は專屬男優總出演の本興行である。

第三回 川柳座句會

於・沖野邸

三月二十五日の夜

そは降る春雨の音をしのんで、ちよつと

川柳を駄句つてみるに應はしい夜だった。

その雨に縁があつたさでもいふのか『番傘』

からは岸本水府氏を始め同人諸氏が揃つて

来てくれたのは嬉しかった。本社の方から

は日比老人を始め編輯部總出であつたが、

満南北翁が松竹座の『春の踊』で多忙な

爲め出席を見なかつたのは残念だった。

末筆ながら沖野氏に大變にお世話になる

と共に御馳走に預かつたことを厚くお禮申

上げて置きます。久(二生)

三巴、啼二、波郎、牛耳郎、苔坑、文久

蝶二、義矢滿、乾坤、塊人、だん子、賢

公、水府、也郎、久二、桂三、克三、蚊

象、繁二、鏡也

金 互 選

スタイルの焦點といふ金一つ

帶止の金貨に見せるお人柄

金煙管一服だけで仕舞はれる

金一封中を語らぬ墨の色

金煙管結城と知れる柄で来る

金銀の砂に龍宮お正月

掌で金を踊らす頼母しさ

金鎖りの存在見せた車掌服

死ぬ段になつて金かなぐ

ウインドの金貨明治とよまれたり

犯人をさらへてみれば金づくめ

金の皿に南京豆が五つほど

金の字を大きく書いて勧めに来

金襴の上へ本願寺の埃り

おはぐるに金を光らす立女形

十郎 互 選

七三へ来て十郎はふら／＼し

腰の荷になる十郎の握り飯

十郎も矢張り仕舞ひは泣かせたり

太いのを残り十郎先に死に

十郎の夏瘡せ目立つ薬屋風呂

十郎は思ひ出されて死んでゆき

あげ幕を出る十郎へ笑ひ聲

十郎の漫書ソツ齒をかいてすみ

十郎の組へのんきな婆藝者

お目出度に十郎ヒヒと笑ふだけ

諦らめてある十郎にいゝ工面

アメリカの便り十郎寒からせ

十郎が泣くこ狐が踊りそう

十郎の組見を云ふ川猿汽

十郎がソツ齒を出す幕になり

十郎は舞臺の隅で笑はせる

尻からげで出た十郎の忙しさ

叱られる前に十郎丸くなり

起請文(替紙)

起證文寒い姿でしまはれる

水府

選

繁二

義矢滿

だん子

三巴

蝶二

塊人

啼二

同

同

同

同

同

同

同

蚊象

同

水府

同

互選

波郎





偶 感

姥 谷 生

◇脊だ——と思つたけれども、自由なくつろ  
いだやうな気がする。久しい間いぢけてゐた  
心持がほぐれて、大きく笑つてみたい、踊つ  
てもみたいやうな生の躍動を感じる。

◇それで「道頓堀」の四月號も、松竹座の「春  
のおどり」や中座の五郎劇のあるのを好機に  
春らしく「舞踊と喜劇」と言つた自由な囚はれ  
ない編輯を試みた。

◇表紙も狂言に因ますに、大塚君に銀などを  
つかつて、明るい道頓堀を描いてもらつた。

◇脊だ——と言つて、愈げたのでもないが、  
この月も發行を四日ほど遅れた。自分の「仕  
事」に辯解は無用かも知れないが、原稿のお  
くれるこゝや人手のたらないこゝが仕事の上

に支障して、まつたく弱らせられる。

◇おそらく編輯に携つてゐる者は、毎月のや  
うにちよつと見ても纏りのあるいゝ雑誌をつ  
くりたいと思ふに違いない。それがために餘  
儀なくおくれるのだが、しかし遅れたことは  
幾重にもお詫しておく。

◇誰だつたかその仕事によつて「椽の下の力  
持ち」になると言つてゐたが、雑誌の編輯な  
どもさうぢやないかと思はれる。それは一個  
の立場から言つたものだが、その仕事も多く  
の人びとのために、大きく劇壇のためになる  
かと思ふと、眞面目に努力しなければすまな  
いやうな気がする。

◇さにかく月を逐ふことに、内容も豊富に充  
實してゆくのを悦んでゐる。それに世間から  
認められて来たこゝまやよく賣れることだ。劇  
場などは飛ぶやうに賣れて行く。昔から大阪  
で出される雑誌は認められないのさ妙に賣れ  
ないことが定例のやうにされてゐる。これは  
各れも寄稿家及び讀者の御聲援の資として深  
謝してゐる。

昭和二年四月一日發行

月刊 『道頓堀』 第四月號

□ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。  
□ 郵券代用は一割増にて御註文を願  
ひます。

定價・金參拾錢

昭和二年三月三十日印刷  
昭和二年四月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社

編輯者 姥谷久一

發行者 成山桂三

印刷者 岡本省三

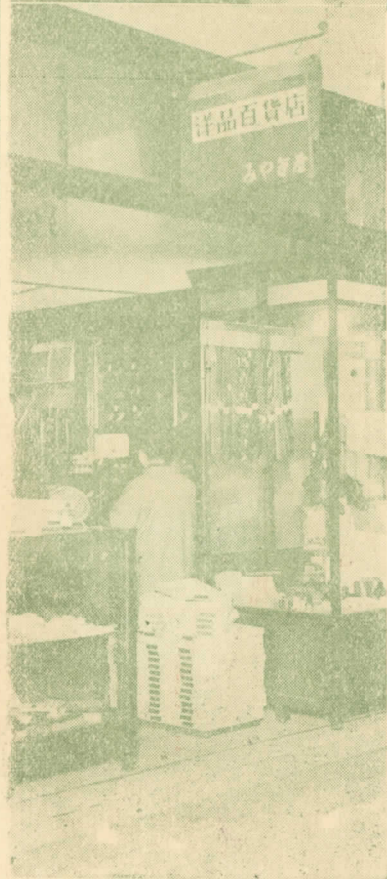
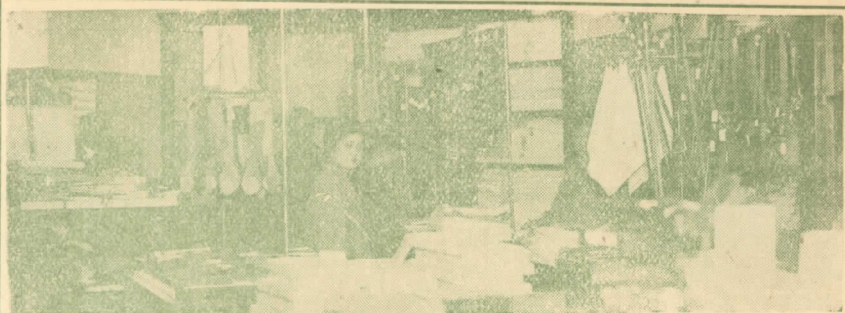
印刷所 大阪市南區豐谷仲之町三九番地

中村盛文堂

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社

電話(一三四〇番)  
(六六六五番)



大阪名所の堂ビルに

燦と輝く

みやぎ屋百貨店

流行の魁け

お値段の破格

品物の豊富

当店にお越の方は

キットこう言はれます。

とても洒流た品々が

競つてあなたをお待ち

してゐます。お立寄を。

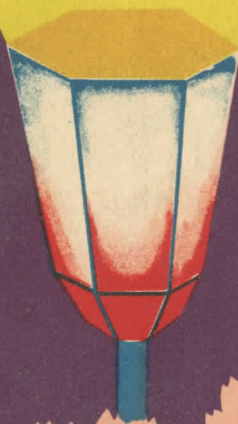
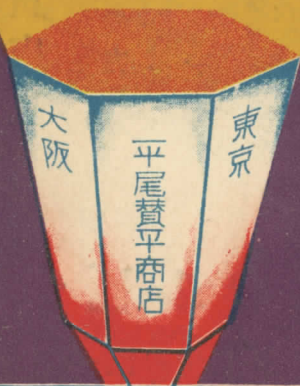
店貨百品洋のルビ堂

番〇九八五自) 北話電 屋ぎやみ階一  
番九九八五至)

昭和二年三月三十日印刷  
昭和二年四月一日發行

若く明る顔に  
なる

# ト白粉



金參拾錢 (二) 郵  
税

112